有岡城跡・伊丹郷町 Ⅱ

――ＪＲ伊丹駅前市街地再開発に伴う発掘調査報告書――

第２分冊

１９９２．３

伊丹市教育委員会
大手前女子大学史学研究所

有岡城跡・伊丹郷町II

——ＪＲ伊丹駅前市街地再開発に伴う発掘調査報告書——

第２分冊

１９９２．３

伊丹市教育委員会

大手前女子大学史学研究所

第27次調査（東より）

第35次調査（北より）

第35次調査　SF01出土遺物

第35次調査　SE02出土遺物

例　　言

1．本書は、兵庫県伊丹市による国鉄（現在のＪＲ）伊丹駅前市街地再開発事業に伴って、伊丹市伊丹１丁目において実施した、有岡城跡と伊丹郷町の発掘調査の報告書である。

　このうち、第23・24・30・36・38次分は、第１分冊として先に刊行したが、同時に収載することのできなかった、第27・33・35・40次分を第２分冊として、今回上梓することにした。

2．現場における調査は、大手前女子大学日比野丈夫学長を委員長とする「有岡城跡調査委員会」を組織し、大手前女子大学史学科教授藤井直正を調査担当者として、大手前女子学園が伊丹市の委託による事業として実施した。

3．調査は、昭和60年度・昭和61年度に亘って９次に分け、第23次を開始した昭和61年２月17日から、第40次を完了した12月２日に及んだが、この詳細は第１分冊に載せた「調査の経過」に述べた通りである。

4．現場における調査および資料の整理作業は、調査担当者である藤井直正の管理・指導のもとに、主任調査員川口宏海（大手前栄養文化学院講師）・前川要（現宮山大学講師）が担当した。調査組織・経過・参加者については第１分冊に明記した通りである。

5．本報告書の作成は川口宏海が担当し、調査員細川佳子（現在、伊丹市教育委員会嘱託）・萩野典子・赤松和佳が、学生諸君多数の協力を得て進めた。

6．本報告書は、本来一冊として刊行しなければならないものであるが、二分冊として刊行することになったのは、担当者の責任である。

　分冊として刊行するに当たって、事情をご賢察いただき、ご諒解とご配慮をたまわった、日比野丈夫委員長と指導委員諸先生、および伊丹市教育委員会生涯学習部の関係諸氏に深くおわびと御礼を申しあげる次第である。

7．内容その他必要な事項は第１分冊にくわしく記した通りである。合わせて参照されたい。

本 文 目 次

例　言

第1章　調　査　成　果……(川口)……1

第1節　はじめに……1

第2節　第27次調査……2

1　基本層序……2

2　I期の遺構と遺物……2

3　II期の遺構と遺物……8

4　III期の遺構と遺物……17

5　IV期の遺構と遺物……60

第3節　第33次調査……66

1　はじめに……66

2　基本層序……66

3　II期の遺構と遺物……66

4　III期の遺構と遺物……66

5　IV期の遺構と遺物……74

第4節　第35次調査……75

1　基本層序……75

2　II期の遺構と遺物……75

3　III期の遺構と遺物……86

4　IV期の遺構と遺物……104

第5節　第40次調査……111

Gトレンチ……111

1　基本層序……111

2　II期の遺構と遺物……111

3　IV期の遺構と遺物……114

Hトレンチ……114

1　基本層序……118

2　II期の遺構と遺物……118

Iトレンチ……122

1　II期の遺構と遺物……122

Jトレンチ……122

1　IV期の遺構と遺物……122

第2章　結　　語 ……(川口)……125
第1節　在　城　期 ……(川口)……125
第2節　伊丹郷町期と近代 ……(川口)……125
1　伊丹郷町期と近代の様相 ……125
2　伊丹郷町期Ⅲ－A期の遺物組成 ……127
3　おわりに ……132
有岡城跡・伊丹郷町の調査－その成果と課題－ ……(藤井)……136
あとがきに代えて ……136

図 版 目 次

巻頭図版1　遺構全体写真
　　第27次調査
　　第35次調査
巻頭図版2　第35次調査ＳＦ01出土遺物
　　第35次調査ＳＥ02出土遺物

図版1　第27次調査遺構
　　第27次調査全景
図版2　第27次調査遺構
　1　第27次調査南側
　2　第27次調査北側
図版3　第27次調査遺構
　1　ＳＥ09　断面
　2　ＳＤ11
　3　ＳＰ77
　4　ＳＦ01
　5　ＳＦ01　№1　畦
　6　ＳＦ01　北壁
図版4　第27次調査遺構
　1　ＳＥ08
　2　ＳＫ28・ＳＩ06
　3　ＳＫ28
　4　ＳＫ103・104・105・107・ＳＰ233
　5　ＳＥ03
　6　ＳＥ05
　7　ＳＥ10
　8　ＳＥ11
図版5　第27次調査遺構
　1　ＳＢ01　垂直
　2　ＳＫ152他・ＳＤ08・09・10
　3　ＳＫ129・130
　4　ＳＫ07・08
　5　ＳＫ74
　6　ＳＫ42・54・ＳＰ221
　7　ＳＫ137
　8　ＳＫ27
図版6　第27次調査遺構
　1　ＳＢ02・ＳＫ199
　2　ＳＸ01
図版7　第27次調査遺構
　1　ＳＢ01・ＳＳ03　墨書
　2　ＳＳ09　2段目　墨書
　3　ＳＫ18
　4　ＳＩ05
　5　ＳＩ01
　6　ＳＩ02
　7　ＳＩ04
　8　ＳＩ12
図版8　第27次調査遺物
　　ＳＤ11・ＳＥ09・ＳＰ77・ＳＦ01
図版9　第27次調査遺物
　　ＳＦ01・ＳＥ08
図版10　第27次調査遺物
　　ＳＩ06・ＳＫ105・ＳＰ09・ＳＥ03
図版11　第27次調査遺物
　　ＳＥ03・ＳＥ05・ＳＥ10
図版12　第27次調査遺物
　　ＳＥ10
図版13　第27次調査遺物
　　ＳＥ11・ＳＰ175・ＳＤ10・ＳＫ130
　　ＳＫ01・ＳＫ05・ＳＫ06
図版14　第27次調査遺物
　　ＳＫ06・ＳＫ07・ＳＫ08・ＳＫ34・ＳＫ54
　　ＳＫ63・ＳＫ74・ＳＫ42・ＳＰ221
図版15　第27次調査遺物
　　ＳＰ145・ＳＫ137・ＳＸ01
図版16　第27次調査遺物
　　ＳＸ01
図版17　第27次調査遺物
　　ＳＸ01・ＳＫ18・ＳＩ05

ＳＩ04・ＳＩ01・ＳＩ02
図版18　第33次調査遺構
1　第33次調査東側全景
2　第33次調査西側全景
図版19　第33次調査遺構
1　ＳＥ02
2　ＳＫ47
3　ＳＸ01
4　ＳＫ36・39・35・34
5　ＳＩ02・03
6　ＳＩ04
7　ＳＩ01
8　ＳＫ53
図版20　第33次調査遺物
ＳＫ21・ＳＫ47・ＳＫ36・ＳＩ04・ＳＫ53
図版21　第35次調査遺構
1　第35次調査全景
2　ＳＦ01・他
図版22　第35次調査遺構
1　ＳＦ01　畦
2　ＳＥ04
3　ＳＤ04・11
4　ＳＤ04　東壁土層
5　ＳＤ11　No.2畦
6　ＳＤ11　遺物出土状態
図版23　第35次調査遺構
1　ＳＥ02
2　ＳＫ34
3　ＳＰ110
4　ＳＩ11
5　ＳＩ12
6　ＳＤ07・08・ＳＡ01
7　ＳＳ18下面
図版24　第35次調査遺構
1　ＳＢ01　南東部とＳＢ02
2　ＳＢ01　南西部とＳＢ03・04
図版25　第35次調査遺構
1　ＳＩ02
2　ＳＩ05
3　ＳＩ09
4　ＳＩ10
5　ＳＩ14
6　ＳＫ191・ＳＩ06
7　ＳＩ07
8　ＳＩ04・03
図版26　第35次調査遺物
ＳＦ01・ＳＥ04
図版27　第35次調査遺物
ＳＥ04
図版28　第35次調査遺物
ＳＥ04・ＳＤ04・ＳＤ11・ＳＫ73
図版29　第35次調査遺物
ＳＥ02
図版30　第35次調査遺物
ＳＥ02
図版31　第35次調査遺物
ＳＥ02・ＳＫ34・ＳＰ110・ＳＰ102
ＳＤ07・ＳＤ08・ＳＳ18
図版32　第35次調査遺物
ＳＳ18・ＳＩ02・ＳＩ05・ＳＩ09・ＳＩ10
ＳＩ14・ＳＫ191・ＳＩ06・ＳＩ11・ＳＩ04
図版33　第35次調査遺物
ＳＩ07・ＳＩ04・包含層
図版34　第40次調査Ｇトレンチ遺構
1　第40次調査Ｇトレンチ二次面全景
2　ＳＦ01・ＳＦ03
図版35　第40次調査Ｇトレンチ遺構
1　ＳＦ01　土層
2　ＳＦ03　杭列跡検出状況
3　ＳＦ02　南壁杭列跡
4　ＳＤ02
5　第40次調査　Ｇトレンチ一次面全景
図版36　第40次調査　Ｈ・Ｉ・Ｊトレンチ遺構
1　第40次調査　Ｈトレンチ全景
2　ＳＦ01　サブトレンチ　No.1
3　ＳＦ01　サブトレンチ　No.2

4　第40次調査　Ｉトレンチ全景
5　第40次調査　Ｊトレンチ全景
図版37　第40次調査　Ｇ・Ｈ・Ｉトレンチ遺構　Ｇトレンチ　ＳＦ02・ＳＦ03・ＳＦ01　Ｈトレンチ　ＳＦ01　Ｉトレンチ　ＳＤ01

図・表目次

(第27次調査)
第１図　第23・27次調査北壁土層図……３・４
第２図　第23・27次調査南壁土層図……５・６
第３図　ＳＥ09遺構図……７
第４図　ＳＥ09出土遺物……７
第５図　ＳＰ09遺構図……８
第６図　ＳＰ09出土遺物……８
第７図　ＳＤ11遺構図……９
第８図　ＳＤ11出土遺物……９
第９図　ＳＰ77遺構図……９
第10図　ＳＰ77出土遺物(1)……10
第11図　ＳＰ77出土遺物(2)……10
第12図　ＳＦ01土層図……11
第13図　ＳＦ01出土遺物(1)……12
第14図　ＳＦ01出土遺物(2)……13
第15図　ＳＥ08遺構図……14
第16図　ＳＥ08出土遺物……14
第17図　ＳＫ28・ＳＩ06・07遺構図……15
第18図　ＳＩ06出土遺物……16
第19図　ＳＫ103・104・105・107遺構図……17
第20図　ＳＫ105出土遺物(1)……18
第21図　ＳＫ105出土遺物(2)……18
第22図　ＳＥ03遺構図……19
第23図　ＳＥ03出土遺物(1)……20
第24図　ＳＥ03出土遺物(2)……21
第25図　ＳＥ03出土遺物(3)……22
第26図　ＳＥ05遺構図……23
第27図　ＳＥ05出土遺物……23
第28図　ＳＥ10遺構図……24
第29図　ＳＥ10出土遺物(1)……25
第30図　ＳＥ10出土遺物(2)……26
第31図　ＳＥ10出土遺物(3)……27
第32図　ＳＥ10出土遺物(4)……28
第33図　ＳＥ10出土遺物(5)……29
第34図　ＳＥ11遺構図……30
第35図　ＳＥ11出土遺物(1)……31
第36図　ＳＥ11出土遺物(2)……32
第37図　ＳＢ01遺構図……33
第38図　ＳＫ152～154・ＳＫ156～160、166～172・ＳＤ08・09・10遺構図……33
第39図　ＳＤ10出土遺物……34
第40図　ＳＫ128・129・130・131・132・ＳＰ457遺構図　…35
第41図　ＳＫ128～130遺構復元図及び『日本山海名産図会』挿絵……36～38
第42図　ＳＫ130出土遺物　……39
第43図　ＳＫ01遺構図……39
第44図　ＳＫ01出土遺物……39
第45図　ＳＫ05・06遺構図……39
第46図　ＳＫ05(1・2・3・4)・ＳＫ06(5・6・7・8・9)出土遺物　……39
第47図　ＳＫ07遺構図……40
第48図　ＳＫ07出土遺物……40
第49図　ＳＫ08遺構図……41
第50図　ＳＫ08出土遺物……42
第51図　ＳＫ53遺構図……43
第52図　ＳＫ54遺構図……43
第53図　ＳＫ53(3・4)・ＳＫ54(1・2・5・6)出土遺物　……43
第54図　ＳＫ63遺構図……44
第55図　ＳＫ63出土遺物……44
第56図　ＳＫ74遺構図……45
第57図　ＳＫ74出土遺物……45
第58図　ＳＫ42・ＳＰ221遺構図　……45
第59図　ＳＰ221遺構図　……45

第60図　ＳＫ42(１・２・４～９)・ＳＰ221(３・10・11)
出土遺物 ……46
第61図　ＳＰ145・ＳＰ215遺構図……47
第62図　ＳＰ145(１・２・４)・ＳＰ215(3)出土遺物 ……47
第63図　ＳＫ137遺構図 ……47
第64図　ＳＫ137出土遺物 ……48
第65図　ＳＸ02遺構図……48
第66図　ＳＢ02遺構図……50
第67図　ＳＫ199遺構図 ……51
第68図　ＳＫ199遺構復元図 ……52
第70図　ＳＸ01遺構図……53
第71図　ＳＸ01出土遺物(1)……54
第72図　ＳＸ01出土遺物(2)……55
第73図　ＳＸ01出土遺物(3)……56
第74図　ＳＸ01出土遺物(4)……57
第75図　ＳＸ01出土遺物(5)……58
第76図　ＳＸ01出土遺物(6)……59
第77図　ＳＫ18遺構図……60
第78図　ＳＫ18出土遺物(1)……60
第79図　ＳＫ18出土遺物(2)……60
第80図　ＳＩ05遺構図……61
第81図　ＳＩ05出土遺物(1)……61
第82図　ＳＩ05出土遺物(2)……62
第83図　ＳＩ01遺構図……63
第84図　ＳＩ02遺構図……63
第85図　ＳＩ04遺構図……63
第86図　ＳＩ08・09遺構図……63
第87図　ＳＩ10遺構図……63
第88図　ＳＩ11遺構図……64
第89図　ＳＩ12遺構図……64
第90図　ＳＩ01・02・03・04・08・09・10・11・12
出土遺物……64

(第33次調査)
第１図　第33次調査北壁・東壁・南壁・西壁土層図……67・68
第２図　ＳＫ62遺構図……69
第３図　ＳＥ02遺構図……69
第４図　ＳＫ21遺構図……69
第５図　ＳＫ21出土遺物……69
第６図　ＳＫ47遺構図……70
第７図　ＳＫ47出土遺物……70
第８図　ＳＸ01遺構図……70
第９図　ＳＫ36・ＳＫ39・ＳＫ35・ＳＫ34遺構図 …71
第10図　ＳＫ36出土遺物……71
第11図　ＳＩ02・03・04遺構図……73
第12図　ＳＩ01遺構図……73
第13図　ＳＩ04・ＳＩ01出土遺物……73
第14図　ＳＫ53遺構図……74
第15図　ＳＫ53出土遺物……74

(第35次調査)
第１図　第35次調査北壁・東壁土層図……77・78
第２図　ＳＦ01土層図……76
第３図　ＳＦ01出土遺物……79
第４図　ＳＥ04遺構図……80
第５図　ＳＥ04出土遺物(1)……81
第６図　ＳＥ04出土遺物(2)……82
第７図　ＳＥ04出土遺物(3)……82
第８図　ＳＥ04出土遺物(4)……82
第９図　ＳＥ04出土遺物(5)……83
第10図　ＳＥ04出土遺物(6)……84
第11図　ＳＤ04・ＳＤ11遺構図……84
第12図　ＳＤ04出土遺物(1)……85
第13図　ＳＤ04出土遺物(2)……85
第14図　ＳＤ11遺構図……86
第15図　ＳＤ11出土遺物……86
第16図　ＳＫ73遺構図……87
第17図　ＳＫ73出土遺物……87
第18図　ＳＥ02遺構図……87
第19図　ＳＥ02出土遺物(1)……89
第20図　ＳＥ02出土遺物(2)……90
第21図　ＳＥ02出土遺物(3)……91
第22図　ＳＥ02出土遺物(4)……92
第23図　ＳＥ02出土遺物(5)……93
第24図　ＳＥ02出土遺物(6)……94
第25図　ＳＫ34遺構図……95

第26図　ＳＫ34出土遺物……95
第27図　ＳＩ13・ＳＰ102・ＳＰ110遺構図……96
第28図　ＳＰ110（１～７）・102(8)出土遺物……96
第29図　ＳＤ07・08遺構図……97
第30図　ＳＤ07出土遺物……97
第31図　ＳＤ08出土遺物……97
第32図　ＳＳ18直下出土遺物……98
第33図　ＳＢ01遺構図……99
第34図　ＳＢ02・ＳＢ03遺構図……100
第35図　ＳＢ04遺構図……100
第36図　ＳＡ01遺構図……100
第37図　ＳＩ02遺構図……101
第38図　ＳＩ05遺構図……101
第39図　ＳＩ02・ＳＩ03・ＳＩ12・ＳＩ05出土遺物……102
第40図　ＳＩ09遺構図……103
第41図　ＳＩ09出土遺物……103
第42図　ＳＩ10遺構図……103
第43図　ＳＩ10出土遺物……103
第44図　ＳＫ97・ＳＩ14遺構図……104
第45図　ＳＩ14出土遺物……104
第46図　ＳＫ191・ＳＩ06遺構図……105
第47図　ＳＫ191(1)・ＳＩ06(2)出土遺物……106
第48図　ＳＩ01遺構図……107
第49図　ＳＩ07遺構図……107
第50図　ＳＩ03・04遺構図……107
第51図　ＳＩ04出土遺物……107
第52図　ＳＩ11・ＳＩ03・ＳＩ04・ＳＩ01・ＳＩ07
出土遺物……108
第53図　ＳＩ11・ＳＩ12遺構図……109
第54図　包含層出土遺物……110

（第40次調査）

第１図　第40次調査Ｇトレンチ第２次面遺構全体図……112
第２図　第40次調査Ｇトレンチ第１次面遺構全体図……113
第３図　Ｇトレンチ南壁・西壁・北壁土層図……115・116
第４図　ＧトレンチＳＦ02出土遺物……117
第５図　ＧトレンチＳＦ03出土遺物……117
第６図　ＧトレンチＳＦ01出土遺物……117
第７図　ＧトレンチＳＤ02遺構図……118
第８図　第40次調査Ｈトレンチ遺構全体図……119
第９図　第40次調査Ｈトレンチ東壁・南壁・北壁土層図……120
第10図　ＳＦ01サブトレンチNo.１・02土層図……121
第11図　ＨトレンチＳＦ01出土遺物……121
第12図　第40次調査Ｉトレンチ遺構全体図……122
第13図　第40次調査Ｉトレンチ北壁・東壁土層図……123
第14図　ＩトレンチＳＤ01出土遺物……123
第15図　第40次調査Ｊトレンチ遺構全体図……124
第16図　Ｊトレンチ東壁土層図……124

（結　語）

第１図　江戸時代絵図……126
第２図　第35次調査Ⅳ期遺構と既存建物……127

表１　第27次調査ＳＥ10・第35次調査ＳＥ02遺物
数量……128～129
表２　種類別組成……130
表３　器種別組成……130
表４　碗組成……130
表５　皿組成……131
表６　煮沸具組成……131
表７　貯蔵具組成……131
表８　灯明具組成……132

付　　図

付図 1　調査区全体図
付図 2　第23次調査二次面・第27次調査遺構全体図
付図 3　第33次調査遺構全体図
付図 4　第35次調査一次面遺構全体図
付図 5　第35次調査二次面遺構全体図

第1章　調　査　成　果

第1節　はじめに

本件の調査は、ＪＲ伊丹駅前市街地再開発事業（対象面積16,800㎡）に伴う緊急調査として、大手前女子学園が伊丹市より委託を受け、学園内に有岡城跡調査委員会（調査委員長、日比野丈夫大手前女子大学学長）を組織して行ったものである。調査は第23・24・27・30・33・35・36・38・40次の９箇所、調査総面積は3,438㎡に上る。このうち、第23・24・30・36・38次調査については、さきに第１分冊にまとめた。本調査成果は、残りの第27・33・35・40次調査についてのものである。

調査に至る経過及び調査方法については、第１分冊で詳述しており、それを参照していただきたい。

ところで、調査は第１分冊でも述べたように、緊急性を帯びており、おもに地山面に残る在城期の遺構を主眼として調査を行わざるをえなかった。しかし、この地域一帯は近世にかなり削平されており、中世の在城期の遺構は堀や井戸など深いものだけが残っており、建物などは残念ながら検出されなかった。一方、近世の伊丹郷町期から後の遺構は遺存状態が良く、濃密に検出された。

このように、この地域の遺構・遺物は、基本的に中世の在城期と近世の伊丹郷町期および近代に大別できる。さらに、在城期は、

Ⅰ期　伊丹氏の伊丹城期（南北朝時代～天正二年（1574））

Ⅱ期　荒木村重の有岡城期（天正二年（1574）～天正七年（1579））および池田之助（元助）の伊丹城期（天正八年（1580）～天正十一年（1581））

に細分することができる。

伊丹郷町期は、おもに江戸時代後期の遺構・遺物を中心としており、調査区によって数時期の変遷がたどることができるが、これを、

Ⅲ期　伊丹郷町期（天正十一年（1581）以降、江戸時代から明治時代後半頃）

とし、このうちの小さな変化をⅢ－A、B、C…と表す。

近代は明治時代以降であるが、ここでは明治時代後半頃に遺構に画期が認められ、これ以降を、

Ⅳ期　近代（明治時代後半頃以降）

とする。この時期区分は第１分冊と同様であり、以下これに沿って記述することにしたい。

第35次調査風景

第２節　第27次調査

第27次調査区は、主郭部西側の第23次調査区の西側に隣接した716㎡を対象として行ったものである。

１．基本層序

基本層序については、第１分冊の第23次調査の説明の中ですでに述べたが、本調査区の説明上必要であり再述することとする。

この付近の地層は、伊丹台地を形成する洪積層の伊丹礫層を基盤とする。これは、１～２万年前に堆積したと推定されている。この上に0.3～0.5ｍの明黄褐色粘質土層（第１図―北壁第48層）が堆積し、この層までが無遺物層すなわち地山である。この調査区では、地山は北側中央部（調査区西端から約15ｍ前後の地点）が最も高く、Ｏ.Ｐ＝18.000ｍ前後を測る。ここから第23次調査区の南西部にかけて斜めに地山の高まりが続き、南東部端でＯ.Ｐ＝17.850ｍ前後を測る。この両側は暫時低くなっており、第27次調査区の北西端・北東端ともにＯ.Ｐ＝17.850ｍ前後、南西端でＯ.Ｐ＝17.600ｍを測る。すなわち、第23次調査区では、北東側の谷地形に向けて傾斜していくのに対して、第27次調査区西南部は、西南の別の微低地に向けて傾斜していることがわかる。

地山上面では、前述のように、在城期とそれ以前の遺構が検出される。これより上層は、江戸時代を中心とする伊丹郷町期の盛り土および整地土である。これは、２～３層に大別できる。下層より、

①褐色ないし明黄褐色系砂質土（第１図―第60・94・115層、第２図―第25層など）

②にぶい黄褐色砂質土ないし褐色粘質土（第１図―第51・109層など）

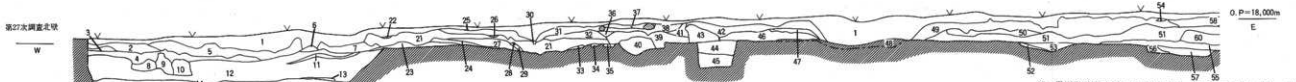
となる。①はあまり遺物を含まず、畑の耕作土と考えられる土質をしている。②も遺物は少ない。江戸時代後期の遺構は①および②の上面から切り込まれている。したがってこの時期の遺構は、上部を欠いた状態で検出したことになり、遺構の本来の深さは表記した数値からさらに深かったはずであることを断っておきたい。

２．Ⅰ期の遺構と遺物

Ⅰ期伊丹城期の遺構・遺物は、この調査区でも数少ない。遺物が出土し、確実にそれと判断できるのは井戸ＳＥ09・ピットＳＰ09と、少量ながら瓦器碗や土師質土器釜などの破片が出土した浅い溝ＳＤ04だけである。しかしこのほか、その南側に点在する柱穴群も、遺物はみられないが同時期に属する可能性がある。

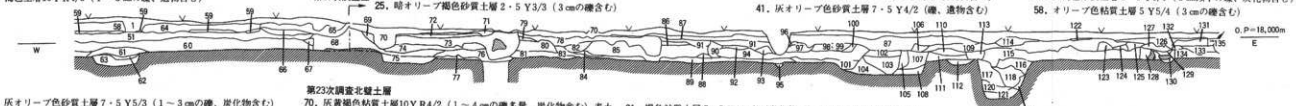
ＳＥ09

ＳＥ09は、調査区中央に位置する井戸である（第３図）。平面形は楕円形で、長径1.67ｍ、深さ4.7ｍ以上を測る。出土遺物は数少ない。第４図―１は、瀬戸・美濃焼灰釉平鉢である。２は、備前焼擂鉢。胎土は粗く、白色砂粒を含む。口縁部下には、直重ねした重ね焼き痕が残る。間壁忠彦・啟子編年（間壁忠彦・啟子1966～1984年、間壁忠彦1991年）のⅣＡ期の製品である。３は、須恵器甕の肩部。内面は、同心円文を丁寧にスリケシしており、焼成も良好。中村　浩編年（中村1981年）のⅠ―４段階前後のものである。このように古い時期の遺構には、古墳時代５・６世紀の遺物が散見する。これを除いて、この井戸出土遺物は、15世紀代に収まるものである。また、この付近の古墳時代の遺構・遺物については、すでに浅岡俊夫氏がまとめられ「古墳・または古墳群が有岡城跡内にもあったと考えられる。」としている（浅岡1987年）。と同時に、須恵器が伊丹城期の遺構から検出されることは、この時期に古墳時代の遺構を消滅させる開発が行われたこ



第27次調査北壁土層

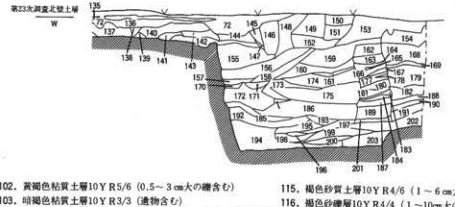
1．撹乱
2．橙色粘質土層7・5Y R6/8（2～5cmの礫多量に含む）
3．明褐色粘質土層7・5Y R5/8（1～3cmの礫、炭化物多量に含む）
4．暗オリーブ褐色砂質土層7・5Y3/3（遺物少量含む）
5．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4（13cm大の礫、遺物含む）
6．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6（3cmの礫若干含む）
7．暗灰黄色粘質土層2・5Y5/2（2～4cmの礫含む）
8．オリーブ黒色粘質土層5Y3/2（3～8cmの礫、遺物含む）
9．褐色土層10Y R4/6（1～3cmの礫、遺物含む）
10．黒褐色粘質土層10Y R2/2（3cmの礫、炭化物含む）
11．明褐色粘質土層7・5Y R5/6（0.5～1cmの礫含む）
12．黄褐色土層10Y R5/6（3～15cmの礫、遺物含む）
13．橙色土層5Y R6/6（2cmの礫若干含む）
14．褐色土層7・5Y R4/3（2～3cmの礫少量含む）
15．褐色土層10Y R4/6、褐色土7・5Y R4/4、にぶい黄褐色土10Y R5/4が混る
16．暗灰黄色粘質土層2・5Y4/2（4～5cmの礫多量、炭化物含む）（2cmの礫多量に含む）
17．にぶい赤褐色粘質土層5Y R5/4（2～5cmの礫多量に含む）
18．暗褐色粘質土層10Y R3/4（3cmの礫多量に含む）
19．赤褐色粘質土層2・5Y R4/6（3cmの礫多量に含む）
20．黒褐色砂礫層5Y R2/2（10cmの礫含む）
21．暗灰黄色粘質土層2・5Y5/2（2～4cmの礫含む）
22．黄褐色粘質土層2・5Y5/3
23．橙色土層7・5Y R6/8（1cmの礫含む）
24．オリーブ褐色粘質土層2・5Y5/4
25．暗オリーブ褐色砂質土層2・5Y3/3（3cmの礫含む）
26．暗褐色砂質土層10Y R3/4
27．明黄褐色礫層2・5Y6/8（0.5～3cmの礫含む）
28．オリーブ黒色砂質土層5Y3/1
29．灰オリーブ色砂質土層7・5Y4/2
30．暗灰黄色砂質土層2・5Y4/2（炭化物含む）
31．黒褐色砂質土層2・5Y3/1（炭化物多量、礫、遺物含む）
32．灰オリーブ色砂質土層5Y4/2（1～3cmの礫、遺物含む）
33．オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/6（遺物含む）
34．褐色砂質土層7・5Y R5/5
35．黒褐色粘質土層7・5Y R3/1
36．暗灰黄色砂質土層2・5Y4/2（遺物若干含む）
37．暗褐色砂質土層7・5Y R3/4（遺物、貝殻含む）
38．黒褐色砂質土層2・5Y3/2（炭化物多量、遺物含む）
39．オリーブ黒色砂質土層5Y3/2（炭化物多量、遺物含む）
40．オリーブ黒色砂質土層5Y3/1（遺物、炭化物含む）
41．灰オリーブ色砂質土層7・5Y4/2（礫、遺物含む）
42．黒褐色砂質土層5Y R3/1（1cm以下の礫多量、遺物、炭化物含む）
43．黄褐色砂質土層Y R5/6（0.5～2cmの礫多量に含む）
44．暗褐色砂質土層10Y R3/3（1～2cmの礫多量に含む）
45．褐色砂質土層7・5Y4/4
46．褐色粘質土層10Y R4/4（0.5～5.5cmの礫含む）
47．にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4（2～5cmの礫含む）
48．明黄褐色粘質土層10Y R6/8（地山）
49．黒褐色土層2・5Y3/1（炭化物多量、礫、遺物含む）
50．オリーブ黒色粘質土層5Y3/2（0.5～10cmの礫、炭化物含む）
51．褐色粘質土層10Y R4/4（1～3cmの礫、遺物、炭化物含む）
52．明黄褐色砂質土層2・5Y6/8
53．黄褐色砂質土層2・5Y5/3（礫、遺物、炭化物含む）
54．黄色砂質土層5Y7/6
55．オリーブ褐色土層2・5Y4/6
56．明褐色砂質土層7・5Y R5/8
57．黄褐色砂質土層2・5Y5/6（5cm以下の礫、炭化物含む）
58．オリーブ色粘質土層5Y5/4（3cmの礫含む）



59．灰オリーブ色砂質土層7・5Y5/3（1～3cmの礫、炭化物含む）
60．黄褐色砂質土層2・5Y5/6
61．黄褐色粘質土層2・5Y5/6
62．褐色砂質土層7・5Y R4/6（礫、炭化物含む）
63．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6（礫、遺物、炭化物含む）
64．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6（礫、遺物含む）
65．暗オリーブ褐色砂質土層2・5Y3/3（炭化物多量、礫、遺物含む）
66．オリーブ褐色土層2・5Y4/6（5cm以下の礫、遺物、貝殻含む）
67．オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/6（1～3cmの礫少量含む）
68．にぶい黄褐色土層10Y R5/4（1～2cmの礫、炭化物含む）
69．黄褐色砂質土層2・5Y5/4（1～4cmの礫、遺物含む）

第23次調査北壁土層

70．灰黄褐色粘質土層10Y R4/2（1～4cmの礫多量、炭化物含む）表土
71．灰白色砂質土層10Y R8/2
72．にぶい黄橙色砂質土層10Y R6/4（1～4cmの礫多量に含む）
73．黄褐色砂質土層2・5Y5/4（1～4cmの礫、遺物含む）
74．暗褐色粘質土層10Y R3/4（0.5～1cm礫含む）
75．灰黄褐色粘質土層10Y R4/2（1～4cmの礫、炭化物含む）
76．褐色粘質土層10Y R4/4（0.5～1cmの礫含む）
77．にぶい赤褐色砂質土層5Y R4/3（1～10cm大の礫若干、遺物含む）
78．褐色粘質土層7・5Y R4/4（1～3cm大の礫若干、炭化物含む）
79．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4（1～2cmの礫含む）
80．褐色砂質土層7・5Y R4/3（1～3cm大の礫、炭化物、遺物含む）
81．褐色粘質土層7・5Y R4/6（炭化物、1～3cm大の礫若干含む）
82．明黄褐色砂質土層2・5Y7/6（1cm以下礫含む）
83．暗褐色粘質土層7・5Y R3/4（3cm大の礫、炭化物多量に含む）
84．にぶい褐色土層7・5Y R5/4
85．明赤褐色砂質土層5Y R5/8（1～3cm大の礫若干含む）
86．褐色砂質土層7・5Y R4/3（2cmの礫含む）
87．黒褐色砂質土層10Y R3/1（1～10cm大の礫含む）
88．にぶい黄橙色砂質土層10Y R6/4（2cm以下の礫、遺物若干含む）
89．灰褐色粘質土層7・5Y R4/2（1～3cm大の礫若干含む）
90．にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3（3～5cm大の礫若干、遺物含む）
91．黒褐色土層10Y R3/2
92．にぶい黄色粘質土層2・5Y6/3（3cmの礫、遺物含む）
93．褐色粘質土層7・5Y R4/3（1cm以下の礫若干含む）
94．明黄褐色砂質土層10Y R6/6（1～15cm大の礫多量に含む）
95．黄橙色粘質土層10Y R7/8（1cm以下の礫多量に含む）
96．褐色砂質土層7・5Y R4/4
97．褐色粘質土層10Y R4/6（1～5cm大の礫含む）
98．にぶい黄褐色砂質土層（1cm以下の礫若干含む）
99．黄褐色粘質土層10Y R5/8（1cmの礫含む）
100．黄褐色砂質土層10Y R5/8（1～3cm大の礫若干含む）
101．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4（1cmの礫含む）

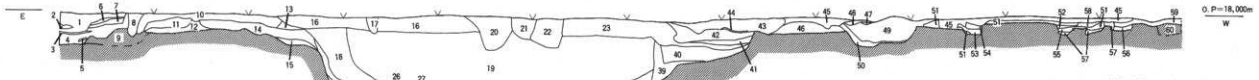


102．黄褐色粘質土層10Y R5/6（0.5～3cm大の礫含む）
103．暗褐色粘質土層10Y R3/3（遺物含む）
104．暗オリーブ褐色粘質土層2・5Y3/3（2cmの礫、遺物含む）
105．にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3（2cmの礫含む）
106．明黄褐色砂質土層2・5Y7/6（1cmの礫含む）
107．褐色砂質土層10Y R4/4（1cmの礫多量に含む）
108．暗褐色粘質土層10Y R3/4（1～5cm大の礫、遺物含む）
109．にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3（1cmの礫含む）
110．オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/3（1cmの礫含む）
111．暗灰黄色砂質土層2・5Y4/2（1cm以下の礫含む）
112．褐色砂質土層7・5Y R4/4（1～5cm大の礫含む）
113．明黄褐色砂質土層2・5Y7/6（1～20cm大の礫含む）
114．暗灰黄色砂質土層2・5Y4/2（3～10cm大の礫含む）
115．褐色砂質土層10Y R4/6（1～6cm大の礫含む）
116．褐色砂礫層10Y R4/4（1～10cm大の礫多量に含む）
117．にぶい黄褐色砂礫層10Y R4/3（1～20cm大の礫含む）
118．黄褐色砂質土層10Y R5/8（1～15cm大の礫多量に含む）
119．褐色粘質土層10Y R4/6（3cmの礫含む）
120．明黄褐色砂質土層10Y R6/6（1～20cm大の礫多量に含む）
121．暗褐色粘質土層10Y R3/4（1～10cm大の礫含む）
122．明黄褐色砂質土層10Y R6/6（遺物含む）
123．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/3（礫若干含む）
124．浅黄色砂質土層2・5Y7/4（1cmの礫若干、遺物含む）
125．にぶい黄色砂質土層2・5Y6/4（礫若干含む）
126．黄褐色砂質土層10Y R5/6（1～5cm大の礫、遺物含む）
127．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4（1cmの礫含む）
128．明黄褐色砂質土層10Y R6/6（5cmの礫多量に含む）
129．にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3（1cmの礫含む）
130．褐色砂質土層10Y R4/4（1cm以下の礫含む）
131．にぶい黄橙色砂質土層10Y R7/2（0.5～3cm大の礫、遺物含む）
132．にぶい黄橙色砂質土層10Y R7/3（2～3cm大の礫含む）
133．にぶい褐色砂質土層7・5Y R5/4（2cmの礫含む）
134．にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3（3cm以下の礫含む）
135．黄褐色砂質土層2・5Y5/4（1cm以下の礫含む）
136．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/3（1～10cm大の礫含む）
137．褐色砂質土層10Y R4/6（1～5cm大の礫多量に含む）
138．黄褐色砂質土層10Y R5/8（0.5～4cm礫、炭化物含む）
139．黄褐色砂質土層10Y R5/6（1～5cm大の礫含む）
140．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4（1～5cmの礫含む）
141．黄褐色砂質土層10Y R5/8（4cm以下の礫、炭化物含む）
142．明黄褐色土層10Y R6/6（炭化物含む）
143．灰褐色土層5Y R4/1（3cmの礫少量含む）
144．灰褐色土層5Y R4/2（2cmの礫少量含む）
145．明赤褐色土層5Y R5/8（炭化物、焼土多量に含む）
146．にぶい橙色土層5Y R7/4（炭化物、焼土多量に含む）
147．にぶい黄橙色土層10Y R6/3（1cmの礫若干含む）
148．明赤褐色粘質土層10Y R5/6
149．黄褐色土層2・5Y5/3（2cmの礫多量に含む）
150．明黄褐色土層10Y R5/6（1～5cmの礫含む）
151．灰オリーブ色礫層5Y4/2（2～5cmの礫含む）
152．明黄褐色土層10Y R6/8（1～5cmの礫含む）
153．オリーブ色土層5Y5/4（1～3cmの礫含む）
154．にぶい黄橙色粘質土層10Y R6/4（7cm以下の礫含む）
155．黄褐色土層2・5Y5/4（炭化物、焼土含む）
156．褐色粘質土層10Y R4/6
157．黄褐色粘質土層2・5Y5/6（1cmの礫含む）
158．暗褐色粘質土層10Y R3/4（炭化物多量に含む）
159．褐色粘質土層10Y R4/6（3cmの礫少量含む）
160．黄褐色粘質土層10Y R5/6（1～4cmの礫含む）
161．にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4（3～6cmの礫含む）
162．にぶい黄色土層2・5Y6/4（1cmの礫含む）
163．明黄褐色土層2・5Y6/6（1～2cmの礫含む）
164．オリーブ褐色土層2・5Y4/3（0.5～2cmの礫含む）
165．黄褐色土層2・5Y5/6（1cmの礫含む）
166．暗褐色粘質土層10Y R3/3（2cmの礫含む）
167．黄褐色土層10Y R5/8（1～2cmの礫）
168．にぶい黄褐色粘質土層10Y R6/4（1～7cmの礫含む）
169．にぶい褐色粘質土層7・5Y R5/4（1～4cmの礫含む）
170．灰オリーブ粘質土層7・5Y5/3
171．オリーブ褐色土層2・5Y4/4（3cmの礫若干含む）
172．暗オリーブ色粘質土層5Y4/3（1cmの礫若干含む）
173．灰オリーブ色粘質土層5Y6/2（2cmの礫、鉄分多量に含む）
174．褐色粘質土層7・5Y R4/6（2～4cmの礫含む）
175．明褐色粘質土層7・5Y R5/6
176．にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/8（1cmの礫含む）
177．オリーブ褐色土層2・5Y4/3
178．黄褐色土層2・5Y5/6（2～3cmの礫若干含む）
179．黄褐色粘質土層10Y R5/6（1～10cmの礫含む）
180．褐色粘質土層10Y R4/6（2～3cmの礫若干含む）
181．暗灰黄色粘質土層2・5Y4/2
182．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6（礫多量に含む）
183．にぶい黄色土層10Y R5/3（2cmの礫若干含む）
184．暗オリーブ褐色土層2・5Y3/3（2～3cmの礫含む）
185．灰オリーブ色土層5Y5/2（7cmの礫含む）
186．明褐色粘質土層7・5Y R5/6（1～3cmの礫、焼土含む）
187．黄褐色土層10Y R5/6（1～2cmの礫含む）
188．明黄褐色粘質土層10Y R6/6（1cmの礫含む）
189．灰黄褐色土層10Y R4/2（2～5cmの礫含む）
190．明黄褐色粘質土層2・5Y6/8（礫多量に含む）
191．明黄褐色粘質土層10Y R6/8
192．オリーブ黒色5Y3/2（5～7cmの礫含む）
193．暗オリーブ色土層5Y4/4（1～2cmの礫含む）
194．灰オリーブ色土層7・5Y4/2（2～10cmの礫含む）
195．オリーブ黒色粘質土層5Y2/2（2～3cmの礫含む）
196．オリーブ灰色粘質土層10Y4/2（3～4cmの礫含む）
197．オリーブ灰色粘質土層10Y5/2（2cmの礫含む）
198．オリーブ黒色粘質土層10Y3/2（1～7cmの礫含む）
199．オリーブ黒色土層5Y3/1（3～5cmの礫含む）
200．暗オリーブ色土層7・5Y4/3（1～3cmの礫含む）
201．灰オリーブ色粘質土層5Y5/3（1cmの礫含む）
202．灰オリーブ色粘質土層7・5Y4/2（遺物含む）
203．褐色粘質土層7・5Y R4/4（1～7cmの礫含む）

0　5m

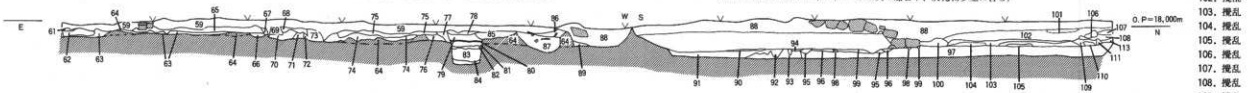
第1図　第23・27次調査北壁土層図

第23次調査南壁

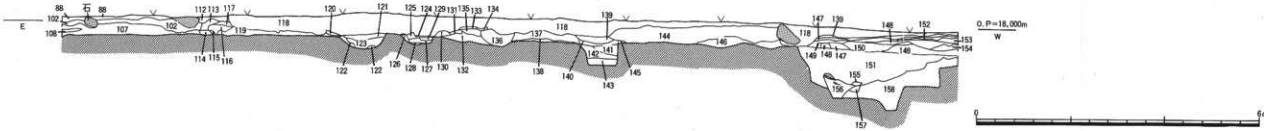


第23次調査南壁土層

1．褐色砂質土層10Y R4/4（2～5cmの礫含む）表土
2．褐色粘質土層10Y R4/6（1～6cmの礫多量に含む）
3．灰黄褐色砂質土層10Y R5/2（2～4cmの礫多量に含む）
4．褐灰色粘質土層10Y R5/1（1～3cmの礫多量、遺物、炭化物含む）
5．黄橙色粘質土層10Y R7/8（1～4cmの礫若干含む）
6．黄褐色粘質土層10Y R5/6（2cmの礫若干含む）
7．暗灰黄色粘質土層2・5 Y4/2（1cmの礫多量に含む）
8．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4（1～2cmの礫含む）
9．明黄褐色粘質土層2・5 Y7/6（1～4cmの礫若干含む）
10．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/3（1cmの礫多量に含む）
11．黄褐色砂質土層10Y R5/8（2cmの礫含む）
12．にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3（1cmの礫若干含む）
13．にぶい橙色7・5 Y R6/4（1～3cmの礫若干含む）
14．橙色土層7・5 Y R6/6（1cmの礫若干含む）
15．橙色土層7・5 Y R7/6（1cmの礫若干含む）
16．灰白色砂質土層10Y7/1（礫、遺物若干含む）
17．にぶい褐色土層7・5 Y R5/4（1～3cmの礫含む）
18．黄褐色粘質土層2・5 Y5/3（1～3cmの礫若干含む）
19．黄褐色砂質土層10Y R6/6（礫多量に含む）
20．明オリーブ灰色砂質土層5 G Y7/1（0.5～20cm大の礫含む）
21．緑灰色砂質土層10G Y5/1（礫若干、炭化物多量に含む）
22．オリーブ灰色砂質土層2・5 G Y5/1（0.5～20cm大の礫、炭化物多量に含む）
23．明黄褐色粘質土層10Y R6/6（2cmの礫少量含む）
24．にぶい褐色土層2・5 Y R6/3（1～2cmの礫含む）
25．にぶい褐色土層7・5 Y R5/3（1～3cmの礫含む）
26．明褐色土層7・5 Y R5/6（1～3cmの礫含む）
27．にぶい橙色土層5 Y R6/4（1cmの礫含む）
28．にぶい黄橙色粘質土層10Y R7/3（1～20cmの礫若干含む）
29．褐色粘質土層7・5 Y R4/3（1～5cmの礫若干含む）
30．にぶい赤褐色、にぶい黄橙色、5 Y R5/3、10Y R6/3粘質土層（1～3cmの礫若干含む）
31．にぶい黄橙色粘質土層10Y R7/2（2～10cmの礫若干含む）
32．灰黄褐色礫層10Y R6/2（1～6cmの礫少量に含む）
33．オリーブ黄色粘質土層5 Y6/3（2～5cmの礫若干含む）
34．にぶい黄橙色礫層10Y R7/4（1～15cmの礫多量に含む）
35．灰色粘質土層5 Y4/1（炭化物多量に含む）
36．灰色粘質土層5 Y5/1（1～4cmの礫含む）
37．黄灰色礫層10B G6/1（1～10cmの礫含む）
38．にぶい黄橙色礫層10Y R7/4（1～15cmの礫多量に含む）
39．浅黄色粘質土層2・5 Y7/4（0.5～2cmの礫多量に含む）
40．暗灰黄色粘質土層2・5 Y4/2（2cmの礫、遺物、炭化物含む）
41．オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/3（3cmの礫少量含む）
42．明黄褐色砂質土層2・5 Y6/3（1～3cmの礫多量に含む）
43．暗オリーブ褐色砂質土層2・5 Y3/3（3～16cmの礫多量に含む）表土
44．紫黒色炭化物層5 P1.7/1
45．暗褐色砂質土層10Y R3/4（1～15cm大の礫若干含む）表土
46．褐色土層7・5 Y R4/4（1～3cm大の礫若干含む）
47．にぶい褐色砂質土層7・5 Y R5/4
48．褐灰色砂質土層10Y R5/1
49．黄灰色泥土2・5 Y5/1（礫、遺物若干含む）
50．灰色泥土5 Y5/1
51．明褐色粘質土層7・5 Y R5/8（1cm以下の礫若干含む）
52．暗灰黄色粘質土層2・5 Y5/2（遺物含む）
53．灰色粘質土層5 Y4/1（1～3cm大の礫若干、炭化物多量に含む）
54．オリーブ黄色砂層5 Y6/4
55．灰色粘質土層5 Y4/1（0.5～1cmの礫、炭化物、焼土含む）
56．にぶい黄色砂質土層2・5 Y6/3
57．黄灰色砂質土層2・5 Y5/1（3～5cmの礫多量、遺物含む）
58．黄褐色粘質土層2・5 Y5/3
59．灰オリーブ色、黒色、7・5 Y6/2、7・5 Y2/1粘質土層（2～20cmの礫若干含む）
60．黄褐色粘質土層10Y5/6（地山）

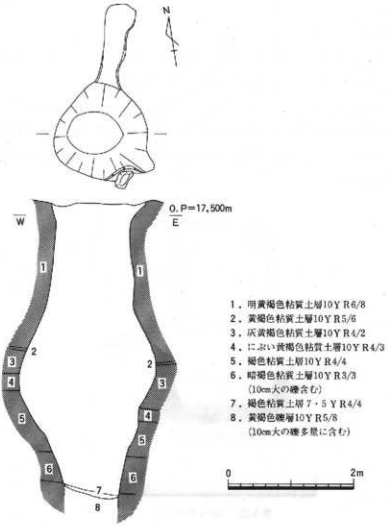


61．オリーブ褐色砂質土層10Y R4/1（5cmの礫少量含む）
62．褐灰色粘質土層10Y R4/1（5cmの礫少量含む）
63．黄褐色粘質土層10Y5/6（2～4cmの礫、遺物含む）
64．黄褐色粘質土層10Y5/8（地山）
65．にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3（5cmの礫多量に含む）
66．灰黄褐色粘質土層10Y R4/2
67．灰黄褐色土層10Y R6/2
68．灰黄褐色粘質土層10Y R5/2
69．灰白色土層10Y R7/1（2cmの礫多量に含む）
70．褐灰色土層10Y R6/1（2cmの礫多量に含む）
71．褐灰色土層10Y R4/1（2cmの礫多量に含む）
72．黒褐色土層10Y R3/1
73．にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/3
74．明黄褐色粘質土層10Y R6/6
75．褐灰色粘質土層7・5 Y R5/1（2～3cmの礫少量含む）
76．明褐色粘質土層7・5 Y R5/6
77．灰褐色粘質土層7・5 Y R5/2（2cmの礫少量含む）
78．黄褐色土層10Y R5/6
79．黄褐色土層10Y R5/8
80．褐灰色土層7・5 Y R4/1（有機物多量に含む）
81．褐色粘質土層7・5 Y R4/4（炭化物含む）
82．オリーブ黒色粘質土層7・5 Y3/2（炭化物含む）
83．暗褐色粘質土層10Y R3/3（炭化物、遺物含む）
84．暗褐色粘質土層10Y R3/3（炭化物含む）
85．黒褐色粘質土層7・5 Y R3/1
86．灰褐色土層7・5 Y R4/2（5cmの礫、遺物少量含む）
87．黒褐色粘質土層7・5 Y R3/2（遺物少量含む）
88．撹乱
89．黄褐色粘質土層2・5 Y5/6
90．灰オリーブ色砂質土層5 Y3/S（1.5cmの礫含む）
91．褐色粘質土層10Y R4/4（5cmの礫含む）
92．褐色土層10Y R4/6
93．オリーブ褐色粘質土層2・5 Y6/4（0.3cmの礫含む）
94．オリーブ黒色粘質土層5 Y2/3（5cmの礫含む）
95．オリーブ褐色粘質土層2・5 Y6/4（0.2cmの礫含む）
96．暗オリーブ褐色砂質土層2・5 Y3/3（0.5～12cmの礫含む）
97．撹乱
98．オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4（6cmの礫含む）
99．黒褐色砂質土層2・5 Y3/2（2cmの礫含む）
100．撹乱
101．撹乱
102．撹乱
103．撹乱
104．撹乱
105．撹乱
106．撹乱
107．撹乱
108．撹乱
109．撹乱
110．撹乱
111．撹乱
112．オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6（1～2cmの礫含む）
113．撹乱
114．明赤褐色粘質土層5 Y R5/8（1～2cmの礫若干含む）
115．明褐色粘質土層7・5 Y R5/8（遺物含む）
116．赤褐色粘質土層5 Y R4/8（炭化物多量に含む）
117．褐色砂質土層10Y R4/6（炭化物含む）
118．撹乱
119．明褐色粘質土層5 Y R5/8（炭化物、礫含む）

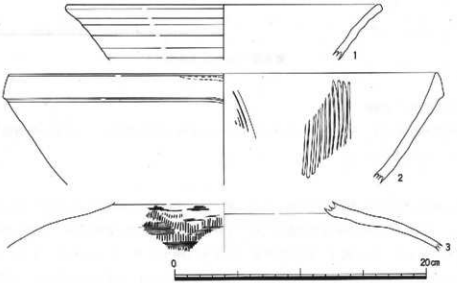


120．暗褐色粘質土層7・5 Y R5/6（レンガ含む）
121．暗オリーブ褐色砂質土層2・5 Y3/3
122．にぶい黄橙色砂質土層10Y R7/4（炭化物含む）
123．灰黄褐色砂質土層10Y R5/2（炭化物多量に含む）
124．にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3（炭化物多量に含む）
125．暗オリーブ色砂質土層5 Y4/3（炭化物多量に含む）
126．浅黄色砂質土層2・5 Y7/4（8cmの礫含む）
127．浅黄褐色砂質土層10Y R5/2（1～2cmの礫、鉄塊含む）
128．黄褐色粘質土層10Y R5/6（炭化物含む）
129．黄褐色粘質土層2・5 Y5/4（炭化物含む）
130．暗褐色粘質土層10Y R3/4（炭化物多量に含む）
131．明褐色粘質土層7・5 Y R5/8（礫、炭化物含む）
132．明褐色粘質土層7・5 Y R5・6（1～3cm大の礫含む）
133．オリーブ黒色砂質土層5 Y2/2（礫、炭化物含む）
134．黄色砂質土層2・5 Y8/6（7cm大の礫含む）
135．褐色粘質土層7・5 Y R4/6（1～3cmの礫含む）
136．黒褐色粘質土層2・5 Y3/2（炭化物、1～6cm大の礫多量、遺物含む）
137．褐灰色粘質土層7・5 Y R4/1（2cmの礫少量含む）
138．赤褐色粘質土層5 Y R4/8（1～2cmの礫含む）
139．黒褐色土層10Y R3/2（2cmの礫少量含む）
140．暗褐色粘質土層10Y R3/4（2～5cmの礫、炭化物含む）
141．橙色粘質土層7・5 Y R6/8（2～5cmの礫多量に含む）
142．黒褐色粘質土層10Y R3/1（1～5cmの礫多量、遺物含む）
143．明褐色粘質土層7・5 Y R5/8（1～3cmの礫、炭化物多量に含む）
144．撹乱
145．褐色粘質土層10Y R4/6
146．にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3（3cmの礫少量含む）
147．にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/3
148．褐灰色砂質土層10Y R4/1（2cmの礫少量含む）
149．褐色砂質土層7・5 Y R4/4
150．にぶい橙色土層7・5 Y R6/4（焼土、炭化物多量に含む）
151．褐色砂質土層7・5 Y R4/6（1cmの礫少量含む）
152．灰褐色砂質土層7・5 Y4/2（1cmの礫少量含む）
153．灰黄褐色砂質土層10Y R6/2
154．褐色砂質土層7・5 Y R4/3
155．にぶい褐色粘質土層10Y R5/4（1cmの礫少量含む）
156．黄褐色砂質土層10Y R5/6（1～4cmの礫少量含む）
157．オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6
158．明黄褐色砂質土層10Y R6/8（1～5cmの礫多量に含む）

第2図　第23・27次調査南壁土層図



第3図　SE09遺構図



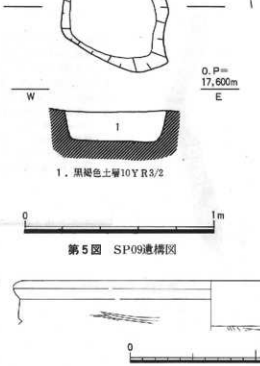
第4図　SE09出土遺物

とを示しているといえよう。

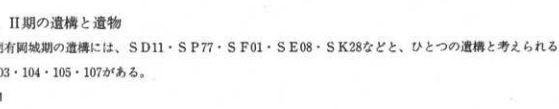
ＳＰ09

ＳＰ09は、調査区東南端に位置し、両端とも近世の遺構に切られている（第５図）。検出長0.6ｍ、幅0.56ｍ、深さ1.5ｍを測る。柱穴としたが、ＳＤ04に続く溝の可能性もある。

出土遺物のうち、第６図－１は土師質土器皿。灰白色7.5ＹＲ８/１と白味の強い胎土を持ち、内面口縁端部は凹面をなす。口径（推）9.8cmを測る。２は、朝鮮王朝（李朝）陶磁器の蕎麦茶碗。総釉掛けで、見込みには６箇所の砂目跡が残る。３は、土師質土器甕。野田芳正氏の編年のⅡ－６段階（野田1984年）に属する。16世紀中頃前後の遺物群である。



第５図　ＳＰ09遺構図



第６図　ＳＰ09出土遺物

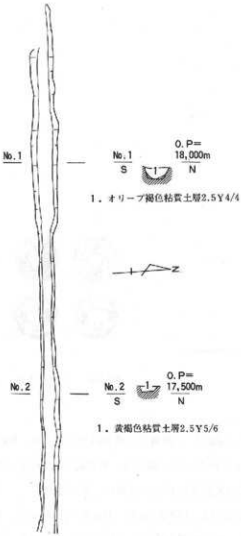
３．Ⅱ期の遺構と遺物

Ⅱ期有岡城期の遺構には、ＳＤ11・ＳＰ77・ＳＦ01・ＳＥ08・ＳＫ28などと、ひとつの遺構と考えられるＳＫ103・104・105・107がある。

ＳＤ11

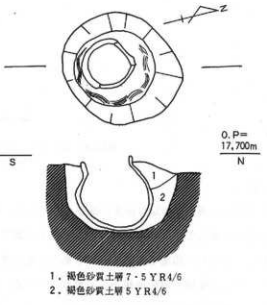
ＳＤ11は、調査区北端を東西に延びる溝である（第７図）。西端は、後述するＳＦ01の手前3.8ｍの地点で終わっている。東側は、北側の第35次調査区で続きを検出している。最大幅0.84ｍ、深さ0.35ｍを測る。断面は、Ｕ字形を呈する。この溝は、調査区南側の区域を区画する溝と考えられる。また、後述するＳＫ103～105・107も同様にＳＦ01の手前3.8ｍ地点に西端が位置しており、ＳＤ11の西端がここで終わっているのは偶然ではなかろう。すなわち、その間には土塁が設けられていた可能性が高い。

出土遺物には、第８図に掲げたような土師質土器皿が少量みられる。口径（推）8.2cm、器高1.5cmを測る。



第７図　SD11遺構図

第８図　SD11出土遺出



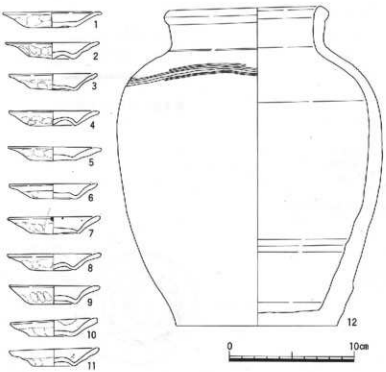
第９図　SP77遺構図

口縁部は直線的に延び、端部はわずかに外反する。底部はへそ皿状に上げ底となる。外面は指圧調整、内面底部は一方向のナデ調整、口縁部はヨコナデ調整を施す。第１分冊で述べた分類の１型式Ａ類である。

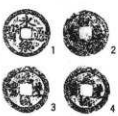
ＳＰ77

ＳＰ77は、調査区の東側中程に位置する備前焼壺を埋めた遺構である（第９図）。掘形は、直径0.32ｍ、深さ0.2ｍを測る。内部には土師質土器皿が11点、銭貨が４枚収められていた。地鎮めにかかわる遺構と考えられ、この付近に建物が存在していたことがわかる。

出土遺物のうち、第10図－１～11は土師質土器皿。すべてほぼ同じサイズで、口径７cm前後、器高1.2cm前後を測る。１型式の皿で胎土・調整などは先のものと同様であるが、法量が小さい。このサイズのものは、あまりみられない。同図－12は、備前焼波状文壺。口縁部は直線的に延び、端部は玉縁状となる。口径12cm、器高25.2cmを測る。Ⅴ期の製品である。第11図は、銭貨。１は「永楽通寶」(明銭、初鋳永楽六年（1408））、２は「□□大寶」と二文字しか判読できない。３・４は「元豊通寶」(北宋銭、初鋳元豊元年（1078））である。



第10図　SP77出土遺物(1)



第11図　SP77出土遺物(2)

ＳＦ01

ＳＦ01は、調査区西端を南北に延びる堀である（第12図・付図１）。両端は、調査区外に延びる。幅は、調査区内では確定できなかったが、北側の第35次調査で5.9ｍと判明した。深さは、最深部で2.3ｍを測る。断面形は、逆台形の箱堀である。これも第１分冊で述べた第23次調査ＳＦ02と同様に、現行道路に沿って存在する。埋土は東側の屋敷地側から投棄されている。出土遺物には、17世紀前半に下るものもみられ、廃城後も埋まらずに存在していたことがわかる。このような堀は、本件の調査中これ１例である。有岡城落城後入城した池田之助（元助）の時期に再利用した結果とも考えられる。

出土遺物のうち、第13図－１・２は、中国明代の青花皿。１は小野正敏編年（小野1982年）B_1類皿。文様は、アラベスク文と文字を描く。口径（推）13.7cm、器高3.3cmを測る。２はＣ類の草魚文皿である。魚体は赤色、目は黒色釉を用いている。３は同じく明代の線描蓮弁文青磁碗。上田秀夫編年（上田1982年）のＢ－Ⅳ類である。内面見込みには「顧氏」かと思われるスタンプ文がある。高台内は、蛇ノ目状に釉薬を掻き取る。４～７は唐津焼皿。４・５は砂目積みで、５は高台内まで施釉する。６・７は胎土目積み。７は鉄絵の一部が残る。８は、瀬戸・美濃焼灰釉皿。高台はハリツケ。高台内に輪トチ痕が残る。９は、志野焼菊花皿。口径（推）12.3cm、器高2.9cmを測る。10は、肥前初期伊万里の染付皿。高台にはハナレ砂が付着する。大橋康二編年（大橋1988年）のⅡ－２期に位置付けられる。11～13は、土師質土器皿。いずれも口縁部は内弯しつつたちあがり、有岡城期のものに対して後出する型式である。共伴する唐津焼とほぼ同時期、すなわち17世紀前半のものと考えられる。11には、灯芯痕が残る。口径（推）8.7cm、器高1.8cmを測る。12は、ほぼ完形。口径9.3cm、器高1.9cm。13は口径（推）13.5cm、器高1.5cmを測る。14・15は、屋瓦。14は、鳥衾瓦。瓦当文様は左巻き三つ巴文で、連珠文との間に界線が巡る。15は、波状文軒平瓦。波状文の上下に界線がある。瓦当面にはハナレ砂がみられ、平瓦部凹面には、布目痕が残る。また、須恵質の焼き上がりをみせるなど古い要素をもっている。いずれも第23次調査区ＳＦ01・02出土瓦と一致するものはない。

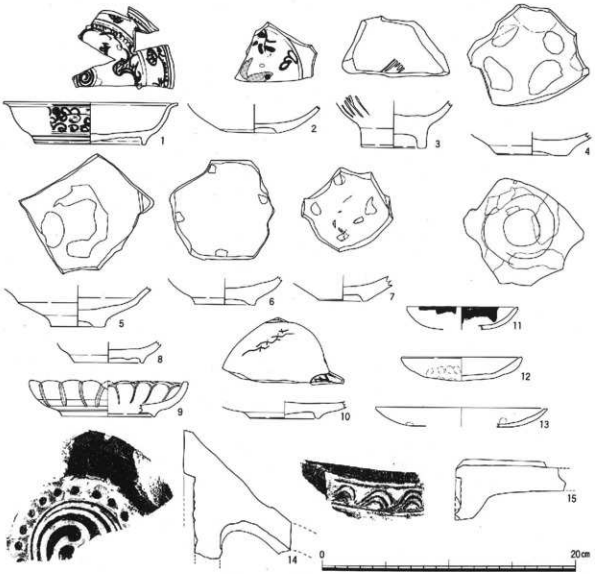
1．攪乱
2．橙色粘質土層7・5Y R6/8（2～5cmの礫多量に含む）
3．明褐色粘質土層7・5Y R5/8（1～3cmの礫、炭化物多量に含む）
4．暗オリーブ褐色砂質土層7・5Y3/3（遺物少量含む）
5．オリーブ褐色土層2・5Y4/4（13cm大の礫、遺物含む）
6．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6（3cmの礫若干含む）
7．暗灰黄色粘質土層2・5Y5/2（2～4cmの礫含む）
8．オリーブ黒色粘質土層5Y3/2（3～8cmの礫、遺物含む）
9．褐色土層10Y R4/6（1～3cmの礫、遺物含む）
10．黒褐色粘質土層10Y R3/2（3cmの礫、炭化物含む）
11．明褐色粘質土層7・5Y5/6（0.5～1cmの礫含む）
12．黄褐色土層10Y R5/6（3～15cmの礫、遺物含む）
13．橙色土層5Y R6/6（2cmの礫若干含む）
14．褐色土層7・5Y R4/3（2～3cmの礫少量含む）
15．褐色土10Y R4/6、褐色土7・5Y R4/4、にぶい黄褐色土10Y R5/4が混る（2cmの礫多量に含む）
16．暗灰黄色粘質土層2・5Y4/2（4～5cmの礫多量、炭化物含む）
17．にぶい赤褐色粘質土層5Y R5/4（2～5cmの礫多量に含む）
18．暗褐色粘質土層10Y R3/4（3cmの礫多量、遺物含む）
19．赤褐色粘質土層2・5Y R4/6（3cmの礫多量に含む）
20．黒褐色砂礫層5Y R2/2（10cmの礫含む）

1．明褐色砂質土層7・5Y R5/6（3cm大の礫少量含む）
2．黄褐色粘質土層10Y R5/6（1～5cmの礫多量に含む）
3．褐色粘質土層10Y R4/6（1～10cmの礫多量に含む）
4．黄褐色粘質土層10Y R5/6（1～10cmの礫多量に含む）
5．黄褐色粘質土層10Y R5/8（1～7cmの礫含む）
6．褐色粘質土層10Y R4/6（1～10cmの礫多量に含む）
7．明褐色粘質土層7・5Y R5/6（0.5～5cmの礫多量に含む）
8．褐色粘質土層7・5Y R4/4（1cm大の礫少量含む）
9．褐色粘質土層10Y R4/4（1～10cmの礫多量に含む）
10．黄褐色粘質土層10Y R5/8（5cm大の礫少量含む）
11．黄褐色粘質土層10Y R5/6（1～4cmの礫少量含む）
12．にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4（1～3cmの礫多量に含む）
13．明黄褐色粘質土層10Y R6/6（1～5cmの礫多量に含む）
14．にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4（1～5cmの礫少量含む）
15．褐色粘質土層10Y R4/6（1～5cmの礫若干含む）
16．黄褐色粘質土層10Y R5/8（3～5cmの礫多量に含む）
17．黄褐色粘質土層10Y R5/6（1～3cmの礫多量に含む）
18．明黄褐色粘質土層10Y R6/8（3～5cmの礫若干含む）
19．褐色砂質土層10Y R4/4（2～5cmの礫多量に含む）
20．明褐色粘質土層7・5Y R5/6（3～10cmの礫少量含む）

1．黄褐色粘質土層10Y R5/6（1～5cmの礫多量に含む）
2．褐色粘質土層10Y R4/6（1～10cmの礫含む）
3．褐色粘質土層7・5Y R4/6（0.5～7cmの礫多量に含む）
4．褐色粘質土層7・5Y R4/4（1～9cmの礫多量に含む）
5．明赤褐色粘質土層5Y R5/6（1～15cmの礫多量に含む）
6．明褐色砂質土層7・5Y R5/8（0.5～15cmの礫多量に含む）
7．黄褐色砂質土層10Y R5/8（0.5～15cmの礫多量に含む）
8．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4（1～15cmの礫多量に含む）
9．明黄褐色粘質土層10Y R6/8（5～10cmの礫含む）
10．褐粘質土層10Y R4/6（3～10cm大の礫少量含む）
11．明褐色粘質土層7・5Y R5/6（3～10cm大の礫少量含む）

第12図　SF01 土層図

第14図―1は、唐津焼鉢。底部は露胎。釉薬は、オリーブ黒色5Y2/2に発色する。2～4・7は丹波焼擂鉢。2は擂目が1本びきである。3・4は、多条の擂目を持ち、口縁部が台形を呈する。長谷川真編年（長谷川1988年）ⅡA$_2$類に属する。7は、備前焼擂鉢を模倣したもの。口径（推）30cm。胎土はやや粗く、灰色N6.5を呈する。口縁部外面には、備前焼に通有の沈線がみられない。体部外面下半はヘラによる斜上方へのケズリがみられる。他は、回転ナデ調整。このような製品を焼く窯として、兵庫県柏原町下小倉の大部谷窯が知られている（大槻　伸1987年）。5・6は、備前焼。5は、甕。胎土は、粗い。ⅣB期のもの。6は、



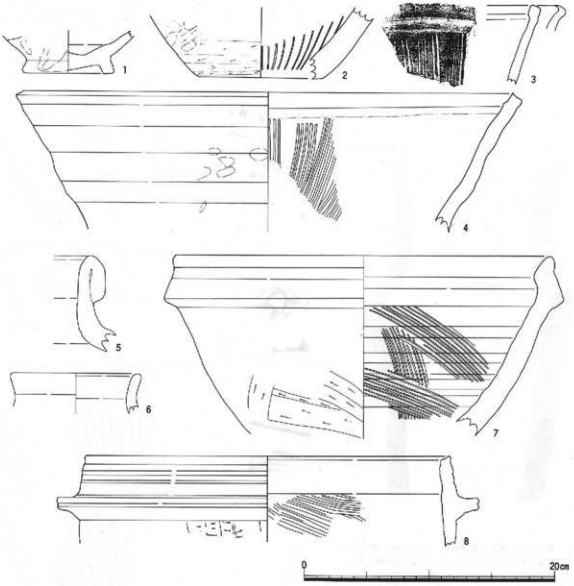
第13図　SF01出土遺物(1)

壺。口縁部は短い。Ⅴ期のものである。8は、土師質土器釜。口縁部は直立し、外面に2条の沈線を施す。口径（推）28.9cm。外面体部は、左から右へのヘラケズリ調整。鍔部以下には、煤が付着している。

ＳＥ08

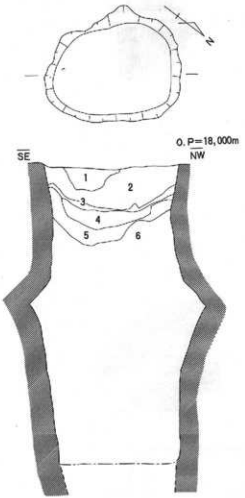
井戸ＳＥ08は、調査区東側の中程に位置する（第15図）。平面形は楕円形を呈し、長径2.2m、深さは4.7mまで確認したが底には達さなかった。ＳＥ09と同様に、途中えぐれた部分がみられる。

出土遺物は、比較的多い。第16図－1は、古墳時代の須恵器高坏脚部。1段透かしを有し、Ⅰ－4段階前後のものである。2～5は、土師質土器皿。2・3は、2型式Ａ類である。口径（推）は2点とも6.9cm、器高は2が1.5cm、3が1.2cmである。4・5は、1型式Ａ類。4は口径（推）7.3cm、器高1.6cm。5は口径（推）8.1cm、器高1.6cmを測る。6は、中国明代の白磁端反り皿。口径（推）11.4cm、器高2.8cm。これも第1分冊で法量による分類をおこなったが、それのＡ類に属する。7・9は同じく明代の青花皿。7は見込みに花弁樹石、外面に葡萄唐草文を描く。9は、Ｃ類皿。外面には芭蕉葉文、見込みには花弁文を描く。8は、瓦質土器碗。口径（推）12.3cm、器高7.4cmを測る。内・外面ともにヘラミガキの痕跡がわずかに残る。高台は、



第14図　SF01出土遺物(2)

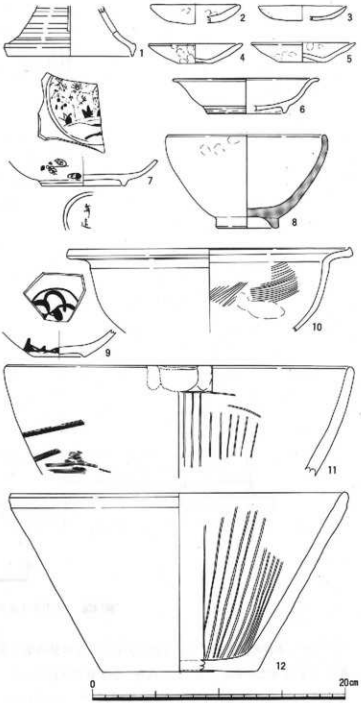
ハリツケ。本件の調査ではこれ１点であるが、主郭部の第３次調査で１点出土している（鈴木　充他1978年)。これは炭素が飛んでおり、土師質土器と報告されている。北野隆亮氏によると、近年大和・紀伊・摂津などの当該期の遺跡から少量ながら出土していることが知られ、天正年間（1575～91）を中心とした比較的短期間に生産され流通した製品であるという(北野1992年)。北野氏の集成された資料には、中国明代の青磁稜花皿を忠実に模倣した瓦質土器皿もあり、非常に興味深い。ただ碗についても、北野氏は明代の青磁碗を模倣したものとされている。たしかに明らかにそういえる例もあるが、本例のような体部下半がすぼまる形態は、天目茶碗の模倣と考えた方が良いのではないかと思われる。いずれにせよ、特定の時期に出現する極めて特徴的な遺物であり、北野氏の指摘の如く、当該期の土器の生産・流通を考えるうえで貴重な資料である。10は、土師質土器の大和型鍋。筆者の編年のＩ－１型式である（川口1990年)。口径（推）22.2cm。内面はハケ調整、外面はナデ調整で煤が付着する。11・12は、丹波焼擂鉢。一本擂目で、口縁端部は丸い。内面はナデ調整、外面は指圧調整の後ナデ調整。口縁部はヨコナデ調整を施す。11は口径（推）27.1cm、12は口径（推）26.3cm、器高14.1cmを測る。



1．褐色砂質土層10YR3/4（2～15cmの礫、遺物含む）
2．黄褐色粘質土層2・5Y5/6（3～10cmの礫含む）
3．暗褐色粘質土層10YR3/4（礫、炭化物多量に含む）
4．にぶい黄褐色粘質土層10YR5/4（礫若干含む）
5．褐色粘質土層10YR4/6（3～5cmの礫若干含む）
6．にぶい黄褐色粘質土層10YR5/4（礫、炭化物含む）

0　2m

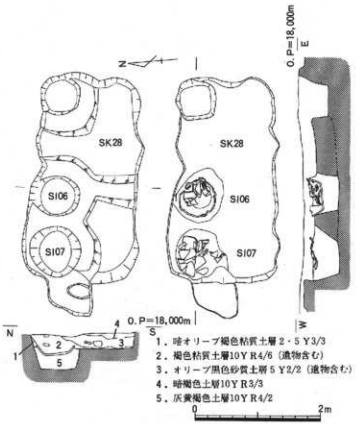
第15図　SE08遺構図



第16図　SE08出土遺物

SK28・SI06・SI07

土壙SK28・埋甕SI06・SI07は、調査区の南側中程に位置する（第17図）。平面形は長方形を呈し、長辺3.28m、短辺1.8m、深さ0.6mを測る。備前焼大甕を埋めた土壙で、SI07は接合の過程でSI06と同一個体であることが判明した。他は抜き取られて痕跡だけが遺存していたが、これを含めて3個体の埋甕があったことがわかる。大甕は、土壙底部から0.38mまで灰黄褐色土10YR4/2によって埋め、固定されていた。SI06は、一度抜き取ろうとして途中で放棄されたため、底部が浮き上がっている。これは、一度割れたものを鋼製金具によってつなぎ合わせている。放棄されたのは、そのような理由からであろう。



第17図　SK28・SI06・07遺構図

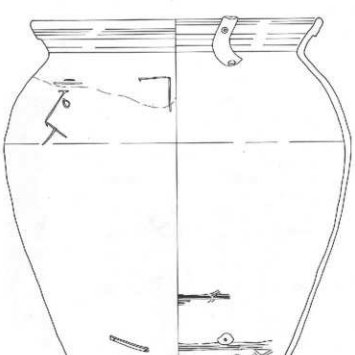
出土した備前焼大甕（第18図）は、口径68.7cm、器高95.4cmを測る。内面はハケ調整、外面はヘラケズリ調整、口縁部はヨコナデ調整をおこなう。外面肩部には、「二石入」および逆「L」字状の窯印がヘラ描きされる。底部および口縁部は、いったん破損したものを幅1cm、厚さ0.6cmの銅製金具によって鋲留めする。さらに、隙間を膠で埋めている。このような補修を施した例は、あまりみられない。膠によって隙間を埋めている点は、内容物が液体であったことを示唆している。形態は、元亀二年（1571）銘あるいは天正10年（1582）銘のものに近い（間壁他1977年）。

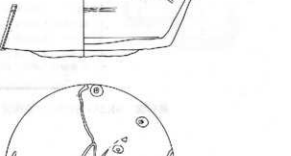
同様の埋甕遺構は、以前の周辺の調査でも数箇所で検出している。

ＳＫ103～105・107

この遺構は、調査区西側の中程に位置する（第19図）。検出段階では４つの土壙としてとらえたが、出土遺物は同時期のものであり、本来ひとつの遺構であることが判明した。平面形は正方形を呈し、東西4.44m、南北4.78m、深さ0.28mを測る。埋土は黄褐色粘質土2.5Y 5/6で、かつては泥質であったと考えられる土質をしている。したがって、池状の遺構であったと考えられる。

出土遺物には、第20図に挙げた瓦質土器亀形盤と第21図の土師質土器皿がある。瓦質土器亀形盤は頭部を欠き、全長38.5cm、高さ9cmを測る。体部内面は刳り抜かれており、体部外面には甲羅と髭がヘラによって除刻される。底部には、短い脚がハリツケられる。他に類例のない特異な遺物である。第21図の土師質土器皿は、口径（推）7.8cm。１型式Ａ類である。



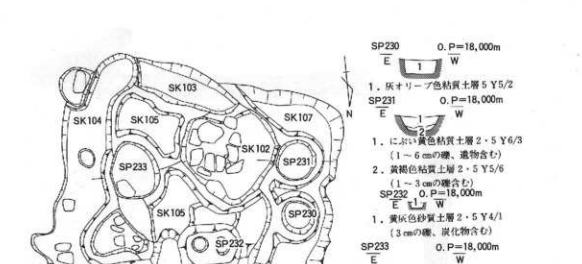


第18図　SI06出土遺物

4．Ⅲ期の遺構と遺物

Ⅲ期伊丹郷町期の遺構は、前述のように江戸時代後期を中心とする。この地点は、伊丹郷町の絵図『寛政八年（1796）伊丹細見絵図』（八木哲浩1982年）では、北側が「ミナト丁」南側が「カジヤ丁」となっている。

隣接する第23次調査では、18世紀後半以前は畑地、18世紀後半から19世紀前半にかけては町屋が進出し（Ⅲ－Ａ期）、19世紀前半とくに文化年間頃から大規模な酒蔵が建築された（Ⅲ－Ｂ期）。これは、明治時代後半から大正時代になくなり、再び町屋となっていく（Ⅳ期）、という変遷を明らかにした。結論からいえば、第27次調査区も同様の変遷をたどる。18世紀後半から19世紀前半にかけては、同じく井戸が一定間隔で設けられ、町屋が進出したことがわかる（Ⅲ－Ａ期）。その後井戸は同時期に廃絶し、酒蔵と考えられる大規模な建物ＳＢ02が建てられる。このほかに、これに関連すると考えられる大形の竈や特異な遺構がみられ、そのいずれもが明治時代のうちに廃絶する。さらにその後、井戸や大谷焼甕を用いた便槽がいくつか設けられ、再び町屋となったことがわかるのである。したがって、ここでも第23次調査区と同様の時期区分を用いて記述することとする。



第19図　SK103・104・105・107遺構図

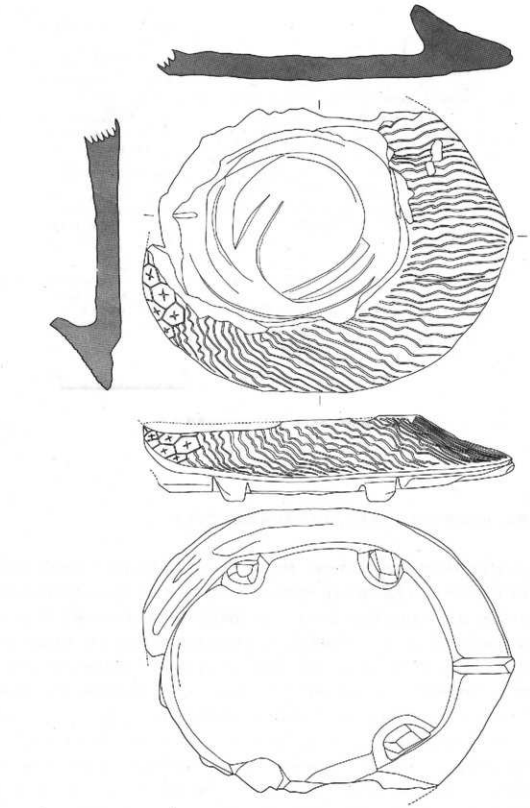
Ⅲ―A期

Ⅲ―A期は、18世紀後半から19世紀前半、とくに文化年間頃までである。

SE03

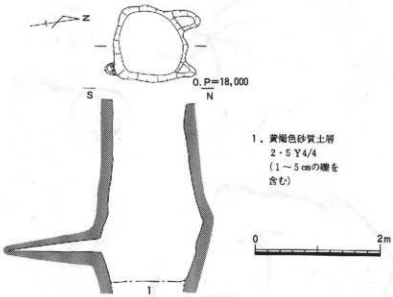
SE03は、調査区の西南部に位置する（第22図）。伊丹郷町に通有の下部素掘り井戸で、上面の平面形は地上に出る井桁を支えるために井桁状に組む支柱の関係から、正方形に近い形状を呈し、一辺1.15mを測る。さらに、四隅には、支柱（これには遺存していなかったが、花崗岩製の長方体のものが一般的である）のカカリの部分が痕跡として残っている。その距離からして、支柱は1.3m前後と推定される。井筒部分は円形で、O.P＝15.600m以下は、大きくえぐれている。深さは、2.5mまで確認したが底に達しなかった。

出土遺物には、多種多様なものがみられる（第23～25図）。第23図―1～3は、肥前磁器碗。1は、休部外面にやや雑な二重網目文、見込みに菊花文を描く。口径10.1cm、器高5.1cmを測る。ほぼ完形。2は、広東型碗。3は、ここでは珍しい色絵の碗である。口径10.3cm、器高6.5cmを測る。外面の圏線と窓絵の縁取り、内面の圏線と口縁部の帯文様のうち山と岩、見込みの草花文は呉須で描く。外面の格子文と窓絵の中の文様、内面口縁部の帯文様のうち家屋、船帆、花文および見込みの草花文の子葉の輪郭などは赤絵で描く。また、外面の窓内の菊花文の花弁や子葉、内面の家屋の屋根などに金彩を施す。さらに、窓絵の空間部分や内面の花文には、緑色を用いている。4は、筒型碗。口径7.1cm、器高6.1cmを測る。見込みの五弁花文は、コンニャク印判による。5は、広東型碗の蓋。口径10.1cm、器高2.9cm。天井部外面の文様は、岩・草花などを組み合わせた風景文である。6は、青磁染付碗の蓋。口径9.6cm、器高3cmを測る。発色が悪い。7は、御神酒徳利。



第20図　SK105出土遺物(1)

第21図　SK105出土遺物(2)

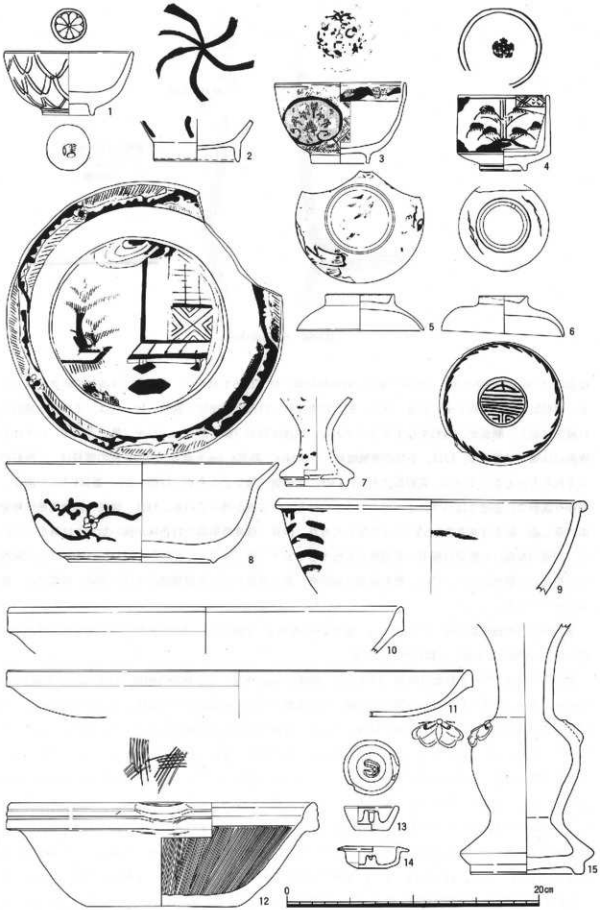


第22図　SE03遺構図

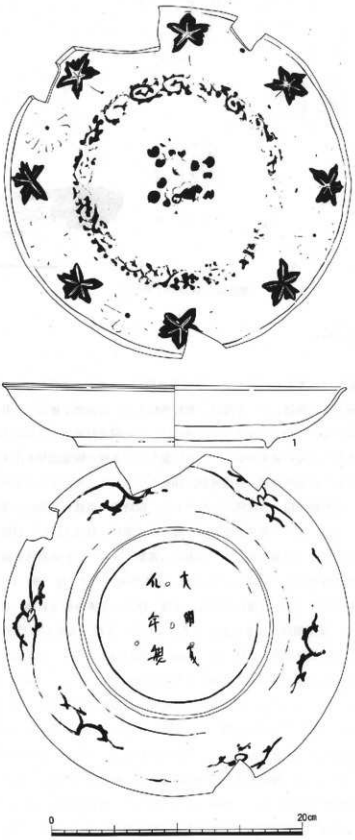
底部には、0.8cmの穿孔がみられる。8は、青磁染付鉢。蛇ノ目凹型高台で、高台内には渦福の銘款がみられる。口径21.5cm、器高8cmである。9は、刷毛目唐津鉢。口縁部上面は、露胎。10・11は、土師質土器焙烙。口縁部は低く、断面が三角形をなすタイプである。口径は10が（推）31.2cm、11が（推）36.1cm。いずれも、底部には煤が付着する。12は、小型の堺焼擂鉢。口径24cm、器高8.2cmを測る。内面底部の擂目は、三角形のくずれたものとなっている。完形品である。13は、土師質土器ひょうそく。口径4.2cm、器高1.9cmを測る。型作り成形で、芯立てはヘラによってへこみをつける。灯芯痕が残っている。14は、伊賀・信楽焼系灰釉急須の落し蓋。胎土は黄茶色2.5Y 5/3を呈しており、伊賀・信楽焼製品の白色味が強い胎土とは異なっている。同様の製品は大阪府貝塚市の音羽窯でも出土しており（南川孝司・渋谷高秀・森村健一1991年）、大阪近辺の製品の可能性が高い。15は、肥前磁器青磁花瓶。高台畳付および内面頸部以下は、露胎。肩部には、蝶文をハリツケる。

第24図は、肥前磁器大皿。口径27.3cm、器高4.9cmを測る。内面には、菊花・楓葉などを配する。外面高台内には、「大明成化年製」の銘款がみられる。

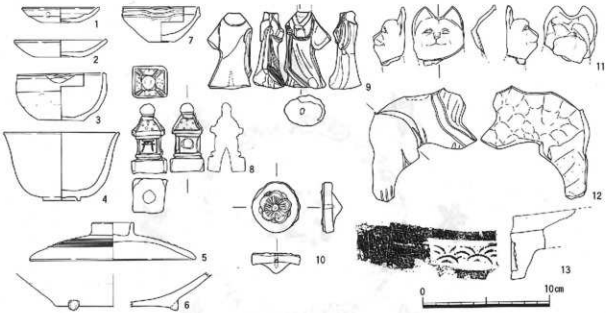
第25図―1は、受付き柿釉灯明皿。口径6cm、器高1.2cmである。2も柿釉灯明皿。口径7.2cm、器高1.4cmを測る。3は、伊賀・信楽焼の小型の片口鉢。外面体部下半から底部にかけて露胎、他は鉄釉を掛ける。口径6.8cm、器高3.6cm。内面には鉄錆が付着しており、お歯黒入れとして用いられたことがわかる。4は、京焼系白磁碗。胎土は、磁土を用いている。高台および高台内は、露胎。口径9cm、器高5.4cm。5は、伊賀・信楽焼灰釉鍋の蓋。天井部に11本の擂目を施す。口径13cm、器高3cmである。6は、同灰釉鍋の底部。外面底部は、露胎。2箇所にハリツケの脚が残る。7は、ロクロ成形の土師質土器ミニチュア擂鉢。備前焼もしくは堺焼擂鉢を模倣したものである。外面底部には糸切り痕が残る。8～12は、土人形。合わせ型による成形。8は、神輿。窓の中には鳥居が表されている。9は、遊女立像。10は、独楽。上面には、木軸を差し込む孔が設けられている。11・12は、中空の型押し成形の人形である。表裏の型に型押しした後、張り合わせて成形する。11は、犬の顔の部分。胎土は、白色味が強い。12は、立ち犬。胎土は、にぶい橙色5YR 7/4を呈する。これらは、堺環濠都市遺跡出土遺物と共通するものが多い（鳴谷和彦1984年）。13は、青海波文軒



第23図　SE03出土遺物(1)



第24図　SE03出土遺物(2)



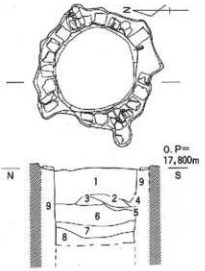
第25図　SE03出土遺物(3)

平瓦。瓦当部の高さは、3.6cm。

ＳＥ05

ＳＥ05は、調査区西北部に位置する（第26図）。平面形は円形で、掘形の直径1.16m、井戸内部の直径0.88m、深さは手掘りで0.86mまで確認した。上部は、黄橙色粘土を0.14m幅で廻して、井筒変わりにしている。その上面には、丸瓦を並べる。このようなタイプの井戸は、この調査対象区では他にみられない。

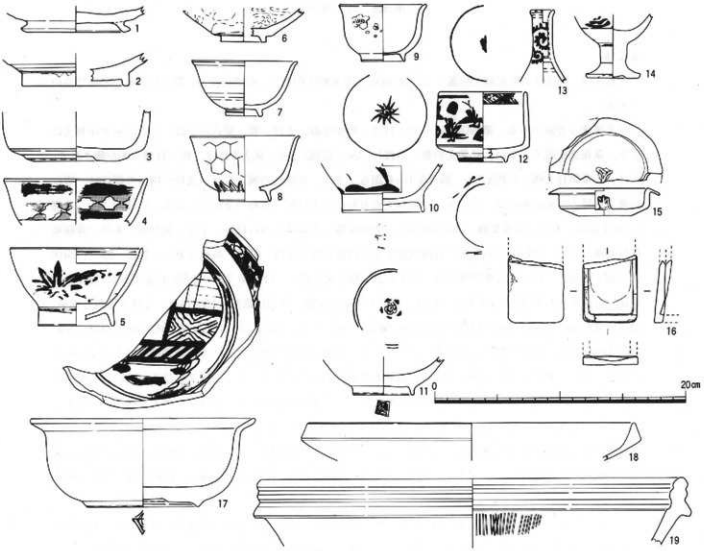
出土遺物には、破砕された大量の屋瓦がある。これに混じって各種の陶磁器類が出土した。このうち、第27図―１は須恵器坏身もしくは壺の底部。外面底部は回転ヘラケズリ、高台はハリツケ。内面底部は、不定方向のナデ調整を施す。中村編年Ⅲ―３段階のものである。同時期の遺構・遺物は、現在調査中の西側の宮ノ前地区でもみられる。２は、瀬戸・美濃焼灰釉鉢。高台は、露胎。見込みには、目跡が１つ残る。３は、肥前磁器青磁香炉。幅の広い蛇ノ目高台をもつ。内面は、露胎。４は、肥前磁器赤絵碗。内面および外面の松皮菱文を赤絵とし、他は呉須によって描く。５･10は、広東型碗。５は口径（推）10.5cm、器高6.2cm。10の高台内には、鉛ガラスで「：三六」と書いている。６は、瀬戸・美濃焼刷毛目碗。白化粧土を用いて刷毛目を描き、灰釉を掛ける。操業期間が19世紀前半と考えられている瀬戸市勇右衛門窯に、類例がみられる（藤澤良祐他1987年）。７は、京焼系碗。口径（推）8.3cm、器高4.4cmを測る。ＳＥ03出土遺物の第26図―４と同形であるが、これは胎土に京焼系陶器に共通する白色の陶土を用いている。また、高台が「ハ」の字状に外側に広がる点が異なっている。８は、産地不明の白磁碗。外面体部は亀甲状、高台際は花弁状にヘラケズリする。９は、産地不明の掛分けの湯呑茶碗。口径（推）6.8cm、器高4.6cm。内面を白土、外面は透明釉を掛け、白土によって梅花を描き、その輪郭および花芯を鉄絵によって描く。11～14は、肥前磁器。11は、青磁染付碗。12は、筒型碗。13は、御神酒徳利。外面体部には、蛸唐草文を描く。14は、仏飯具。脚底部は、露胎。15は、伊賀・信楽焼系急須落し蓋。下面は、露胎。胎土は、灰色10Ｙ６／１を呈する。口径8.8cm、器高2.2cmを測る。16は、石製硯。暗灰色Ｎ３／０を呈する粘板岩製の石材を用いる。17は、肥前磁器青磁染付鉢。高台は、蛇ノ目凹型高台となっている。18は、土師質土器焙烙。外面底部は、型作り。口縁部、内面は回転ナデ調整。19は、堺焼擂鉢である。



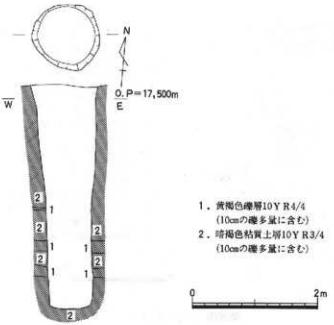
1．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4
（1～3cmの礫、炭化物含む）
2．黄褐色砂質土層10YR5/6
（0.5～1cmの礫含む）
3．にぶい黄褐色粘質土層10YR4/3
（1～2cmの礫、炭化物含む）
4．黒褐色粘質土層10YR3/2
（炭化物含む）
5．黒色炭化層10YR1.7/1
6．黄褐色粘質土層2・5Y5/4
（礫多量に含む）
7．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4
8．オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/6
（1～5cmの礫含む）
9．黄橙色粘土層10YR7/8

0　1m

第26図　SE05遺構図



第27図　SE05出土遺物



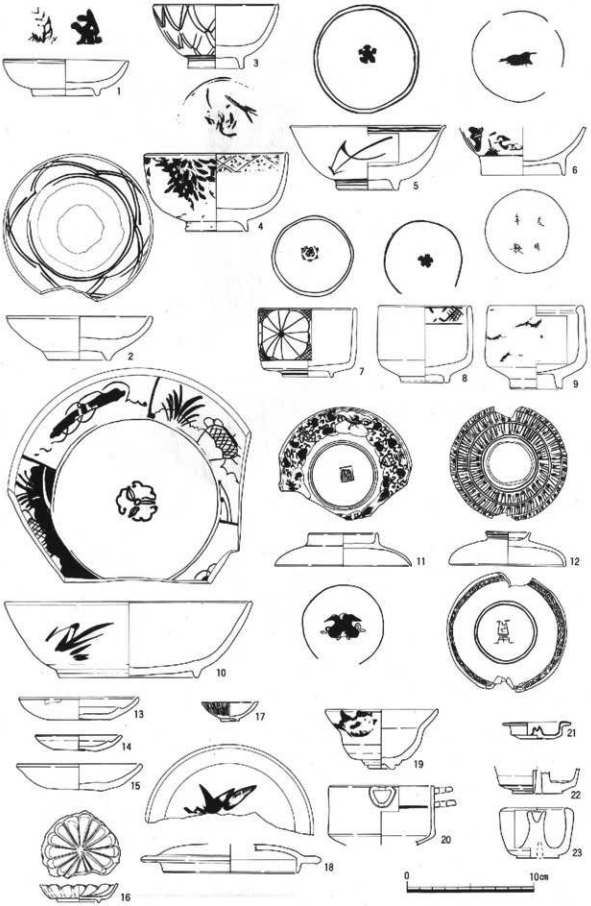
第28図　SE10遺構図

ＳＥ10

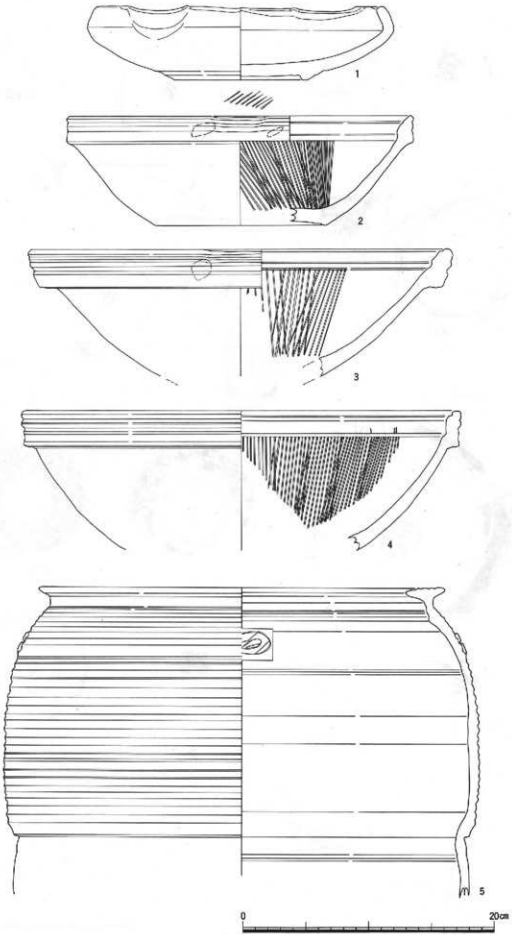
ＳＥ10は、調査区の北東部に位置する（第28図)。平面形は円形で、直径1.07ｍ、深さ3.57ｍの素掘り井戸である。

出土遺物は豊富である。第29図－１～12・17は、肥前磁器。１は、皿。見込みには、コンニャク印判文により、草花文を描く。２は、松葉文の皿。口径11.3cm、器高3.5cm。見込みには、蛇ノ目釉ハギが施される。３は、二重網目文碗。口径9.7cm、器高5.1cmを測る。４は、竹笹文の碗。５は、端反り碗。外面には、折れ松葉文を描く。見込みには、コンニャク印判文の五弁花および蛇ノ目釉ハギがみられる。口径12.2cm、器高5.1cmを測る。６は、広東型碗。高台内には、「大明年製」の銘款がみられる。７は、筒型碗。８は、青磁染付筒型碗。９は、陶胎染付の香炉。外面底部および内面体部下半は、露胎。焼成は悪い。10は、鉢。内面体部に宝文を描く。11は、広東型碗の蓋。宝文および福寿文を描く。口径10.7cm、器高2.6cm。12は、端反り碗の蓋。口径９cm、器高2.7cmである。17は、型押しの白磁紅皿。外面は露胎。13・14は、受付き柿釉灯明皿。13は口径9.3cm、器高1.8cm、14は口径6.6cm、器高1.2cmである。15は、受けのない柿釉灯明皿。口径9.7cm、器高２cmを測る。16は型押しの菊花型ミニチュア皿。全面に柿釉を掛け、見込みには銅緑釉によるタンパンを施す。18は、瀬戸・美濃焼陶胎染付の壺蓋。天井部外面には、呉須によって笹文を描く。19は、萩焼湯呑茶碗の開口小碗。高台は、渦巻高台。外面底部を除いて、薬灰釉を掛ける。20は、京焼系灰釉餌鉢。取手には、上下に貫通する直径0.5cmの穿孔が施される。内面体部には、鉄釉による一条の界線が描かれる。21は、伊賀・信楽焼系鉄釉急須の落し蓋。完形品である。口径5.4cm、器高1.3cmを測る。下面は、露胎。22・23は、ロクロ成形、鉄釉掛けのひょうそく。23は、完形品。口径4.8cm、器高４cmを測る。内面には、煤が付着する。

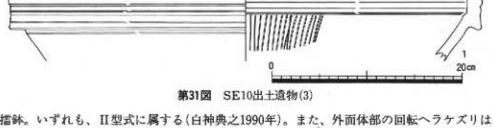
第30図－１は、瀬戸・美濃焼灰釉鉢。口径（推）22.6cm、器高６cmを測る。口縁部を内傾させ、変形鉢としている。高台は、碁笥底。見込みに目跡がひとつ残る。瀬戸市新七窯採集遺物に、口縁部を内傾させない、類似の遺物がみられる（藤澤1987年)。この窯は、18世紀末～19世紀前半に操業期間が想定されている。２～４



第29図　SE10出土遺物(1)



第30図　SE10出土遺物(2)



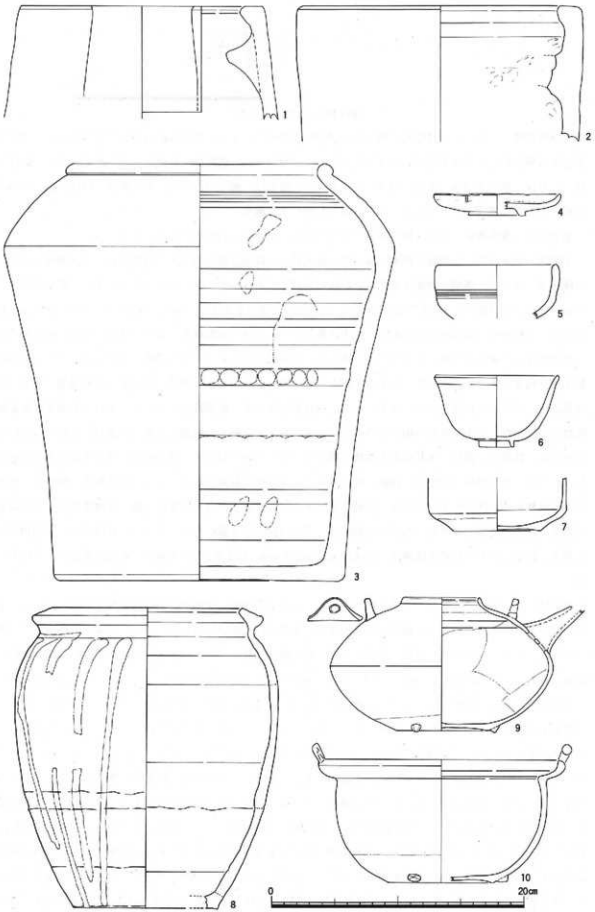
第31図　SE10出土遺物(3)

は、堺焼擂鉢。いずれも、Ⅱ型式に属する(白神典之1990年)。また、外面体部の回転ヘラケズリは、口縁部直下まで施される。2は小型で、口径(推)27.3cm、器高8.8cm。擂目は、右回りに施される。3は、擂目が粗い。口径(推)33.2cm。4は、口径(推)34.5cm。擂目は、細かい。5は、丹波焼甕。口径(推)31.8cm。肩部に小さな不遊環をハリツケる。内・外面とも塗り土を施す。

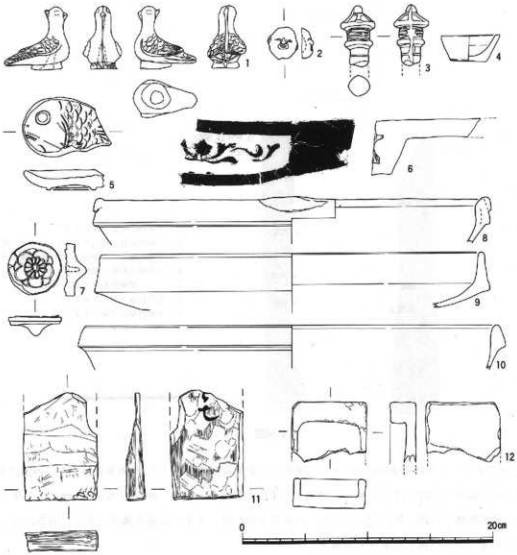
第31図は、堺焼擂鉢。口径(推)50cmと大型である。やはり、Ⅱ型式のものである。

第32図―1・2は、土師質土器風炉竈。粘土紐成形で、外面は横方向のナデ調整の後、赤色顔料を塗る。口縁部は、ヨコナデ調整。内面はナデおよび指圧調整で、角状の受けをハリツケする。また、煤が付着している。1は、炊口部分、2は奥壁部分である。同一品の可能性があるが、接合しなかった。3は、土師質土器火消壺。口径20cm、器高33.2cmを測る。粘土紐巻き上げ、型作り分割成形である。肩部、体部、底部をそれぞれ型によって成形した後、ハリツケる。外面は、後回転台によるヨコナデ調整。内面もヨコナデを施すが、指圧痕が残る。筆者の編年のⅡ―1型式である[(1)](川口1989年)。4は、京焼系の皿。胎土は磁器質である。口縁部はヘラによって輪花状にへこみをつくり、銅緑釉を掛ける。底部は露胎。5は、瀬戸・美濃焼腰錆茶碗。体部上半は灰釉、下半は鉄釉の掛け分けとしている。6は、京焼系白磁端反り碗。口径(推)9.7cm、器高5.7cmを測る。底部は、露胎。ＳＥ05出土遺物(第27図―7)と同一製品で、釉薬が厚く内・外面とも貫入が著しい。7は、京焼系鉢。底部は、露胎。見込みには、3箇所に目跡が残る。8は、丹波焼甕。外面は、鉄釉の上に灰釉を流し掛けする。内面は、灰釉を薄く掛ける。9は、伊賀・信楽焼土瓶。外面底部および口縁部は露胎。他は、灰釉を掛ける。内面の灰釉は薄く、注口部基部は露胎となっている。口径6cm、器高10.7cmを測る。10は、伊賀・信楽焼鉄釉鍋。口径19cm、器高9.8cm、把手幅7.1cmを測る。底部は露胎で煤が付着する。

第33図―1～5は、土人形。1は、雉か。合わせ型による成形。後頭部に羽根の表現がなされている。赤色顔料が部分的に残る。2は、布袋。型押し成型。裏面には、指圧痕が残る。3は、灯篭。表面にはドロキラが残る。4は、ロクロ成形の鉢。底部に糸切り痕が残る。胎土が粗く、2mm前後の白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、橙色5ＹＲ6/8を呈する。5は、鯛を形取った型押し皿のミニチュアである。高台は、四角に表現されている。精緻な胎土を用い、灰白色7.5ＹＲ8/2を呈する。表面には、ドロキラが残る。6は、均整唐草文軒平瓦。中心飾りは、花冠である。脇区は広く、江戸時代後期の特徴を示す。7は、合わせ型による土鈴楽。上面に花文を施す。ＳＥ03出土品と比較すると、直径が4.1cmとこれの方がひとまわり大きい。8～10は、土師質土器焙烙。いずれも、底部には煤が付着する。8・10は、口縁部が幅の狭いタイプ。8は口径(推)30cm、10は口径(推)32.7cmを測る。8には、ハリツケによる耳が遺存する。両者とも、淺黄橙色7.5ＹＲ8/3である。9は、口縁部が幅広く、時期的に8・10よりさかのぼるものである。橙色7.5ＴＲ7/6を呈する。11は、灰白色10Ｙ8/1の粘板岩製の仕上げ砥石。図左および下側面は切断され、右側面は破断面のままとなっている。上面は、使用痕が著しい。裏面にはノミ痕が明瞭に残り、「□七」の墨書がみられる。所有者の名前であろうか。12は、石製硯。花崗岩質の石材で、にぶい黄橙色10ＹＲ7/4を呈する。愛媛県伊予市の虎間石か。海は、深い。全面に墨が付着する。



第32図　SE10出土遺物(4)

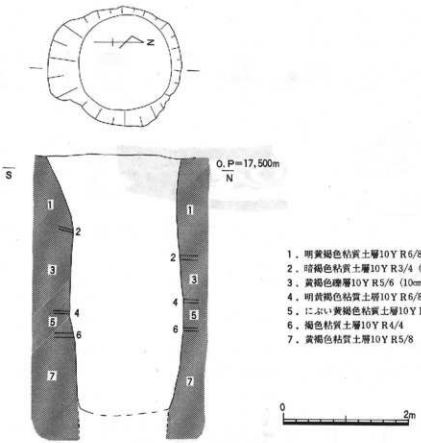


第33図　SE10出土遺物(5)

ＳＥ11

ＳＥ11は、調査区東側の中程に位置する（第34図）。平面形は、不整楕円形を呈し、長径2.15ｍ、深さは4.15ｍまで確認したが底部に達さなかった。断面形は、Ｏ.Ｐ＝15.000ｍ付近でわずかにえぐれている。これは、先述した井戸に共通しており、水面の高さを示しているものと考えられる。

出土遺物の様相は、ＳＥ05・10と同様の様相を示しており、同時期に廃絶したことがうかがえる。第35図―１・３～６は、肥前磁器。１は、碗蓋。３は、内面に宝文を描く。皿として挙げたが、碗蓋の可能性もある。４は、二重網目文碗。見込みには菊花文が描かれ、灰被りがみられる。５は、段重。口径14.4cm、器高6.6cmを測る。口縁部および畳付は露胎。焼き継ぎされており、高台内に赤絵による印書きがみられる。６は、松葉文皿。高台の断面は、三角形となる。見込みには蛇ノ目釉ハギがみられる。２は、産地不明の陶胎の白磁碗。焼成不良で、底部は黒味を帯びる。７・９・10は、京焼系灰釉陶器。７は、灯明皿。口径6.3cm、器高1.3cmを測る。９は、受付き脚付き灯明具。口径6.6cm、器高4.1cmを測る。10は、鉢蓋。口径8.2cm、器



第34図　SE11遺構図

高0.9cmである。天井部内面は露胎。8は、伊賀・信楽焼灰釉鍋蓋。11は、丹波焼鉄釉徳利。内面は無釉。12・13は、堺焼擂鉢。13は、擂目が粗い。14は、土師質土器焙烙。口径（推）33.8cm。外面には、煤が付着する。15は、丹波焼甕。口径（推）43cmを測る。口縁部上面には、4条の沈線を施す。また、肩部には、不遊環をハリツケる。内・外面とも塗り土を施す。

第36図－1は、土師質土器火消壺。体部内・外面はヨコナデ調整、底部外面は未調整でハナレ砂がみられる。内面には、煤が全面に付着する。2は、丸瓦。全長23.5cm、幅13.4cmを測る。玉縁部は短く、3.4cmである。丸瓦部凹面にはコビキB（鉄線引き－森田克行1984年）痕、玉縁部凹面には紐袋痕がみられる。

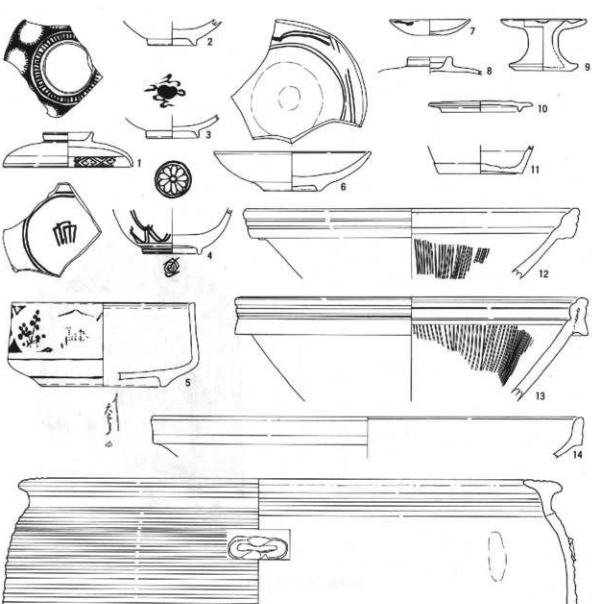
SB01

SB01は、調査区の西南部に位置する、1間×1間の掘立柱建物である（第37図）。東西の柱間距離は4.92mで、京間（1.969m）で2間半、南北は3.91mで同じく約2間の距離である。本来、この間にも柱が存在した可能性があるが、地山面まで掘削した段階で検出しているため、不明である。おそらく、四隅の柱穴は、深く据えたために残ったものであろう。このうち、P3には、根石が遺存していた。

遺物は図示するに至らなかったが、P4から土師質土器焙烙や肥前磁器白磁猪口が出土しており、この時期の建物と判断できる。本来、この時期の建物は礎石建物が一般的であるが、なかにはこのような掘立柱建物もみられる。これは、目的に応じて建物を作り分けた結果と考えられる。

SD04・09・10

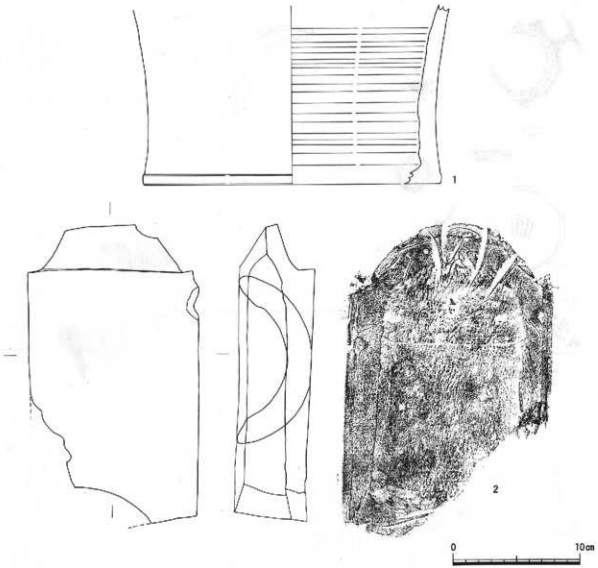
SD04・09・10は調査区北東隅に位置し、第23次調査区にまたがる遺構である（第38図）。さきの第23次調査区の報告のなかで、この西側に平行して延びるSD14の説明に際して、これについても触れた。すなわち、



第35図　SE11出土遺物(1)

ＳＤ14を含めて４本の溝はいずれも長さ4.5ｍ前後、幅約0.45ｍ、深さ0.25cm前後で、約0.45ｍの間隔で並んでいる。また、ＳＫ152～154、156～160、166～172という連続する円形土壙に切られている。このことから、一連の遺構と考えられ、その性格として『日本山海名産図会』(蔵関月　寛政十一年・1799年）にみえる伊丹の酒造りの場面の米の洗場のような施設を想定している（第41図)。

このうち、ＳＤ10から図化できる遺物が出土している。第39図－１は、肥前磁器染付碗。梅花文を描き、口径9.7cm、器高5.4cmを測る。２は、京焼系色絵碗。３は、中空の土人形。上部が欠失しており、何を形取ったか不明であるが、前脚を揃えて座った動物、すなわち犬か猫であろうと考えられる。



第36図　SE11出土遺物(2)

ＳＫ152～154、156～160、166～172

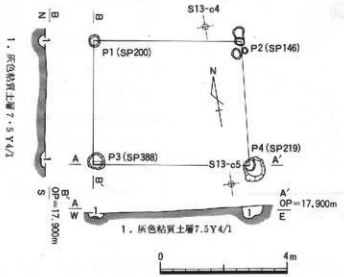
これは、前述の溝ＳＤ08・09・10を切って平行に設けられる3列の円形土壙列である（第38図）。ＳＫ152～154は３基、ＳＫ156～160は５基、ＳＫ166～172は７基の土壙からなりたっている。直径は0.5ｍ前後、深さ0.1ｍ前後である。ただＳＫ156だけは、直径0.98ｍ、深さ0.45ｍと規模が違っており、あるいは別に考えた方が良いのかもしれない。これらの土壙は、木桶を埋置した痕跡と考えられる。その性格は断定し難いが、なんらかの貯蔵施設と推定される。

遺物は図示するに至らなかったが、肥前磁器染付碗、堺焼擂鉢、土師質土器皿が出土している。

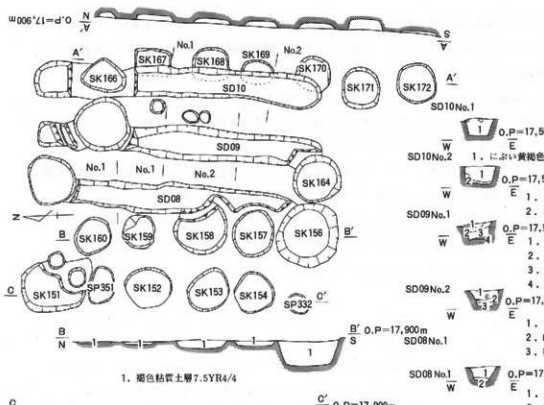
ＳＫ128・129・130

ＳＫ128・129・130は、調査区中央部に位置する（第40図）。ＳＫ128は、全長1.6ｍ、幅1.08ｍ、深さ1.17ｍを測る。ＳＫ129は全長3.77ｍ、幅２ｍ、底部は２段になっており、最深部で2.15ｍを測る。

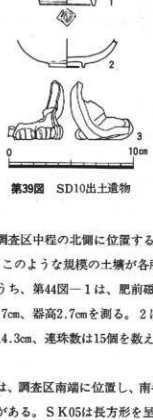
ＳＫ130は、西側に隣接するＳＫ129と形状を同じくする遺構である。その点で一連の遺構と考えられる。平面形は「Ｌ」字形を呈し、東西の長さ3.45ｍ、南北の長さ3.53ｍ、深さは東端が1.19ｍ、西側の最深部が1.91ｍを測る。すなわち、「Ｌ」字の縦軸の中央部分がもっとも深く、その両端および横軸が浅くなってい



第37図　SB01遺構図



第38図　SK152～154・SK156～160、166～172・SD08・09・10遺構図



第39図　SD10出土遺物

る。いままでに類例のない遺構であり、断定し難いが、酒蔵関係の酒絞りの装置の基礎となるものではないかと考えて、復元してみた（第41図―⑥）。このように復元すると、『日本山海名産図会』にみえる酒絞りの装置と良く一致するのである（第41図―⑤）。

出土遺物のうち、図示できるのはＳＫ130出土の第42図の肥前磁器染付碗である。丸窓文を体部外面に描く、厚手のいわゆる「くらわんか手」の碗である。口径11.1cm、器高６cmを測る。見込みの五弁花文はコンニャク印判による。また、蛇ノ目釉ハギがみられる。

ＳＫ01

ＳＫ01は、調査区中程の北側に位置する（第43図）。平面は長方形を呈し、長辺1.68m、短辺1.4m、深さ0.3mを測る。このような規模の土壙が各所に点在するが、いずれも性格は不明である。

出土遺物のうち、第44図―１は、肥前磁器皿。内面体部は墨弾きによって菊花文、見込みには松竹梅文を描く。口径18.7cm、器高2.7cmを測る。２は、伊賀・信楽焼系土瓶蓋。下面は露胎。３は、三ツ巴文軒丸瓦。瓦当部の直径14.3cm、連珠数は15個を数える。

ＳＫ05・06

ＳＫ05・06は、調査区南端に位置し、南半分は調査区外に延びる（第45図）。ＳＫ06はＳＫ05に切られていて、前後関係がある。ＳＫ05は長方形を呈し、全長1.32m以上、幅0.93m、深さ0.44mを測る。ＳＫ06は全長1.15m、幅0.46m以上、深さは最深部で0.10mを測る。底部は北側が深く、南側が浅い。

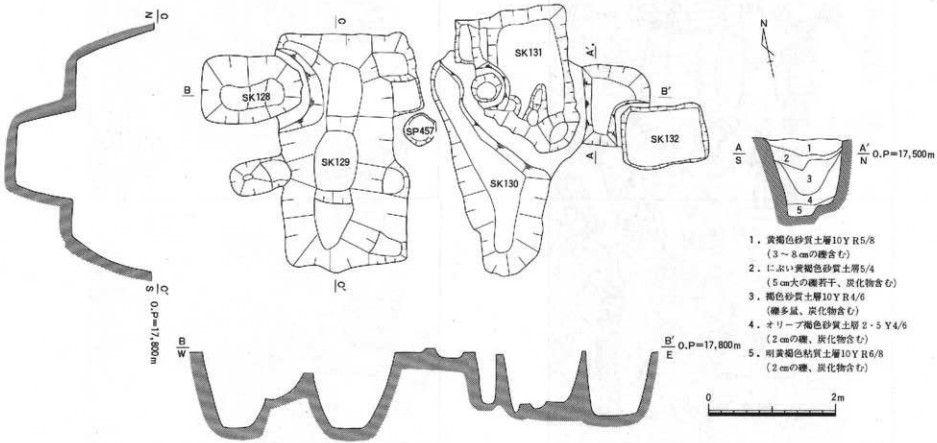
出土遺物のうち、第46図―１～４はＳＫ05、５～９はＳＫ06出土品である。ＳＫ05出土品のうち、１・２は肥前磁器碗。１は呉須の発色も良く、薄手の伊万里焼碗、２は厚手の波佐見焼などの碗である。これのみ、蛇ノ目釉ハギがみられる。３は、ミニチュア土製品の神楽太鼓。４は、伊賀・信楽焼系土瓶。底部外面に「正力」の墨書がみられる。ＳＫ06出土品のうち、５は肥前磁器碗。呉須の発色は良い。６は、京焼系碗。底部は露胎。体部外面には、鉄絵により草花文を描く。７は、型押しで枡形を表す、芥子面子。８は、ミニチュア土製品の擂鉢。ロクロ成形で底部はヘラ切り。全面に柿釉を掛ける。９は、産地不明の陶器刷毛目文皿。精緻な胎土を用い、灰釉を掛ける。高台は露胎。見込みには蛇ノ目釉ハギがみられる。九州系のものか。

このように、出土品には明瞭な時期差はみられず、両者とも18世紀後半のうちに営まれたものである。

ＳＫ07

ＳＫ07は、調査区南端のＳＫ05・06の北側に隣接する土壙である（第47図）。平面形は、不整楕円形を呈し、全長1.9m、幅0.83m、深さ0.11mを測る。後述するＳＫ08を切っている。

出土遺物には、図示したもののほかに屋瓦が含まれる。第48図―１・２は、柿釉灯明皿。１は、受けなし、２は受付きである。いずれも、底部は無釉。底部には、灯明油がこぼれたために生じた焦げがみられる。法量は、１が口径6.3cm、器高1.3cm、２が口径6.4cm、器高1.4cmである。３・５・６は、肥前磁器。３は、筒型碗。５は、丸型碗である。体部外面には梅花文が描かれる。この文様は、あまりみかけない。４は、京焼系碗。柳文かおもわれる文様の一部が、鉄絵によって描かれる。６は、青磁染付の蛇ノ目凹型高台の鉢。見込みには、人物が描かれる。

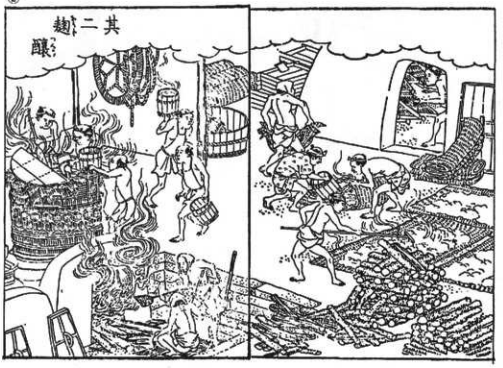


第40図　SK128・129・130・131・132、SP457遺構図

①

二　伊丹酒造　米あらいの図

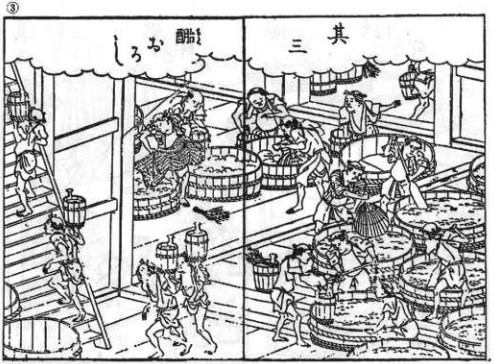
②



三　其二　麹醸

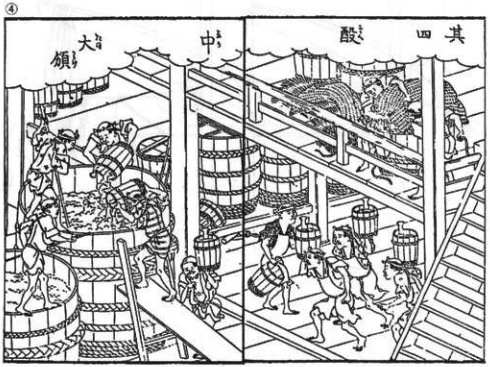
第41図　SK128～130遺構復元図及び『日本山海名産図会』挿絵（千葉徳爾註・解説『日本海名産図会』社会思想社　1970年より）

③



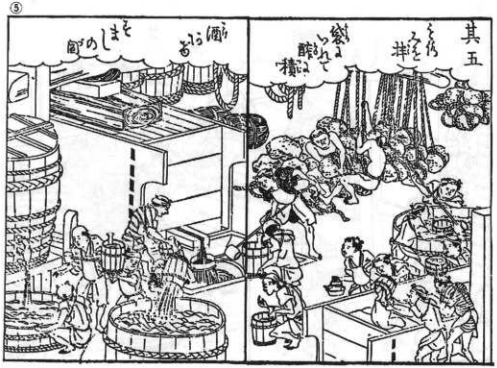
四　其三　醋おろし

④



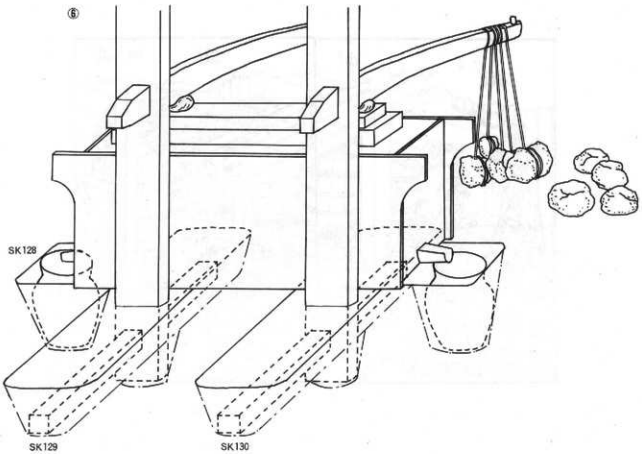
五　其四　酸　中　大頒

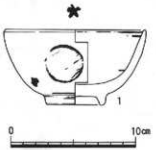
⑤



六　其五　もろみを絞　袋にいれて醉に積　酒あけ　すましの図

⑥

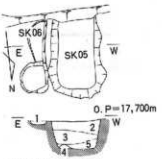




第42図　SK130出土遺物

1．暗褐色粘質土層10YR3/3

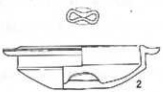
第43図　SK01遺構図

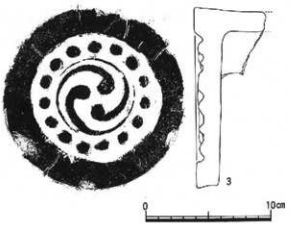


1．灰色砂質土層10Y4/1
（炭化物多量に含む）
2．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3
（遺物・炭化物多量に含む）
3．黒色粘質土層2・5Y2/1
（花崗岩質の岩板を含む）
4．明黄褐色粘質土層2・5Y6/8
5．にぶい黄褐色粘質土層10YR5/4

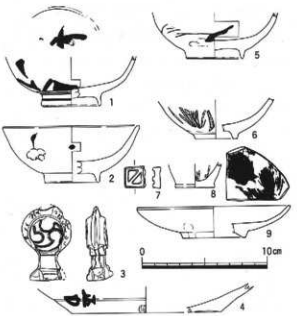
0　1m

第45図　SK05・06遺構図





第44図　SK01出土遺物



第46図　SK05（1・2・3・4）・SK06（5・6・7・8・9）出土遺物

第47図　SK07遺構図

第48図　SK07出土遺物

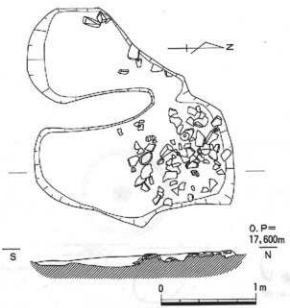
ＳＫ08

ＳＫ08は、平面形が四形を呈する土壙である（第49図）。全長2.33ｍ、幅2.1ｍ、深さ0.11ｍを測る。浅い土壙ながら本調査区のなかでも、まとまった遺物が出土したもののひとつである。ＳＫ07と同様に底部だけが遺存したため、このような深さとなったもので、本来0.3～0.4ｍはあったものと考えられる。

出土遺物のうち、１～３・11は、肥前磁器。１は、コンニャク印判により宝珠文を描いた小型碗。口径7.4㎝、器高4.1㎝。２は、広東型碗。口径（推）10.4㎝、器高は低く5.8㎝を測る。３は、丸窓文の「くらわんか手」の碗。口径12.1㎝、器高5.9㎝。見込みの五弁花文は、コンニャク印判による。11は、袴腰の青磁香炉。高台は、蛇ノ目凹型高台。内面は無釉。４～７は、灯明皿。４・５は、柿釉を掛けない、土師質土器のロクロ成形の皿。ほぼ同じサイズで、口径6.2㎝、器高1.2㎝前後である。６・７は、受付きの柿釉灯明皿。８は、伊賀・信楽焼系鉄釉急須の蓋。下面は、露胎。９は、京焼系色絵碗。赤絵によって、笹文を描く。10は、丹波焼灰釉鉢。内面口縁部直下から底部にかけて、灰釉を掛ける。外面は無釉。底部には、焼成後の直径1.2㎝の穿孔がみられ、二次的に植木鉢として用いられたことがわかる。口径22㎝、器高12㎝を測る。12は、瀬戸・美濃焼灰釉壺。口縁部外面および内面口縁部直下より底部にかけて露胎。肩部に紐作りの耳の痕跡が残る。13は、土師質土器焙烙。口径27㎝を測る。外面には煤が付着する。14は、堺焼擂鉢。口径（推）30㎝を測る。

ＳＫ53

ＳＫ53は調査区南端の中程、Ｓ13－ｂ５・ｃ５区に位置する土壙である（第51図）。平面形は不整長方形を呈し、全長2.25ｍ、幅0.85ｍ、深さ0.53ｍを測る。



第49図　SK08遺構図

第53図－3・4が、ＳＫ53出土遺物である。3は、柿釉灯明皿。外面は露胎。4は、瀬戸・美濃焼鐙茶碗である。口径（推）11.5cm、器高6.8cmを測る。外面体部のトビカンナ部分から下は鉄釉、他は灰釉を掛ける掛け分けとなっている。高台は露胎。

ＳＫ54

ＳＫ54は、ＳＫ53の北側に位置する、不整楕円形の土壙である（第52図）。全長1.41m、幅1.12m、深さ0.4mを測る。

第53図－1・2・5・6がＳＫ54出土遺物。1は、肥前磁器碗蓋。天井部内面の五弁花文は、コンニャク印判文である。2は、柿釉灯明皿。口縁部には、灯芯痕が残る。5は、土師質土器焙烙。外面には煤が付着する。6は、丹波焼甕。口縁部上面の沈線は、4本である。

ＳＫ63

ＳＫ63は、調査区の西南部に位置する土壙である（第54図）。平面形は楕円形を呈し、全長1.3m、幅1.05m、深さ0.44mを測る。

出土遺物のうち、第55図－1は肥前磁器碗。菊花文を内・外面に描く。2は、土師質土器焙烙。外面には、厚く煤が付着する。

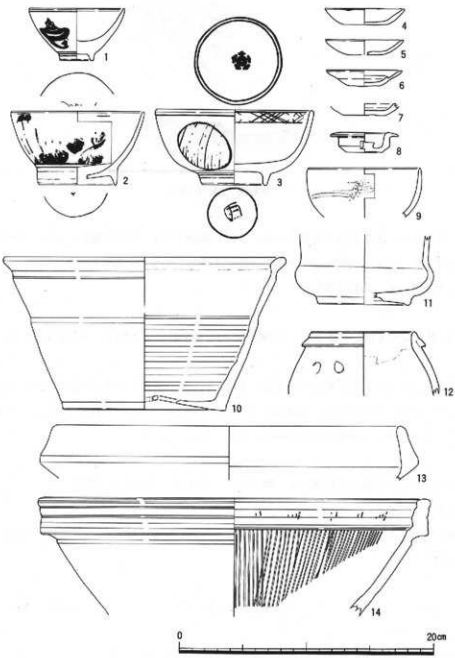
ＳＫ74

ＳＫ74は、調査区の西南端に位置し、南側は調査区外に延びる土壙である（第56図）。検出長0.7m、幅0.86m、深さ0.35mを測る。

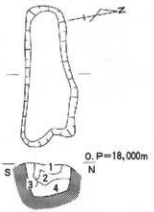
出土遺物の第57図は、板状木製品である。長さ25.7cm、幅18.9cm、厚さ0.7cmを測る。図下端は、斜めにカットされる。B面には、斜めに切り傷痕が残る。このほか、肥前磁器碗や屋瓦が出土しているが、図示するに至らなかった。

ＳＫ42

ＳＫ42は、調査区中程の南側に位置する（第58図）。平面形は不整方形を呈し、全長2.98m、幅2.51m、深さ0.13mを測る。浅い土壙ながら、遺物は豊富に出土した。



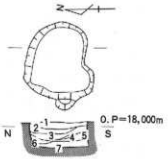
第50図　SK08出土遺物



1．オリーブ黒色粘質土層5ＹＲ2/3
(0.5～1cmの礫含む)
2．灰黄褐色粘質土層10ＹＲ5/2
(0.5～1cmの礫含む)
3．黒褐色粘質土層7・5ＹＲ3/2
4．にぶい黄褐色砂質土層10ＹＲ4/3
(1～4cmの礫含む)

0　1m

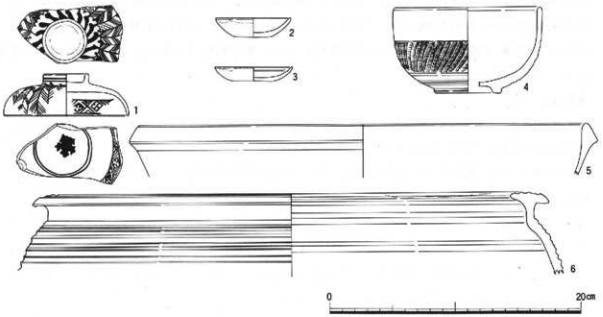
第51図　SK53遺構図



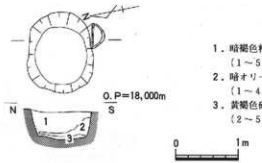
1．褐色砂質土層10ＹＲ4/6
(遺物含む)
2．褐灰色砂質土層10ＹＲ4/1
(2～3cmの礫、瓦含む)
3．灰黄褐色粘質土層10ＹＲ5/2
(1～2cmの礫含む)
4．黒褐色粘質土層10ＹＲ3/2
(1cmの礫含む)
5．暗褐色粘質土層10ＹＲ3/4
(1cmの礫含む)
6．暗灰黄色粘質土層
2・5Ｙ4/2
7．暗オリーブ褐色粘質土層
2・5Ｙ3/3 (遺物含む)

0　1m

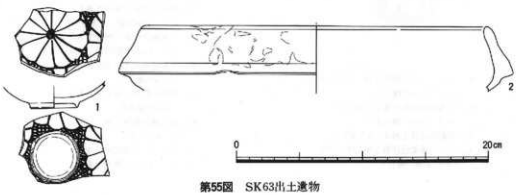
第52図　SK54遺構図



第53図　SK53（3・4）・SK54（1・2・5・6）出土遺物



第54図　SK63遺構図



第55図　SK63出土遺物

第60図－1・2・4～9が、SK42出土遺物である。1は、肥前磁器皿。見込みの五弁花文は、コンニャク印判文。2は、土師質土器皿。Ⅱ期有岡城期の遺物であり、混入したものである。口径（推）13.1cm、器高2.1cmを測る。本書の分類の3型式B類に属する。4は、肥前磁器徳利。焼成はやや不良で、笹文の中心部には釉切れがみられる。5は、同大皿。口縁部は、稜花状である。見込みには、梅花文を描く。口径（推）29.5cm、器高2.9cm。呉須の発色も良く、優品である。6は、丹波焼甕。全面に、鉄釉を掛ける。7は、伊賀・信楽焼の鉄釉鍋。底部は、露胎。8は、同灰釉土瓶。9は、備前焼鉢。口径9.5cm、器高6.4cmを測る。外面に「◇」の窯印がみられる。

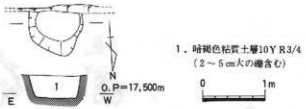
SP221

SP221は、SK42・SK55を切って設けられた、土師質土器丸火鉢を埋めた遺構である（第58・59図）。掘形の直径0.46m、深さ0.14mを測る。用途は判然としない。

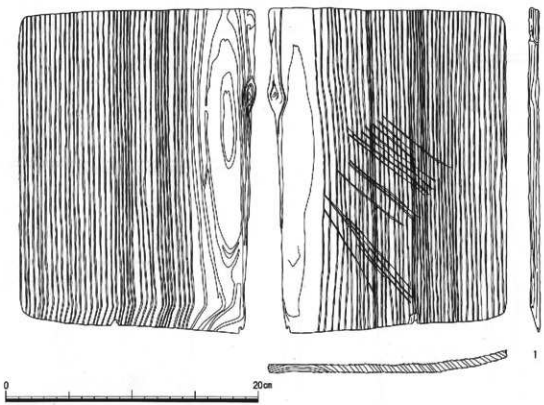
出土遺物のうち、第60図－3は肥前磁器碗。10は、瓦質土器炉。板作りハリツケ成形で、外面にはハナレ砂が付着する。後、角部分を辺に沿ってナデ調整する。これは、ハリツケに際しての行為である。内面も、角部分は辺に沿ったナデ調整。他は横方向のナデ調整を施す。口縁部は欠失しているが、水平に延びる口縁部が付くものと推定される。11は、埋められた土師質土器丸火鉢である。粘土紐型作り分割成形である。底部外面には、ハナレ砂が残る。高台は、3箇所に半月状の切り込みがみられ、前部には透かしが施される。外面全体に、赤色顔料を塗る。内面底部に「ニ」の墨書がみられる。

SP145

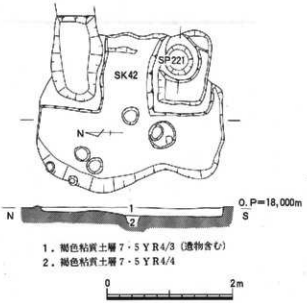
SP145は、調査区南西部のSB01・P2（SP146）の南に隣接する柱穴である（第61図）。直径0.35m、深さ0.39mを測る。



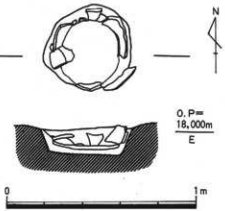
第56図　SK74遺構図



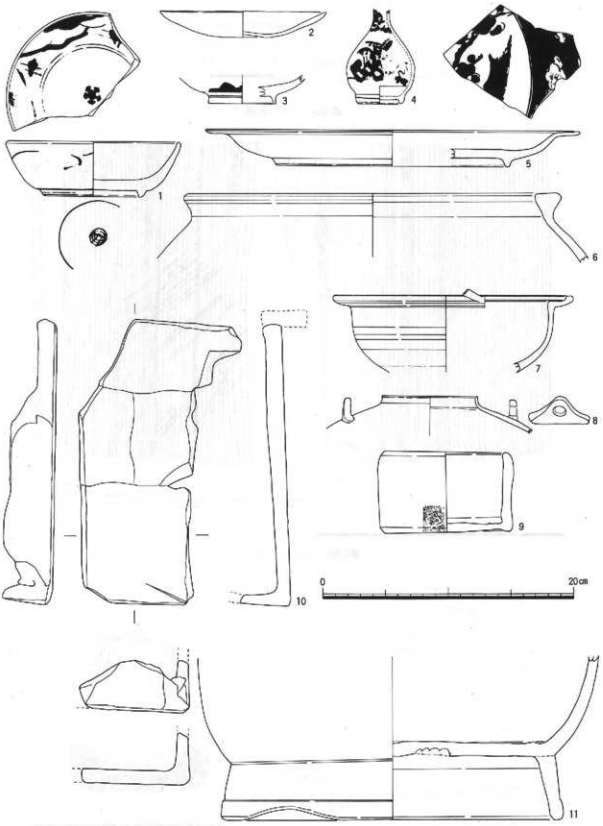
第57図　SK74出土遺物



第58図　SK42・SP221遺構図



第59図　SP221遺構図



第60図　SK42（1・2・4～9）SP221（3・10・11）出土遺物

第62図－1・2・4が、ＳＰ145出土遺物である。1・2は、肥前磁器碗。1は、二重網目文碗。2は、外面に牡丹文を描く端反り碗。呉須の発色は良い。4は、伊賀・信楽焼鉄釉鍋の底部。底部外面は、露胎。

ＳＰ215

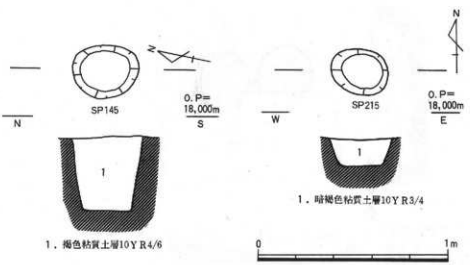
ＳＰ215は、ＳＰ145の西側に位置する（第61図）。直径0.3m、深さ0.13mを測る。

出土遺物には、第62図－3の肥前磁器端反り碗がある。これはＳＰ145出土同図－2と接合し、同時期の遺構であることがわかる。

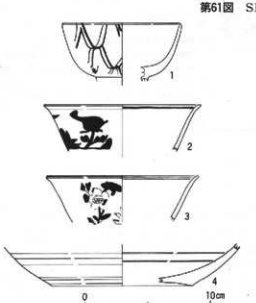
ＳＫ137

ＳＫ137は、調査区の北東部に位置する、円形の土壙である（第63図）。直径0.8m、深さ0.3mを測る。豊富な遺物が出土した土壙のひとつである。このような円形土壙は、木桶を埋めたものが多く、その大半は便槽である。しかし、この土壙には木桶の痕跡は残っておらず、それと断定できない。

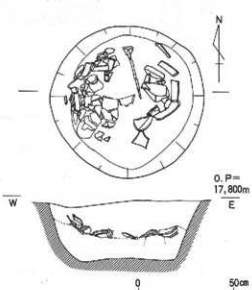
出土遺物には、肥前磁器碗・皿、丹波焼徳利・壺・甕、土師質土器焙烙、平瓦などがある。第64図は、このうち残りの良いものを図示したものである。1は、肥前磁器皿。松葉文を描き、見込みには蛇ノ目釉ハギ



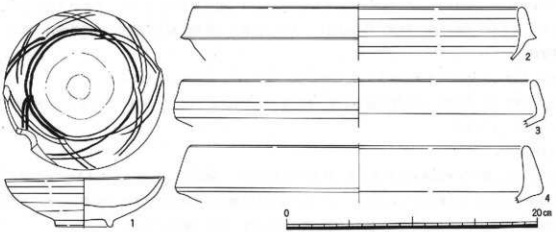
第61図　SP145・SP215遺構図



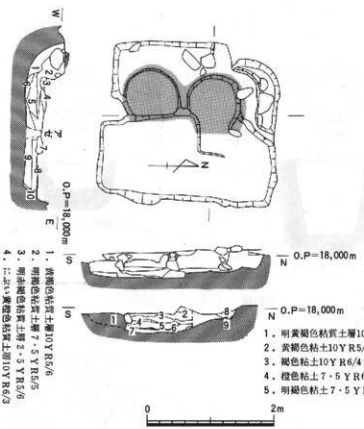
第62図　SP145(1・2・4)・SP215(3)出土遺物



第63図　SK137遺構図



第64図　SK137出土遺物



第65図　SX02遺構図

がみられる。2～4は、土師質土器焙烙。2は、口縁部と底部との境が突出するタイプ。胎土には、あまりクサリ礫がみられない。色調は、にぶい橙色7.5YR7/4を呈する。口径（推）26.4cm。3・4は、口縁部が直立するタイプ。2に比べて赤味が強く、3は橙色7.5YR6/6、4は橙色7.5YR7/6を呈する。胎土には、クサリ礫が多く含まれる。産地を異にするためであろう。4は、3に比べて口縁部が肉厚である。口径（推）27.2cm。3は、口径（推）27.8cmである。いずれも、外面には煤が付着する。

ＳＸ02

ＳＸ02は、調査区南側の中程に位置する、竈である（第65図）。半地下式となっており、平面形は方形を呈する。掘形の規模は、東西2.5ｍ、南北2.8ｍを測る。西側に、直径0.85ｍの燃焼室を２基設けている。東側は炊口となっており、７㎝ほど低くなっている。燃焼室を構築するにあたっては、黄色粘土を壁材としている。また、長方形の石や自然石、瓦片を壁の補強材として塗り込めている。

出土遺物には、肥前磁器碗・皿、伊賀・信楽焼灰釉鉢、平瓦などがあるが、図示するに至らなかった。

Ⅲ－Ｂ期

Ⅲ－Ｂ期の遺構には、酒蔵と考えられる大規模建物ＳＢ02やこれに関連すると考えられる大型竈ＳＸ01、特殊な遺構ＳＫ199など、酒造関係の遺構が顕著にみられる。これは、前述のように第23次調査区と同様のできごとである。その上限は、文化年間（1804～18）と推定している。また下限は、出土遺物から明治時代後期頃である。

ＳＢ02

ＳＢ02は、調査区北西部に位置する、大規模な建物である（第66図）。桁行（東西）、梁行（南北）ともに16.74ｍを測り、京間の寸法（一間・六尺五寸＝1.969ｍ）を用いる。検出したのはＳＳ07を除いて根石であり、この間にも根石を持たない柱があった可能性がある。根石に用いられた石材は、花崗岩が大半を占める。ＳＳ07は長さ0.82ｍ、幅0.55ｍ、高さ0.4ｍの巨石である。柱間は、桁行のＳＳ09・07間が二間（3.94ｍ）、ＳＳ07～01間が六間半（12.8ｍ）を測る。また、ＳＳ10・08間は、三間（5.9ｍ）を測る。ＳＳ07・08間は、一間分食い違っている。また、ＳＳ06もＳＳ08と食い違っており、その間は一間半（2.95ｍ）となっている。これは、部屋の間仕切りに変化を持たせていたためであろう。梁行は、ＳＳ01・02間が二間半（4.92ｍ）、ＳＳ02・03間が三間（5.9ｍ）、ＳＳ03・04間も三間（5.9ｍ）となっている。

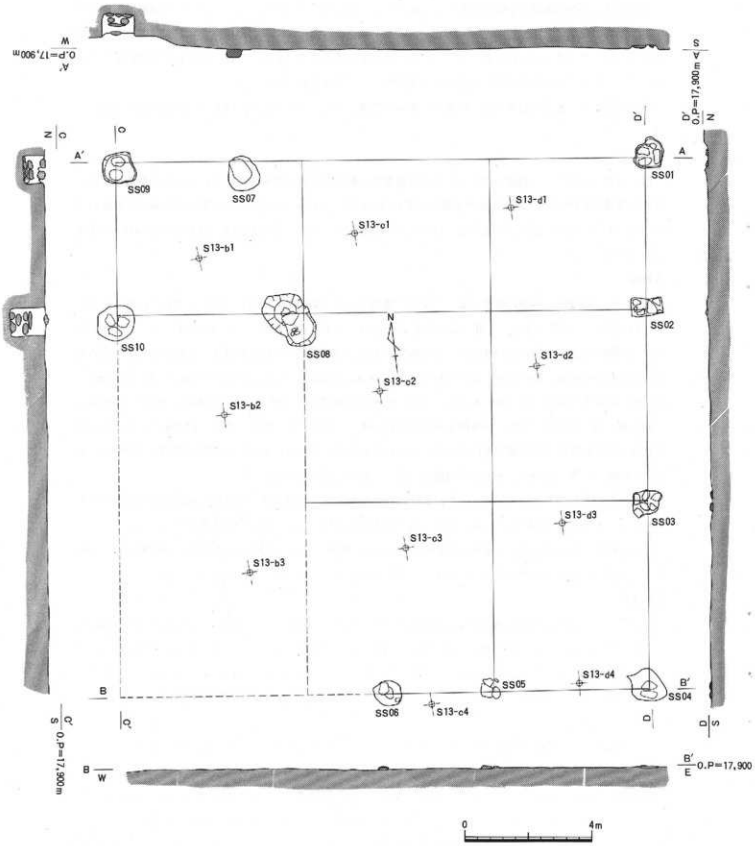
このうち、ＳＳ09・10はＳＦ01のなかに設けられており、ＳＳ09は３段、ＳＳ10は６段もの根石の積み上げをおこなって沈むのを防いでいる。また、ＳＳ03の根石のひとつに「拾四」の墨書がなされていた。

この建物は、後述する特殊な遺構ＳＫ199とも位置的に関連し、その規模の大きさからも酒蔵と考えられる。遺物はそれぞれから肥前磁器、丹波焼などの小片が出土しているが、図示するに至らない。

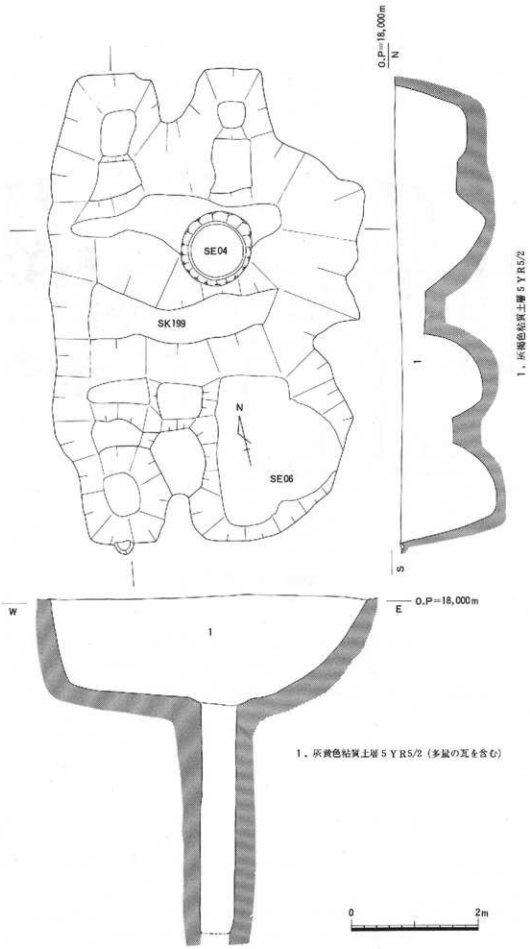
ＳＫ199

ＳＫ199は、ＳＢ02の内部に位置する、特殊な形をした大型の土壙である（第67図）。全長7.56ｍ、幅4.95ｍ、深さは、最深部で1.56ｍを測る。中央部には東西に高い峰部分があり、その北および南側は低くなっている。さらに北端および南端は、四隅が深く掘り込まれている。埋土上層には、大量の破砕された屋瓦が含まれていた。同様の遺構は、伊丹郷町北東端でおこなった第17次調査でも検出している（藤井直正・前川要・藤本史子1987年）。

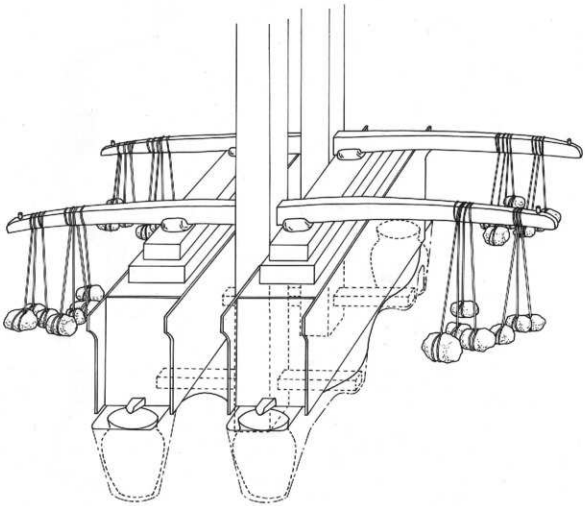
酒造工程において大規模な装置を伴うものとしては、大量の米を蒸す半地下式の竈、酒を絞る「船」と呼ばれる長方形の大型木箱とそれに付随する埋甕、酒樽などを二階に吊り上げる「阿弥陀車」と呼ばれる大型の滑車などがある（第41図）。この場合、四隅の深部を埋甕跡と考え、中央部に酒絞りの「船」を据えたとすれば、位置関係に矛盾はない。ただこの場合、埋甕が４箇所となり、それに伴う「船」は２基必要となる。とすれば、２基の「船」はそれぞれ両側に排出口を設けていたことになろう。また、１基の長さは４ｍ前後、幅は1.5ｍ前後となる（第68図）。未だ実例の基礎を調査した記録がないためあくまでも想像の域を出ず、結論は今後の調査に委ねざるをえないが、ひとつの解釈として記しておきたい。



第66図　SB02遺構図



第67図　SK199遺構図



第68図　SK199遺構復元図

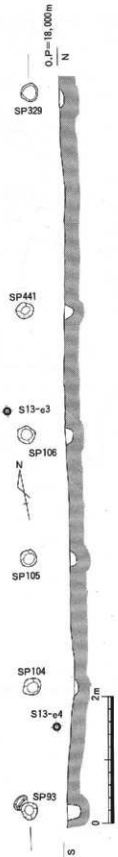
ＳＡ01

ＳＡ01は、調査区中央部に位置する、南北に延びる杭列である(第69図)。全長11.6ｍ、柱間距離２ｍ前後を測る。わずかに方向がずれるが、ＳＢ02に沿って設けられており、これに関連する区画のための塀と考えられる。出土遺物には、少量の肥前磁器類があるが、図示するに至らなかった。

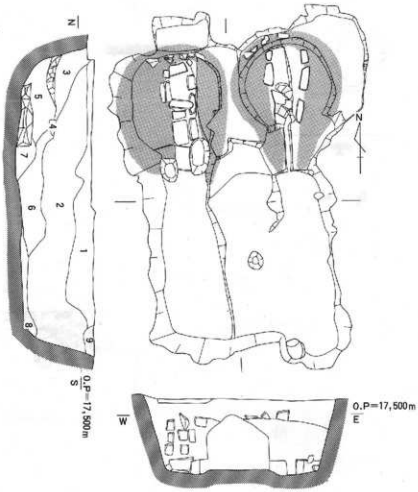
ＳＸ01

ＳＸ01は、調査区南東部に位置する竈である（第70図)。平面形が長方形を呈する掘形に、２基の大型燃焼室を設けた半地下式の大型竈である。掘形の規模は、全長5.72ｍ、幅4.05ｍ、深さ1.2ｍを測る。燃焼室の規模は直径1.55ｍ、高さ0.95ｍを測る。燃焼室の壁は黄色粘土を用いて構築され、内部には長方形の石が補強材として埋め込まれている。底部には長さ1.5ｍ、幅0.27ｍ、深さ0.18ｍの「凹」形に組んだ石囲いの灰落としが設けられる。ここには、炭化物が全面に残っていた。南東隅には長さ0.35ｍ、幅１ｍの突出部が認められ、石がひとつ遺存していた。これは、焚口に降りる降り口の痕跡と考えられる。埋土は一気に埋められた様相を呈し、大量の屋瓦を含んでいた。

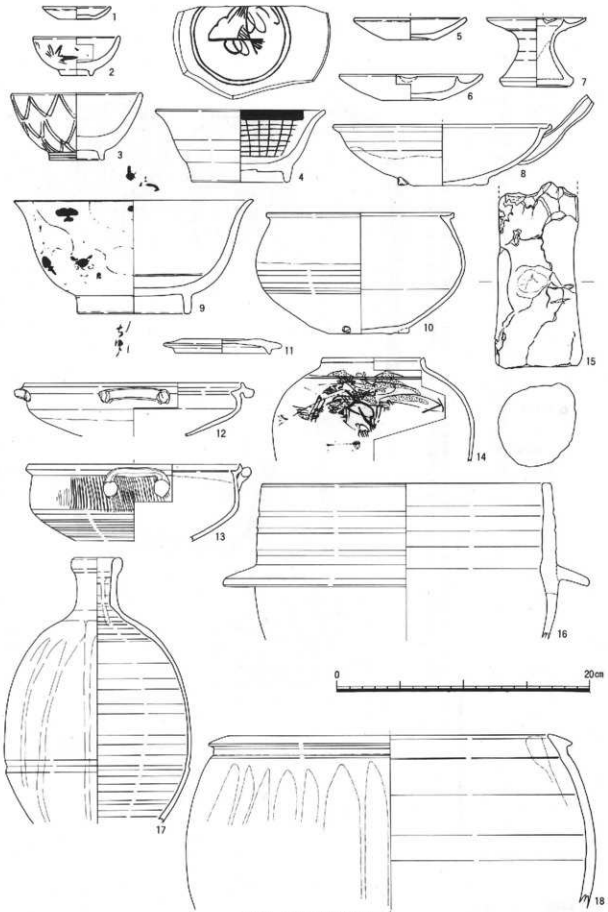
同様の遺構は、現在調査中の宮ノ前地区でも１基検出しており、周囲に酒蔵関係の建物などがみられる。また、『日本山海名産図会』にみられる酒造り用の竈と全く同じ構造である（第41図―②)。したがって、これも酒造りに用いられた工業用の竈と考えられる。これらの竈は、大量の酒米を蒸すための大型の釜をかけ、



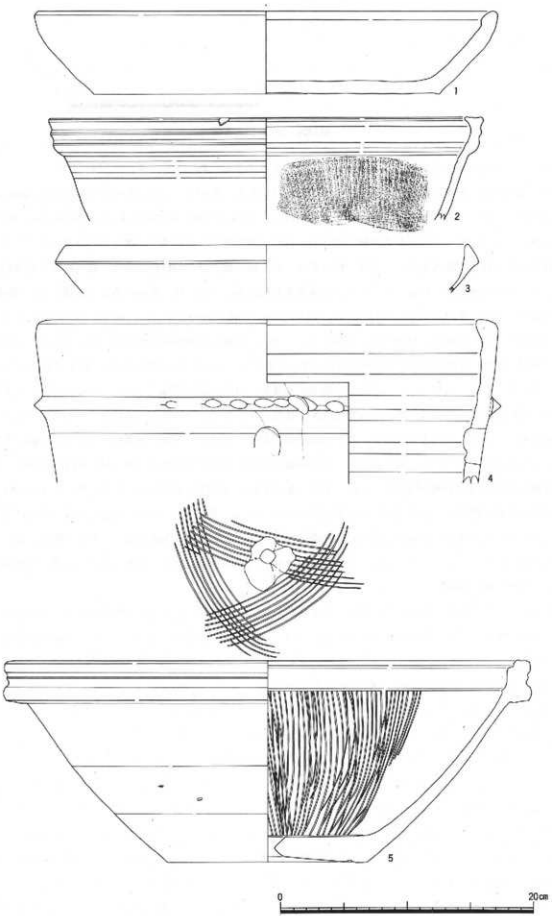
第69図　SA01遺構図



第70図　SX01遺構図



第71図　SX01出土遺物(1)



第72図　SX01出土遺物(2)

第73図　SX01出土遺物(3)

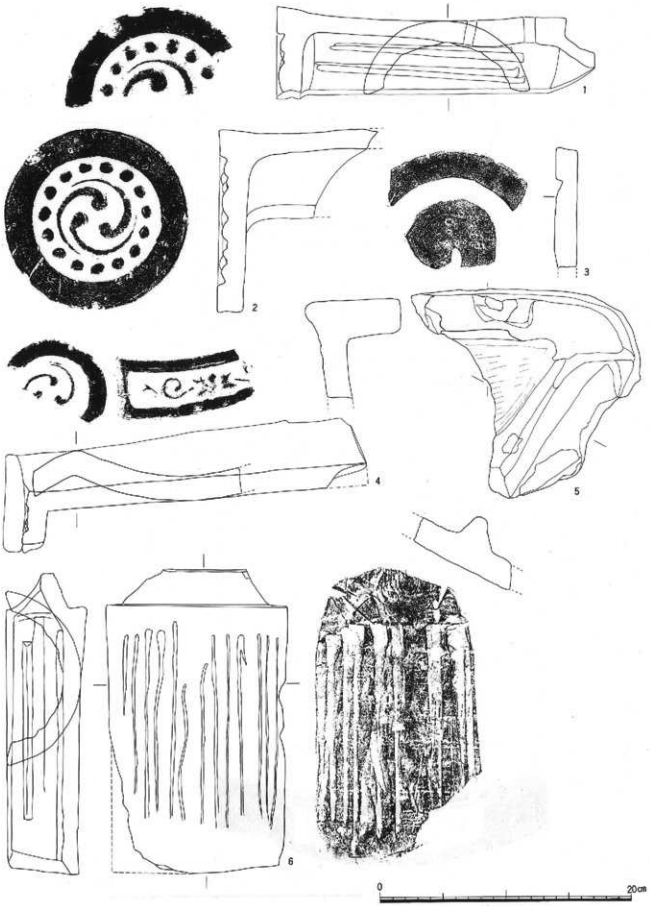
その上に蒸し器を乗せるため、地上式にすると高くなりすぎるために半地下式にしたものであろう。

出土遺物には、大量の屋瓦のほかに各種の日常雑器がある。第71図―１は、柿釉灯明皿。口径5.4cm、器高１cmである。２～４・９は肥前磁器。２は、坏。３は、二重網目文碗。完形品であり、口径10.2cm、器高5.3cmを測る。４は、蛇ノ目凹型高台の鉢。畳付のみ露胎。釉の溶け具合は悪く、部分的に虫食い状になる。肥前以外の生産地の可能性もある。９は、捻り花文を描く鉢。焼き継ぎの痕跡が残り、高台内に赤色顔料によって文字が書き込まれている。５～７は、京焼系灰釉灯火具。５は、皿。底部は露胎で口径6.7cm、器高1.8cmを測る。６は、受付きの皿。口径11.2cm、器高2.2cm。内面の施釉部分には、細かい貫入がみられる。７は、脚付き受付き灯明具。口径7.7cm、器高5.5cm。８は、伊賀・信楽焼灰釉行平鍋。浅手である。口縁部および底部は露胎。底部には脚が３箇所付され、煤が付着する。口径17.1cm、器高4.9cm（把手を含めると、7.2cm）を測る。10は、同鍋である。11は、京焼系灰釉鉢蓋。口径9.3cm、器高1.1cm。これは、伊賀・信楽焼の製品の可能性が高い。12は、伊賀・信楽焼浅鍋。体部は８の行平に近いが、口縁部直下が内弯しており、紐状粘土をハリツケした把手を有する。13も同灰釉鍋である。これは、内面のみ施釉しており、外面上半部には、トビカンナがみられる。14も同土瓶。外面体部には鉄絵で松葉文を描き、銅緑釉を部分的に施す。内面は無釉。15は、用途不明の円筒形土製品。全長（残）14.6cm、直径6.9cmを測る。胎土は粗く、１cm前後の小石が含まれる。色調は、還元炎のために灰色N６/０を呈する。窯道具か。16は、瓦質土器釜。底部は型作りで、ハナレ砂痕が残る。口縁部は直立し、外面には回転台による３条の沈線を施す。炭素の吸着は弱く、断面は淡黄色2.5Y８/３である。17は、丹波焼鉄釉徳利。内面は無釉。18は、同甕。内面には薄く透明釉が掛かる。口径（推）25cm。

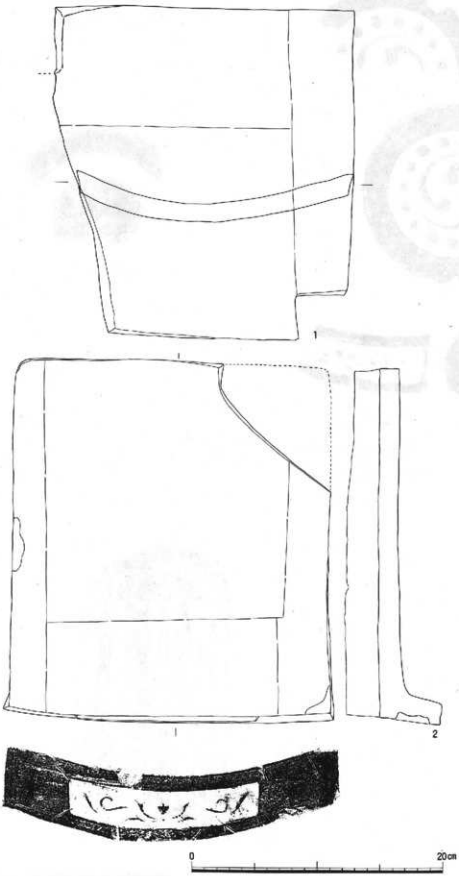
第72図―１・２も丹波焼である。１は、大平鉢。内面には、陶片による目跡が１箇所残る。16世紀末～17世紀前半の製品であり、混入品と考えられる。２は、鉄釉擂鉢。擂目は、細かい。３は、土師質土器焙烙。使用回数が少なかったためか、煤は付着していない。４は、土師質土器風炉竈。外面体部には、突帯をハリツケる。また、直径2.1cmの円形透かしが１箇所設けられている。内面には、煤が付着する。５は、堺焼擂鉢。底部には、直径1.1cmの穿孔がみられ、植木鉢として転用されたことを物語っている。

第73図は、土師質土器焙烙。口径（推）53cmを測る大型品である。

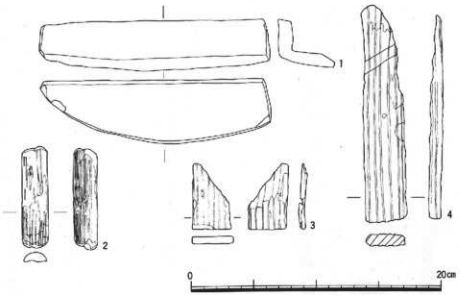
第74・75図は、屋瓦。第74図―１・２は、三ツ巴文軒丸瓦。１は、全長25.4cm、玉縁部長2.3cm、幅13.2cmを測る。２は、瓦当部径14.5cm、連珠数15個を数える。３は、飾り瓦か。４は、軒桟瓦。丸瓦部は三ツ巴文、平瓦部は均整唐草文である。均整唐草文はのびやかさに欠け、この時期の特徴を示している。ここでは、丸瓦部のない軒桟瓦の方が多いが良好な資料に恵まれず図示できなかった。後述する軒平瓦は最も少なく、古いものが大半を占めている。おそらく、転用されたためであろう。５は、棟端飾瓦。主文様は、不明。手張り成形で、文様は粘土紐ハリツケ。表面はナデ調整、裏面はヘラケズリ調整を行う。６は、丸瓦。全長24.2cm、幅13.9cm、玉縁部長2.8cmを測る。凸面はヘラミガキ、凹面はコビキB（鉄線引き）を行い、棒状タタキ痕・布目痕を残す。第75図―１は、桟瓦。全長26.2cm、葺足長9.5cmを測る。２は、均整唐草文軒平瓦。全長



第74図　SX01出土遺物(4)



第75図　SX01出土遺物(5)



第76図　SX01出土遺物(6)

27.7cm、上弦幅25.6cm、瓦当部高4.8cm、文様区幅15cm、茸足長20.7cmを測る。中心飾りは花冠で、そののびやかなことから18世紀中頃までのものであり、転用品と考えられる。

第76図－1は、道具瓦。全長18.4cm、幅5.5cm、高さ3cmを測る。2～4は、用途不明の木製品。2は、本来円筒形であったと思われる。直径（推）1.9cm、両端は欠失している。3は、全長5.2cm、幅3.1cm、厚さ0.5cmの板状木製品。4は、全長17.3cm、幅3.3cm、厚さ1cmを測る、板状木製品である。

ＳＫ18

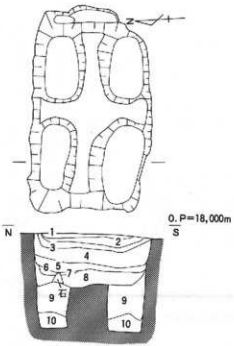
ＳＫ18は、ＳＸ01の西側に隣接する土壙である（第77図）。平面形は長方形を呈し全長3.22m、幅1.81m、深さ1.51mを測る。底部は、四隅を掘り窪めている。また、北東側上部には0.33mの石を張り付けており、他の3箇所のコーナーにもその痕跡が認められる。性格は断定できないが、甕を埋めていた可能性も考えられる。

出土遺物は、少ない。第78図は、産地不明の土管である。口径28.2cmを測る。粘土板巻き付け成形で、途中で同じ円筒を接合している。第79図は、不明木製品。円筒形で直径6.3cm、長さ5.1cmを測る。

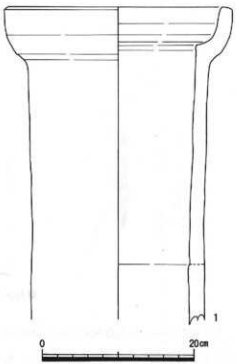
ＳＩ05

ＳＩ05は、調査区中程のやや南東側で検出した埋甕遺構である（第80図）。掘形は2段になっており、上面での直径1.51m、深さ1.05mを測る。埋甕は、口縁部が地山面よりわずかに出ており、本来の遺構面からは下がった状態にあったと推定できる。内部からは、柄杓などが出土しており、液体物を溜める目的の遺構であることは、明らかである。これも単独ではあるが、酒絞りに関連する遺構と考えられる。ただ、前述のＳＫ199などの施設は周囲に見当たらず、「船」に対して重しをかける方法が『日本山海名産図会』とは異なる方法を取っていたと考えざるを得ない。近代に入ると機械式のものが登場しており、この場合はそのような設備を想定したい。

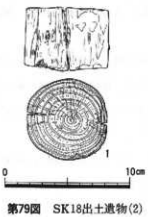
第81図は、埋甕である。唐津焼鉄釉甕で口径65.4cm、器高1.14mを測る。底部外面には、固定するための白色のタタキが付着している。口縁端部は、内側に折り返す。体部外面には、格子タタキ痕が部分的に残る。第82図は、甕の内部から出土した遺物である。1・2は柄である。1は、断面形が長方形を呈し、全長（残）36.2cm、幅2.7cmを測る。2は、全長（残）30.6cm、幅2.8cmである。3は、樽の栓。全長8cm、先端部径1.1



第77図　SK18遺構図



第78図　SK18出土遺物(1)



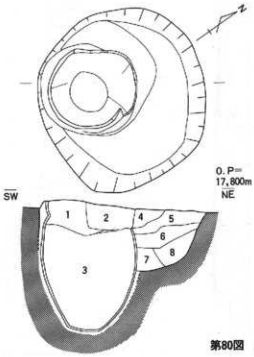
第79図　SK18出土遺物(2)

cm、基部径2.7cmを測る。4は、曲物の柄杓。直径13cm、器高（残）4.9cmを測る。前述の1・2のうち、どちらかがこの柄となると考えられる。

5．Ⅳ期の遺構と遺物

Ⅳ期は、近代に入ってⅢ－B期に建てられた酒造り関係の大規模な施設が廃絶し、再び町屋が建てられる時期である。この動きは、すでに報告した第23次調査区と全く同様のものである。Ⅲ－B期の廃絶時期が明治時代後半から大正時代頃と考えられることから、それ以後の出来事である。以後、再開発が開始されるまで大きな変化はなく、これをⅣ期としてとらえることとする。

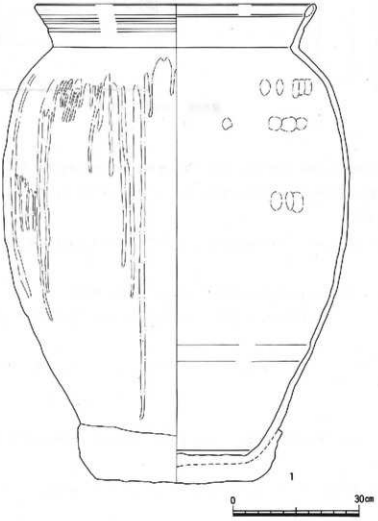
この時期の主な遺構としては、井戸・便所・土壙などがある。ここでは、特に便所遺構について触れつつ、その概要を述べたい。



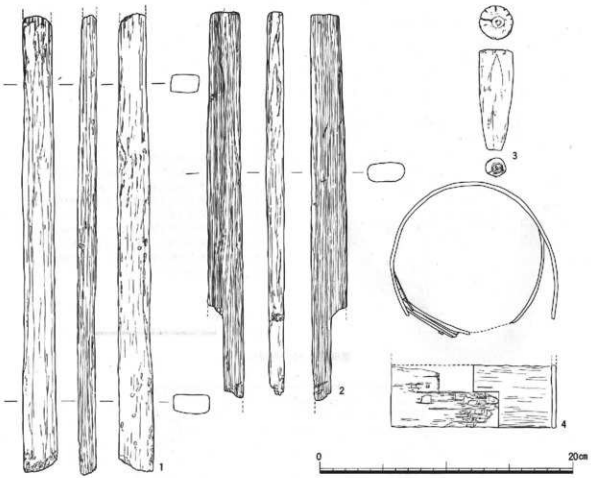
1．黄褐色粘質土層５Ｙ R8/4
2．黒色土層10Ｙ R2/1（２cmの礫若干、木片含む）
3．黒褐色粘質土層10Ｙ R2/3（木片含む）
4．にぶい黄橙色砂質土層10Ｙ R3/6（礫、遺物含む）
5．明黄褐色砂質土層２・５Ｙ6/7
6．にぶい黄橙色砂質土層10Ｙ R4/6（５cmの礫含む）
7．暗灰黄色粘質土層２・５Ｙ2/4（６cmの礫含む）
8．にぶい黄橙色土層10Ｙ R4/6（２～５cmの礫含む）
9．暗灰黄色土層２・５Ｙ2/4

0　1m

第80図　SI05遺構図



第81図　SI05出土遺物(1)



第82図　SI05出土遺物(2)

ＳＩ01・02

ＳＩ01・02は、調査区南東部に位置する、南北に並ぶ徳島県大谷焼の便槽甕である（第83・84図）。ＳＩ01は、掘形の直径0.61ｍ、深さ0.24ｍを測る。内部からはレンガ片が出土している。ＳＩ02は、掘形の直径0.65ｍ、深さ0.24ｍを測る。

甕は、いずれも上部が欠失している（第90図）。大谷焼甕についても、第１分冊で型式分類を行った。すなわち、

１型式―甕型のもの。口径43cm、器高50cm前後で、内外面に鉄釉を掛ける。

２型式―鉢型で大型のもの。口径60.6cm、器高45.4cm前後。外面及び口縁部は無釉。内面は、鉄釉を横方向にハケ塗りする。

３型式―鉢型で口径56.7cm、器高33.5cm前後のもの。施釉方法は、２型式と同様。外面体部上方には、目跡が残る。

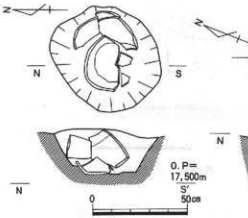
の３型式である。

ＳＩ01・02共に、このうち３型式である。またＳＩ02は、外面底部に墨書がみられる。

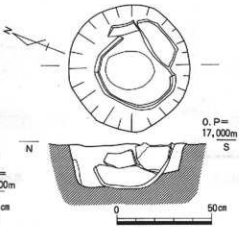
ＳＩ04

ＳＩ04は、調査区南東部のＳＩ01・02の北側に位置する埋甕である（第85図）。これは、単独で存在する。掘形の直径0.56ｍ、深さ0.32ｍを測る。

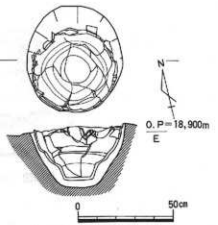
用いられている甕は、丹波焼である（第90図）。内外面に鉄釉を掛ける。



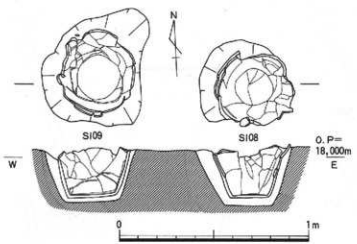
第83図　SI01遺構図



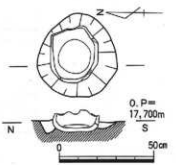
第84図　SI02遺構図



第85図　SI04遺構図



第86図　SI08・09遺構図



第87図　SI10遺構図

ＳＩ08・09

ＳＩ08･09は、調査区南側の中程に位置する（第86図）。やはり、２基一組となっている。ＳＩ08の掘形は直径0.51ｍ、深さ0.29ｍを測る。ＳＩ09の掘形は平面形が不整円形となっており、長径0.7ｍ、深さ0.28ｍを測る。内部からは、平瓦片やコンクリート片とともに明治時代の染付磁器の小便器片が出土している。

両者とも大谷焼の３型式の鉢を用いており、ＳＩ08の内部には白色付着物がみられる。

ＳＩ10

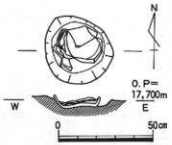
ＳＩ10は、調査区東側の中程に位置する（第87図）。掘形の直径0.44ｍ、深さ0.07ｍを測る。

便槽は、大谷焼の３型式の鉢であるが、焼き歪む（第90図）。外面底部には、細かいハナレ砂がみられる。

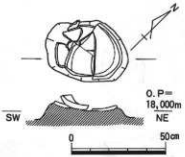
ＳＩ11

ＳＩ11は、ＳＩ10の北側に位置する（第88図）。ＳＩ10と同様に、単独である。掘形の直径0.39cm、深さ0.07cmを測る。

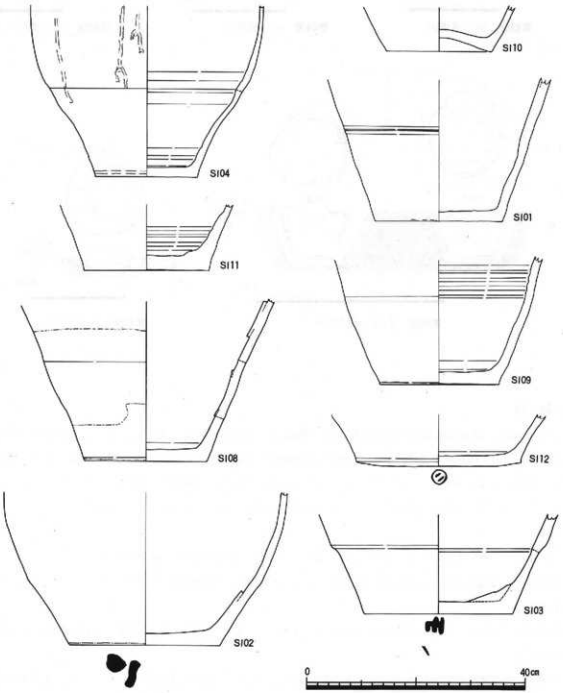
便槽は、大谷焼３型式の鉢を用いている（第90図）。内面には、白色付着物がみられる。内面底部及び外面底部には粗いハナレ砂が５箇所みられ、陶片の付着痕もみられる。これは、目として用いたものであろう。



第88図　SI11遺構図



第89図　SI12遺構図



第90図　SI01・02・03・04・08・09・10・11・12出土遺物

ＳＩ12

ＳＩ12は、調査区中央部のＳＥ09の上に位置する（第89図）。掘形は楕円形を呈し長径0.45ｍ、深さ0.06ｍを測る。便槽は、大谷焼３型式のもの。底部外面には、丸にニの字の墨書がみられる。

これらは、Ⅳ期に至って建てられた町屋の便所であり、その位置は既存建物とほぼ一致している。

注

（1） この指文の際には、形態的変化によって１～５型式に分類し、成形技法の大きな変化によって、Ⅰ・Ⅱと大別したが、その際、型式分類の１～５はそのまま使用した。その後、分類の呼称としては、Ⅱ段階のものは新たにⅡ－１・２としたほうが分かり易いと考え、この機会に修正しておきたい。伊丹郷町では、その後の新資料が発見され、『文化財調査室だより№７』に紹介すべく執筆している。近刊の予定であり、発刊の節には参照していただきたい。

第３節　第33次調査

１．はじめに

第33次調査区は、南北道路を挟んで第27次調査区の西側に位置し、この区域の調査の必要性をみるために設けられた試掘トレンチである。調査にあたっては、「L」字形に幅５ｍのトレンチを設定することとした。調査面積は、200㎡である。全体の様相は、隣接する調査区の成果と一致し、この区域も調査が必要と判断され、その旨の報告を行った。

ただ、Ⅰ期伊丹城期の遺構は、調査面積の関係からか、調査区内では検出されなかった。

２．基本層序

調査区は北側が高く、南側が低くなっており、地山上面も同様に北側でＯ．Ｐ＝18.120ｍ前後、南側でＯ．Ｐ＝17.500ｍ前後を測る（第１図）。堆積状況も、他の調査区と変わらず、地山から上は２～３層の近世の盛り土が観察される。地山直上層は、黄褐色砂質土層10ＹＲ５/８（東壁第９層）などで、耕作土と考えられる。これより上は土間面を示すにぶい黄褐色土層10ＹＲ６/３（東壁第15層）など薄い粘質土の層がみられる。北東部は、民家解体時の攪乱がひどく、土層にみだれがみられる。

３．Ⅱ期の遺構と遺物

この調査区では調査面積が少なく、Ⅰ期伊丹城期の遺構は検出されなかった。したがって、Ⅱ期有岡城期の遺構から述べることとする。

ＳＫ62

Ⅱ期の遺構としては、南西端で検出したＳＫ62やＳＥ02がある。ＳＫ62は、平面形は方形を呈し、西側は調査区外に延びる（第２図）。全長4.16ｍ、幅1.75ｍ、深さ0.37ｍの浅い土壙である。

遺物には、土師質土器皿が数片出土したが図示するに至らなかった。

ＳＥ02

ＳＥ02は、調査区中程に位置し、Ⅲ期の遺構ＳＫ23の切られている（第３図）。直径0.8ｍ、深さは4.24ｍまで確認したが底に達さなかった。

出土遺物には、土師質土器皿の小片が少量みられる。やはり、図示するに至らなかった。

４．Ⅲ期の遺構と遺物

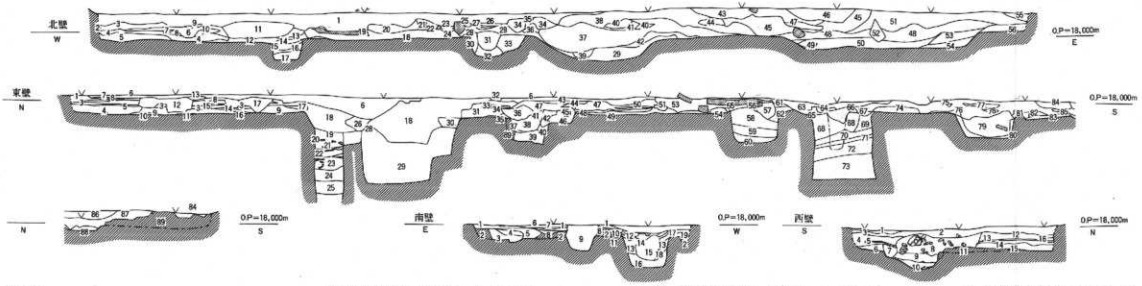
周辺と同様に、この時期は18世紀後半から19世紀前半のⅢ－Ａ期とそれ以後明治時代後半から大正時代までのⅢ－Ｂ期に区分できる。

Ⅲ－Ａ期

ＳＫ21

ＳＫ21は、ＳＥ02の東側に位置し、東側は調査区外に延びる（第４図）。平面形は楕円形を呈し長径1.35ｍ、深さ0.59ｍを測る。

出土遺物のうち、第５図－１・３・４は、肥前磁器。１は、白磁紅皿。３は、碗。口径9.6cm、器高５cmを測る。４は、青磁染付碗。２は、京焼系陶器色絵碗。口縁部外面に緑色、その下に赤色の顔料で文様を描く。



北壁土層

1．オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/6 (0.5～３cmの礫多量に含む) 表土
2．灰白色砂質土層５Y8/2 (遺物、２～３cmの礫若干含む)
3．明黄褐色砂礫層10Y R7/6 (１～３cmの礫多量に含む) 整地層
4．オリーブ褐色砂礫層２・５Y4/3 (遺物、１～３cmの礫含む) 整地層
5．灰オリーブ褐色砂質土層５Y4/2 (炭化物、２cmの礫含む) 包含層
6．暗灰褐色砂質土層２・５Y4/2 (遺物含む)
7．黄褐色砂質土層２・５Y5/6 (１～３cmの礫若干含む)
8．褐色砂質土層10Y R4/4 (２cmの礫多量に含む)
9．灰色粘質土層５Y4/1
10．オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/6 (３～５cmの礫含む)
11．撹乱
12．オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/3 (遺物、10cm大の礫含む)
13．明黄褐色粘質土層２・５Y6/8 (２cm大の礫含む)
14．褐色粘質土層10Y R4/4 (１～３cmの礫含む)
15．暗灰色粘質土層10Y R4/1 (２～５cmの礫含む)
16．オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/3 (３cm大の礫含む)
17．灰色粘質土層５Y5/1 (遺物多量に含む)
18．暗オリーブ褐色粘質土層２・５Y3/3 (遺物、１～３cmの礫含む)
19．オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/3
20．暗褐色粘質土層10Y R3/4 (遺物、２cmの礫含む)
21．黒褐色粘質土層10Y R3/2 (遺物、１～２cmの礫含む)
22．黒褐色土層10Y R3/1 (10cm大の礫含む)
23．黒色土層10Y R2/1 (２cmの礫含む)
24．明黄褐色砂質土層２・５Y7/6 (１～３cmの礫多量に含む)
25．灰黄褐色砂質土層10Y R4/2 (１cmの礫若干含む)
26．明黄褐色砂質土層10Y R6/6 (１cmの礫若干含む)
27．黒褐色砂質土層10YR3/1 (１cm大の礫含む　)
28．黄褐色砂質土層10YR5/8 (１cmの礫多量に含む)
29．暗褐色粘質土層２・５Y3/1 (１～５cmの礫含む)
30．明黄褐色砂質土層10Y R3/3 (炭化物、遺物、0.5～５cmの礫含む)
31．オリーブ褐色砂質土層２・５4/6 (遺物、２～３cmの礫含む)
32．明黄褐色砂質土層10Y R4/2 (１cmの礫若干含む)
33．暗褐色粘質土層10Y R3/4 (４cmの礫含む)
34．灰白色砂質土層10Y7/2 (ビニール、レンガ、２cmの礫含む)
35．オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/3 (遺物、レンガ、0.5～５cmの礫含む)
36．橙色砂質土層７・５Y R6/8 (２cmの礫含む)
37．浅黄色土層２・５Y7/4 (３～10cmの礫多量に含む)
38．明黄褐色粘質土層10Y R6/8 (４～８cmの礫含む)
39．にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3 (レンガ、２cmの礫含む)
40．橙色粘質土層７・５Y R6/8 (２cmの礫含む)
41．緑黒色土層５G2/1 (炭化物多量に含む)
42．明黄褐色砂質土層２・５Y7/6 (0.5cmの礫若干含む)
43．黄橙色砂質土層10Y R7/8 (１cm以下の礫含む)
44．オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/3 (２cm以下の礫含む)
45．黄褐色粘質土層２・５Y5/3 (0.1cmの礫若干含む)
46．暗オリーブ褐色砂質土層２・５Y3/3 (３cm以下の礫含む)
47．黄褐色粘質土層２・５Y5/4
48．オリーブ褐色粘質土層２・５Y4/6 (炭化物、焼土、３cmの礫含む)
49．オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/4 (２cmの礫含む)
50．にぶい黄褐色礫層10Y R4/3
51．黄褐色砂質土層10Y R5/6 (１cmの礫多量に含む)
52．明黄褐色砂質土層10Y R6/8 (１～６cmの礫含む)
53．明黄褐色砂質土層10Y R6/6 (５cmの礫含む)
54．暗オリーブ褐色粘質土層２・５Y3/2 (遺物、１～３cmの礫含む)
55．明黄褐色砂質土層10Y R6/6 (５cmの礫含む)
56．にぶい黄橙色粘質土層10Y R6/3 (３～７cmの礫含む)
57．褐色土層10Y R4/4 (遺物、３cmの礫含む)
58．オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/6 (１～３cmの礫、根多数に含む)
59．にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3 (1.5cmの礫含む)
60．にぶい黄色砂質土層２・５Y6/4
61．漆喰
62．黄褐色砂質土層２・５Y5/6 (２cmの礫含む)
63．撹乱
64．暗灰黄色砂質土層２・５Y4/2 (レンガ含む)
65．褐色砂質土層10Y R4/6 (１cmの礫含む)
66．オリーブ黄色砂質土層５Y6/4 (１cmの礫含む)
67．オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/6 (遺物、１～20cmの礫含む)
68．黄褐色砂質土層２・５Y5/6 (炭化物含む)
69．暗褐色砂質土層２・５Y4/2 (遺物、３cm大の礫多量に含む)
70．黒褐色粘質土層２・５Y3/3 (２cmの礫若干含む)
71．暗オリーブ褐色砂質土層２・５Y3/3 (遺物、１～３cmの礫含む)
72．明黄褐色砂質土層２・５Y6/6 (炭化物、遺物、５cmの礫含む)
73．明黄褐色砂質土層２・５Y6/6 (遺物、５cmの礫含む)
74．明黄褐色砂質土層２・５Y6/6 (１～４cmの礫含む)
75．灰白色砂質土層５Y8/2
76．明黄褐色砂質土層10Y R5/6 (炭化物含む)
77．明黄褐色砂質土層10Y R6/6 (３～10cmの礫含む)
78．明黄褐色粘質土層２・５Y5/3 (３～10cmの礫含む)
79．明黄褐色砂質土層２・５Y6/6 (１～３cmの礫含む)
80．明黄褐色砂質土層10Y R6/8 (遺物、５cm大の礫含む)
81．明褐色砂質土層７・５Y R5/6 (遺物、５cm大の礫含む)
82．暗褐色砂質土層10Y R3/4 (遺物、１～５cmの礫含む)
83．明褐色砂質土層10Y R3/2 (遺物、５cm大の礫含む)
84．明褐色砂質土層７・５Y R5/6 (遺物、５cm大の礫含む)
85．暗褐色砂質土層10Y R3/4 (遺物、１～５cmの礫含む)
86．明褐色砂質土層10Y R3/2 (１～10cmの礫多量、炭化物含む)
87．明黄褐色砂礫層２・５Y6/6 (遺物、１～10cmの礫含む)
88．オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/6 (１cmの礫若干含む)
89．明黄褐色粘質土層10Y R6/8 (地山)

東壁土層

1．オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/6 (３cmの礫多量に含む) 表土
2．にぶい黄橙色砂質土層10Y R6/4
3．黒褐色砂質土層10Y R3/2 (１～10cmの礫多量、炭化物含む)
4．にぶい黄橙色砂質土層10Y R5/4 (１cmの礫若干含む)
5．にぶい黄橙色砂質土層10Y R6/3 (１cmの礫若干含む)
6．オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/6 (0.5～３cmの礫多量に含む) 表土
7．黒褐色砂質土層２・５Y3/1 (炭化物多量に含む)
8．にぶい黄橙色砂質土層10Y R5/4 (１cmの礫多量に含む)
9．黄褐色砂質土層10Y R5/8 (0.5～２cmの含む)
10．明褐色砂質土層７・５Y R5/6 (３cmの礫若干含む)
11．明褐色土層７・５Y R5/8
12．撹乱
13．浅黄色砂質土層２・５Y7/3 (３cmの礫含む)
14．黄褐色砂質土層２・５Y5/6
15．にぶい黄褐色土層10Y R6/3
16．黄褐色砂質土層２・５Y5/6 (炭化物、１cmの礫含む)
17．撹乱
18．青灰色砂質土層５P B6/1 (炭化物、遺物含む)
19．褐色砂質土層10Y R4/6 (炭化物、遺物、レンガ、10cm大の礫含む)
20．明黄褐色粘質土層10Y R6/8 (0.5cmの礫若干含む)
21．オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/6 (遺物、１cmの礫含む)
22．暗オリーブ褐色土層２・５Y3/3 (遺物、0.5cmの礫含む)
23．オリーブ黒色炭化物層５Y3/2 (５cmの礫若干含む)
24．にぶい黄色粘質土層２・５Y6/4 (炭化物、焼土、遺物、３cmの礫含む)
25．にぶい赤褐色粘土層２・５Y R5/4 (遺物、７cmの礫若干含む)
26．黄褐色粘土層10Y R5/8 (遺物、３cmの礫若干含む)
27．オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/3 (３cmの礫若干含む)
28．黄褐色粘土層10Y R5/6 (炭化物多量に含む)
29．明黄褐色砂質土層10Y R6/6 (0.5～１cmの礫若干含む)

南壁土層

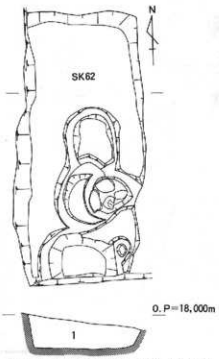
1．明黄褐色粘質土層２・５Y6/8 (２cmの礫含む) 整地層
2．明黄褐色粘質土層10Y R6/8 (地山)
3．オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/6 (３～10cmの礫含む)
4．橙色砂質土層７・５Y R6/8 (３cmの礫若干含む)
5．黄褐色砂質土層２・５Y5/6 (１～３cmの礫含む)
6．にぶい黄色砂質土層２・５Y6/4 (遺物、レンガ、１～５cmの礫含む)
7．明黄褐色砂質土層２・５Y6/6 (0.5cmの礫若干含む) 整地層
8．黄褐色砂質土層10Y R5/6 (0.5～１cmの礫若干含む)
9．オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/4 (炭化物、遺物、レンガ、１～４cmの礫含む)
10．明黄褐色砂質土層７・５YR5/6 (１～３cmの礫含む)
11．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4 (２cmの礫含む)
12．暗オリーブ色砂質土層５Y4/4 (レンガ、１cmの礫若干含む)

西壁土層

1．淡黄色砂質土層５Y8/3 (0.5～１cmの礫若干含む)
2．オリーブ褐色砂質土層２・５Y4/6 (３cmの礫多量に含む) 表土
3．明黄褐色砂礫層10Y R7/6 (１～３cmの礫多量に含む) 整地層
4．灰オリーブ色土層５Y4/2 (遺物、１～３cmの礫含む)
5．オリーブ黄色粘質土層５Y6/3 (炭化物、１cm以下の礫多量に含む)
6．明褐色粘質土層７・５Y R5/8 (１～２cmの礫若干含む)
7．青黒色粘質土層５B1.7/1 (炭化物、５cmの礫多量に含む)
8．撹乱
9．暗灰黄色土層２・５Y4/2 (遺物、２cmの礫若干含む)
10．暗青灰色土層５P B3/1 (遺物、３cmの礫若干含む)
11．橙色土層７・５Y R6/8 (地山)
12．灰白色砂質土層５Y8/2 (遺物、２～３cmの礫若干含む)
13．青黒色炭化物層５B1.7/1
14．オリーブ褐色砂礫層２・５Y4/3 (遺物、１～３cmの礫含む)
15．灰オリーブ褐色砂質土層５Y4/2 (２cmの礫若干含む) 包含層
16．灰白色砂質土層５Y8/2 (遺物、２～３cmの礫若干含む)

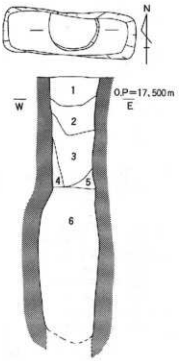
0　6m

第１図　第33次調査北壁・東壁・南壁・西壁土層図



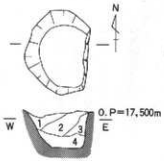
1．にぶい黄褐色粘質土層10ＹＲ4/3

第２図　SK62遺構図



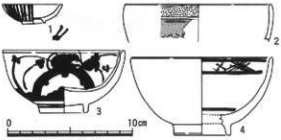
1．褐色砂質土層10ＹＲ4/6
（２cmの礫若干、炭化物含む）
2．明黄褐色砂質土層10ＹＲ6/8
（１cmの礫、炭化物含む）
3．明褐色砂質土層７・５ＹＲ5/8
（１cmの礫、炭化物多量に含む）
4．明褐色砂礫層７・５ＹＲ5/8
（炭化物含む）
5．オリーブ褐色粘質土層２・５Ｙ4/6
（３cmの礫、炭化物、遺物含む）
6．暗褐色粘質土層７・５ＹＲ3/3
（0.6cm大の礫含む）

第３図　SE02遺構図

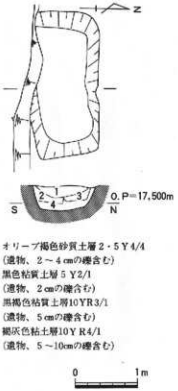


1．オリーブ褐色砂質土層
２・５Ｙ4/3（遺物含む）
2．明黄褐色粘質土層10ＹＲ6/8
（５cm以下の礫多量に含む）
3．黄褐色砂質土層２・５Ｙ5/6
4．オリーブ褐色粘質土層
２・５Ｙ4/4

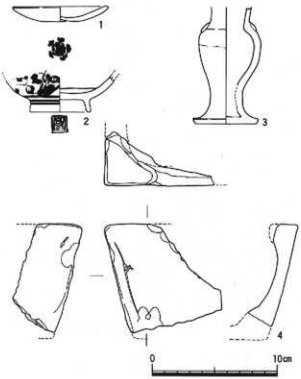
第４図　SK21遺構図



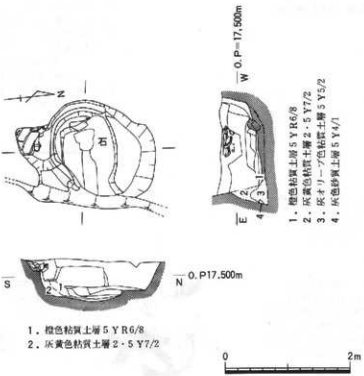
第５図　SK21出土遺物



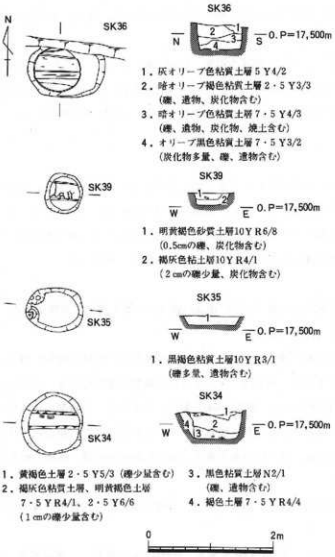
第6図　SK47遺構図



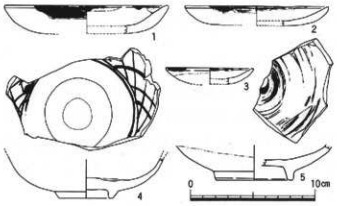
第7図　SK47出土遺物



第8図　SX01遺構図



第9図　SK36・SK39・SK35・SK34遺構図



第10図　SK36出土遺物

ＳＫ47

ＳＫ47は、調査区北西部に位置する（第６図）。平面形は長方形を呈し、全長2.33ｍ、幅1.1ｍ、深さ0.39ｍを測る。

出土遺物のうち、第７図―１は、土師質土器皿。口径（推）7.5cm、器高1.2cmを測る。外面は指圧調整、内面はナデ調整を施す。２は肥前磁器碗。外面には、草花文を描く。３は、瀬戸・美濃焼御神酒徳利。上部は灰釉、下部は鉄釉の掛け分けとなっている。底部外面には、糸切り痕がみられる。４は、土師質土器長火鉢。板作り成形である。

ＳＸ01

ＳＸ01は、調査区東側の中程に位置する半地下式の竈である（第８図）。掘形の最大径2.28ｍ、深さ0.65ｍを測る。燃焼室は１基で、直径1.02ｍである。底部には検出長0.72ｍ、幅0.21ｍ、深さ0.05ｍの灰落としが設けられる。焚き口は道路側に向いており、建物の入り口に位置する、商業用の竈と考えられる。

出土遺物には、肥前磁器の破片がみられるが、図示するに至らなかった。

ＳＫ36・39・35・34

この４箇所の遺構は、調査区北西側の中程に南北に並ぶ、木桶を埋めた遺構である（第９図）。東西に長い敷地の中程に位置し、便所と考えられる。

ＳＫ36は、掘形の長径1.23ｍ、深さ0.37ｍを測る。直径0.73ｍの木桶の底板が遺存していた。

唯一図示できる遺物に恵まれた。第10図―１・２は、土師質土器皿である。大型で、器壁は厚い。１は口径13cm、器高2.3cm、２は口径11.4cm、器高1.6cmを測る。いずれも、口縁部に灯芯痕を残す。３は、柿釉灯明皿。４は、肥前磁器皿。見込みには、蛇ノ目釉ハギがみられる。５は、刷毛目唐津皿。高台は、低い。

ＳＫ39は、掘形の直径0.58ｍ、深さ0.19ｍを測る。直径0.48ｍの木桶の底板の痕跡が残る。遺物は、肥前磁器の破片が少量みられる。

ＳＫ35は、掘形の直径0.91ｍ、深さ1.14ｍを測る。遺物には、肥前磁器や伊賀・信楽焼鉄釉鍋などの破片がみられる。

ＳＫ34は、掘形の直径0.96ｍ、深さ0.43ｍを測る。直径0.8ｍの底板の一部が残る。遺物には、肥前磁器碗や刷毛目唐津碗などがみられる。

Ⅲ―Ｂ期

Ⅲ―Ｂ期の遺構としては、埋甕遺構や水琴窟、土壙などがある。ここでは、主な遺構として、埋甕遺構や水琴窟を取り上げて説明を加える。

ＳＩ04

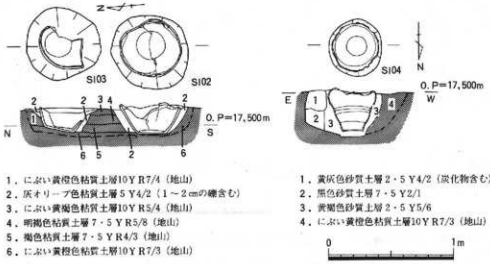
ＳＩ04は、北側の中程からやや西に位置する埋甕である（第11図）。単独で存在し、掘形の直径0.42ｍ、深さ0.39ｍを測る。土層のうち第１・２層は、ＳＫ43の埋土であり、これを切っている。

甕は、丹波焼である（第13図）。口径27.1cm、器高38.6cmを測る。内面は灰釉、外面は鉄釉を掛ける。底部外面は、露胎。内面には白色付着物はみられないが、位置からみて便槽と考えて良いであろう。

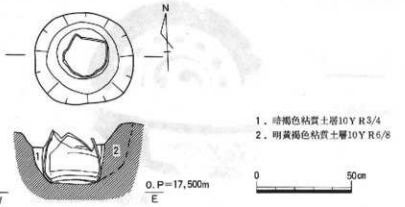
ＳＩ01

ＳＩ01は、調査区東側の南部に位置する水琴窟である（第12図）。掘形の直径0.51ｍ、深さ0.32ｍを測る。丹波焼甕を倒立させて埋める。

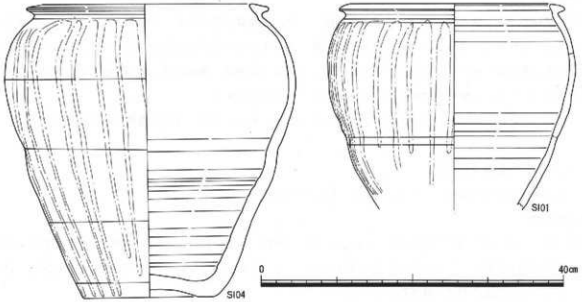
丹波焼甕（第13図）は底部が欠失しているが、ＳＩ04と同じ手法のもので、やや小型品である。口径26.1



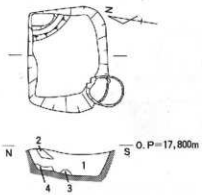
第11図　SI02・03・04遺構図



第12図　SI01遺構図



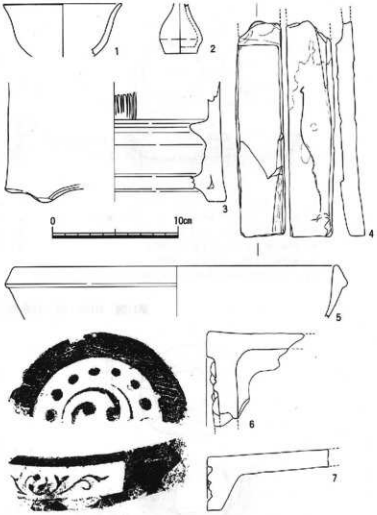
第13図　SI04・SI01出土遺物



1．黒褐色粘質土層2・5Y3/2
（炭化物、遺物、2～9cmの礫含む）
2．暗オリーブ色砂質土層5Y4/4
（炭化物、2cmの礫含む）
3．オリーブ黒色粘土層5Y3/2
（炭化物、遺物多量に含む）
4．暗オリーブ色粘土層7・5Y4/3
（遺物含む）

0　1m

第14図　SK53遺構図



第15図　SK53出土遺物

cmを測る。

ＳＫ53

ＳＫ53は、調査区北側の西端に位置する（第14図）。平面形は長方形を呈し、全長1.68ｍ、幅1.27ｍ、深さ0.38ｍを測る。

出土遺物のうち、第15図－１は、京焼系白磁碗。２は、土師質土器ミニチュア徳利。ロクロ成形で、底部には糸切り痕が残る。３は、土師質土器昆炉。内部には、すのこを乗せる突起が巡る。４は、粘板岩製砥石。側面両面に使用痕が残る。仕上げ用である。５は、土師質土器炮烙。外面には、煤が付着する。６は、三ツ巴文軒丸瓦。７は、均整唐草文軒平瓦。中心飾りは、三ツ巴文である。

これらの遺物には、Ⅲ－Ａ期までさかのぼるものもあり、あるいはⅢ－Ａ期の遺構の可能性もある。

５．Ⅳ期の遺構と遺物

近代に属するⅣ期の遺構としては、ＳＩ02・03などがある。

ＳＩ02・03

ＳＩ02・03は、２基一組の便槽遺構である（第11図）。東側の南部に位置する。ＳＩ02は、掘形の直径0.62ｍ、深さ0.25ｍを測る。大谷焼の３型式の甕を用いている。ＳＩ03は、掘形の直径0.59ｍ、深さ0.19ｍを測る。同じく、大谷焼３型式の鉢を用いている。

このほか、ＳＫ17からは、土師質土器ミニチュア壺など珍しい遺物も出土している。

第４節　第35次調査

第35次調査区は、細い道路を挟んで第27次調査区の北側に位置する。調査面積は、525㎡である。ここも、当初北側に幅５ｍの試掘トレンチを入れ、第27次調査区から続くＳＦ01などを確認した。その結果、調査が必要であるとされて南側に拡張する形で調査を開始した。

ここは地山までが浅く、伊丹郷町期の遺構の残りが良く、非常に複雑な切り合い関係を示していた。そのため調査は難行し、全体遺構図も縮小率を落として掲載することとした。

在城期の遺構は、Ⅱ期有岡城期のものだけであった。

なお、江戸時代の『寛政八年（1796）伊丹細見図』(八木哲浩1982年）では、町名が第27次調査区と同様の「カジヤ丁」となっている。

１．基本層序

基本層序は、周辺の調査区と大差ない（第１図)。地山上面の高さは南東側でＯ．Ｐ＝18.000ｍ前後、北側でＯ．Ｐ＝17.700ｍ前後を測り、北側に下がっていく。在城期の遺構は、地山面から切り込まれている。地山上には、２～３層の近世の盛土が堆積し、直上層は褐色砂質土層10ＹＲ４/４（北壁第６層）など、耕作土と考えられる土層が堆積する。近世伊丹郷町期の遺構は、主にこの上面から切り込まれている。

２．Ⅱ期の遺構と遺物

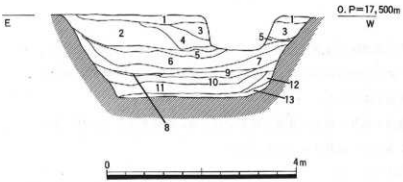
Ⅱ期有岡城期の遺構としては、第27次調査区から続く堀ＳＦ01や井戸ＳＥ04、溝ＳＤ04・11がある。

ＳＦ01

ＳＦ01は検出長14ｍ、幅5.6ｍ、深さ1.71ｍを測る箱堀である（第２図)。後述するＳＤ04との交点で約1.2ｍ西にずれる。北側はさらに調査区外に延びる。埋土は水平堆積を示し、最下層に0.1ｍの泥土層第13層にぶい褐色泥土層7.5ＹＲ６/３がみられる。遺物は下層、最下層から出土したものが多い。

遺物は第23次調査ＳＦ01ほど多くないが、各種のものが揃っている。また、第27次調査区ＳＦ01でみられた江戸時代初頭の遺物が含まれる。

第３図―１～３は、白磁端反り皿。１は、口径（推）10.5㎝、器高３㎝。第１分冊第23次調査の報告での分類の白磁端反り皿Ａ類（口径12㎝前後、器高３㎝前後）に比べると口径が小さいが、歪みがみられ、これに属するかと思われる。３は、口径15.7㎝、器高3.1㎝で、器高が低いが同Ｃ類(口径15.5㎝、器高４㎝前後)に属する。４・11・12・13は、青花。４は、皿。高台内に銘款がみられる。11も、皿。これは厚手である。12は、碗。外面には梵字文が描かれており、小野正敏分類（小野1982年）のＣⅡ群碗である。13は、同分類ＣⅢ群の蓋笥底の皿。見込みには吉祥文字を描く。５は、土錘。全長3.8㎝、最大径２㎝、紐穴径0.6㎝である。第23次調査ＳＦ02の分類のＣ類（全長４㎝、直径1.6㎝前後）に属する。６は、瓦質土器燭台。外面には菱形のスタンプ文が巡らされる。７は、瓦質土器ミニチュア擂鉢。擂目は１本である。８は、備前焼鉢。９・15・16・17は、備前焼擂鉢。いずれも、Ⅴ期のものである。10は、備前焼甕。やや古く、ⅣＢ期に属する。14は、青磁碗。見込みにはスタンプによる花文が施される。高台内は露胎。18は、中世須恵器鉢。東播系の14世紀代のものである。19は、瀬戸・美濃焼鉄釉天目台。高台は露胎。20・23は、唐津焼。20は、碗。外面は露胎。23は、皿。同じく、外面は露胎。見込みには胎土目が１箇所残る。21は、土師質土器鍋。口径（推）22.5㎝。外面には、煤が付着する。22は、青磁酒会壺。口径9.8㎝。これも13～14世紀代のものであり、伝世品であ



第2図　SF01土層図

ろう。24は、瓦質土器釜。鍔部径31.9cm。外面体部は、ナデ調整。内面はナデ調整。これは、15世紀代のものである。25は、石製硯。粘板岩製で全長（残）10.6cm、幅7.8cm、高さ（残）1.7cm。大型の立派な品である。

SE04

SE04は、調査区中央部に位置する（第4図）。直径1.46m、深さは6.3mまで確認したが、底に達さなかった。埋土第5・6層には、多量の焼土や炭化物が含まれ、第23次調査SF01と同様に落城時に形成された焼土層と考えられる。

遺物は豊富である。第5図－1は、白磁坏。2・3は、白磁端反り皿。4は、朝鮮王朝陶磁器三島手碗。口径（推）15.5cm。5・6は、青花皿。5は、高台内に白色不透明の物質で十字状の印が描かれる。6は、大皿。呉須の発色は良い。7は、青花小壺。釉は、不透明である。外面に草花文を描く。内面は露胎。8は、瀬戸・美濃焼鉄釉水注。外面下部から底部にかけて、化粧掛けを施す。9は、東播系中世須恵器甕。暗赤褐色5YR3/3を呈する。10は、中国製黒褐釉四耳壺。内外面に黒褐色釉を掛ける。胎土は粗い。11は、丹波焼壺。12は、産地不明の鉄釉壺。内面は無釉で、胎土には黒色粒が多く含まれる。口径（推）11.8cm。13は、丹波焼擂鉢。擂目は、内面底部まで続く。14～24は、備前焼。14は、鉢。口径（推）16.7cm、器高5cmである。15は、壺。口径（推）8cm。16は、擂鉢。17は、壺底部。18は、無頸壺である。口径（推）8.3cm。19は、徳利。口径（推）6.2cm。20は、大型の壺である。口径（推）24.6cm。21以下は、甕。21は、口縁部外面に沈線を施す。24は、口径（推）38.6cm。

第6図－1は、瓦質土器茶釜。2は、同じく瓦質土器の火舎。3は、備前焼水屋甕。肩部には、不逆環をハリツケる。

第7図－1～4は、備前焼大甕。口径は（推）60cm前後である。5は、同底部。

第8図も、備前焼大甕である。口径（推）46.4cm。

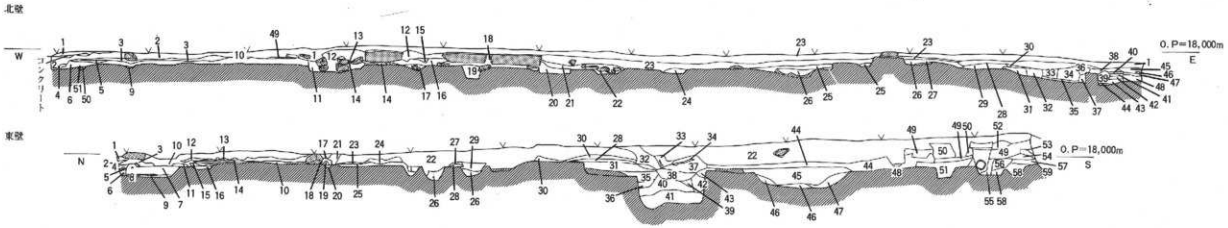
第9図は、丸瓦。いずれも凹面には、コビキA（糸引き）痕が残る。1は幅14.3cm、玉縁部長4cm。2は幅16.3cm、玉縁部長5.1cm。凹面に仕切りが設けられている。3は、幅12.6cmである。

第10図は、花崗岩製一石五輪塔の風・空輪である。

SD04

SD04は、調査区南側を東西に延び、SF01に接合する溝である（第11図）。検出長23.04m、幅2.16m、深さ0.48mを測る。断面形は、浅い「U」字形を呈する。東側は、さらに調査区外に延びる。底部の高低差はほとんどなく、どちらに流れていたかは不明である。

出土遺物のうち、第12図－1・2・5は、青磁。1は、線描蓮弁文碗。口径（推）13.6cm、器高6.9cmを測



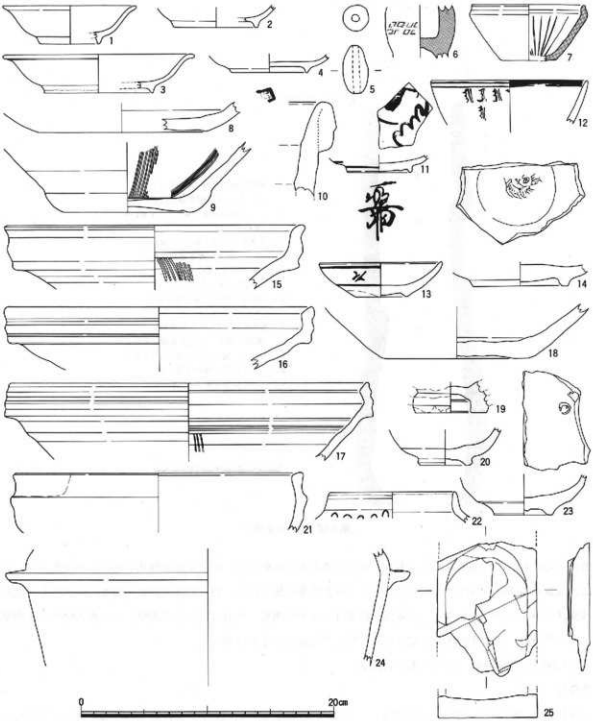
北壁土層

1．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/3（遺物、1～5cm大の礫多く含む）
2．黄褐色砂質土層10Y R5/6（遺物、2cm大の礫多く含む）
3．黄色整地土層2・5 Y7/8
4．明黄褐色砂質土層2・5 Y7/6（細砂含む）
5．黄褐色砂質土層2・5 Y5/4（1～2cm大の礫含む）
6．褐色砂質土層10Y R4/4（1～5cm大の礫含む）
7．黄灰色粘質土層2・5 Y4/1
8．黄褐色粘質土層10Y R5/8
9．明黄褐色粘質土層10Y R6/8（2cm大の礫含む）
10．オリーブ褐色粘質土層10Y R4/6（1cm以下の礫若干含む）
11．黒褐色砂質土層10Y R3/1（遺物、2cm大の礫含む）
12．撹乱
13．灰黄褐色砂質土層10Y R6/2（2cm大の礫若干含む）
14．黄色砂質土層2・5 Y7/8（2cm大の礫若干含む）
15．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4（2cm大の礫含む）
16．黄褐色砂礫層2・5 Y5/6（1～5cm大の礫多量に含む）
17．黄灰粘質土層2・5 Y5/1（2cm大の礫含む）
18．オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6（2cm大の礫多量に含む）
19．褐色粘質土層10Y R4/4（1～3cm大の礫含む）
20．にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3（1～7cm大の礫含む）
21．褐色砂質土層10Y R4/6（1cm大の礫若干含む）
22．にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4（遺物、2cm以下の礫若干含む）
23．褐色砂質土層10Y R4/4（遺物、1～3cm大の礫含む）
24．黄褐色粘質土層2・5 Y5/3（遺物、2cm大の礫若干含む）
25．にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3（遺物、1～3cm大の礫含む）
26．明黄褐色粘質土層2・5 Y6/6（遺物、1～3cm大の礫若干含む）
27．オリーブ色粘質土層5 Y6/8（遺物、1cm以下の礫若干含む）
28．にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3（1～5cm大の礫多量に含む）
29．暗褐色粘質土層10Y R3/4（2cm大の礫若干含む）
30．オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/3
31．褐色粘質土層10Y R4/4（1～2cm以下の礫若干含む）
32．明黄褐色粘質土層10Y R6/8（1cm以下の礫若干含む）
33．黄褐色粘質土層2・5 Y5/3（1～5cm大の礫多量に含む）
34．明黄褐色粘質土層10Y R6/8（1～3cm大の礫若干含む）
35．赤褐色粘質土層5 Y R4/8（炭化物、焼土含む）
36．にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4（1～3cm大の礫若干含む）
37．褐色粘質土層10Y R4/4（1～3cm大の礫若干含む）
38．明黄褐色粘質土層10Y R6/8（1～2cm以下の礫若干含む）
39．黄褐色粘質土層10Y R5/8（1～3cm以下の礫若干含む）
40．灰黄褐色砂質土層10Y R5/2（1cm以下の礫含む）
41．赤褐色粘質土層5 Y R4/8（1cm以下の礫含む）
42．灰黄褐色砂質土層10Y R6/2（1cm以下の礫若干含む）
43．黄褐色粘質土層10Y R5/6（遺物、1cm以下の礫若干含む）
44．赤褐色粘質土層5 Y R4/8（1cm以下の礫若干、炭化物、焼土含む）
45．明黄褐色粘質土層2・5 Y7/6（遺物、1～5cm大の礫含む）
46．褐色砂質土層10Y R4/4
47．赤褐色砂質土層5 Y R4/6
48．黄褐色砂質土層10Y R5/6
49．黒色炭化物層10Y R2/1
50．にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4（5cm大の礫少量含む）
51．灰白色砂質土層2・5 Y8/2

東壁土層

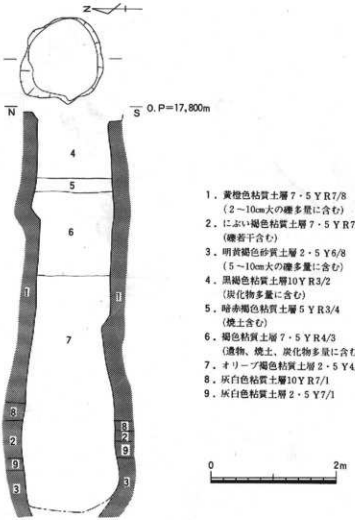
1．黄褐色粘質土層10Y R5/8
2．黄灰色粘質土層2・5 Y4/1
3．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/3（遺物、1～5cm大の礫多量に含む）
4．明黄褐色粘質土層2・5 Y7/6（遺物、1～5cm大の礫含む）
5．褐色砂質土層10Y R4/4（5cm大の礫含む）
6．赤褐色砂質土層5 Y R4/6
7．黄褐色砂質土層10Y R5/6（0.5cm以下の礫多量に含む）
8．明赤褐色砂質土層5 Y R5/6
9．明赤褐色粘質土層5 Y R5/8
10．黒色炭化物層7・5 Y2/1
11．黄橙色砂質土層10Y R7/8（0.5～10cmの礫含む）
12．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/3（炭化物、0.5～8cm大の礫含む）
13．明黄褐色砂質土層7・5 Y R5/6
14．淡黄橙色砂質土層10Y R8/4
15．黒褐色砂質土層7・5 Y R3/2
16．黄褐色砂質土層10Y R5/8
17．暗オリーブ色砂質土層5 Y4/4（0.5cm大の礫若干含む）
18．オリーブ色粘質土層5 Y5/6（3cm大の礫含む）
19．黄褐色砂質土層10Y R5/8
20．明黄褐色砂質土層2・5 Y6/6
21．褐色砂質土層7・5 Y4/4（焼土含む）
22．オリーブ褐色粘質土層2・5 Y3/3（0.5cm大の礫含む）
23．褐色砂質土層7・5 Y R4/6（礫多量に含む）
24．撹乱
25．淡黄色砂質土層5 Y8/4
26．黄灰色砂質土層2・5 Y5/1（0.5～2cm大の礫多く含む）
27．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/3（0.5cm大の礫含む）
28．明黄褐色砂質土層10Y R6/8（3～5cm大の礫多く含む）
29．明黄褐色砂質土層2・5 Y6/8（0.5cmの礫若干含む）
30．黄褐色砂質土層2・5 Y5/6（0.5～2cm大の礫若干含む）
31．黄橙色粘質土層10Y R7/8（0.5～1cm大の礫多く含む）
32．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4（0.5cm大の礫若干含む）
33．灰黄褐色砂質土層10Y R6/2（1～3cm大の礫若干含む）
34．撹乱
35．褐色砂質土層10Y R4/4（5cm大の礫含む）
36．黒褐色砂質土層2・5 Y3/2（5cm大の礫含む）
37．オリーブ黄色砂質土層5 Y6/4（0.5～5cm大の礫多量に含む）
38．明黄褐色砂質土層10Y R6/6（3～5cm大の礫多量に含む）
39．にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3（遺物、炭化物、焼土、3～5cmの礫含む）
40．撹乱
41．黄橙色粘質土層10Y R7/8（5～10cm大の礫含む）
42．黄橙色粘質土層7・5 Y R7/8（地山）
43．明黄褐色砂質土層2・5 Y6/8（地山）
44．明黄褐色砂質土層10Y R6/8（3～5cm大の礫少量含む）
45．黄褐色砂質土層10Y R5/8（3cm大の礫少量含む）
46．暗褐色砂質土層10Y R3/3（遺物、炭化物、焼土、3～5cm大の礫含む）
47．にぶい褐色砂質土層7・5 Y R5/4（5～10cmの礫含む）
48．褐色粘質土層10Y R4/6（3～5cm大の礫若干含む）
49．明黄褐色粘質土層10Y R6/8（3～5cm大の礫含む）
50．オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4（炭化物多量に含む）
51．暗オリーブ褐色砂質土層2・5 Y3/3（遺物、炭化物多量、1～3cm大の礫含む）
52．明黄褐色砂質土層10Y R6/8（1～7cm大の礫多く含む）
53．明黄褐色粘質土層10Y R6/6（遺物、4cm大の礫含む）
54．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/3（0.5～1cm大の礫若干含む）
55．オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6（1～3cm大の礫少量含む）
56．黄褐色砂質土層2・5 Y5/6（0.5～1cm以下の礫少量含む）
57．撹乱
58．明黄褐色砂質土層10Y R6/8（0.5cm以下の礫少量含む）
59．黄褐色砂質土層2・5 Y5/6

第1図　第35次調査北壁・東壁土層図



第3図　SF01出土遺物

る。高台内は露胎。釉は白濁する。2は、皿。高台内と見込みが、露胎となっている。5は、鉢。見込みには、型押しの花弁文がみられる。高台内は、露胎。14世紀代の龍泉窯の製品と考えられ、伝世品である。3・4は白磁端反り皿。6・7は、備前焼。6は、壺。口径（推）16cmを測る。7は、大甕の口縁部。8・9は、土師質土器皿。8は、第1分冊第23次調査の分類の1型式A類。口径8.4cm、器高2.3cmを測る。9は、胎土の白さの強い3型式A類。口径10cm、器高1.9cmを測る。10は、弥生土器壺の底部。この台地上には、弥生時代の遺構・遺物がみられる地点があり、特に遺跡の中心部の現在の産業工芸センターで中期のまとまった資



第４図　SE04遺構図

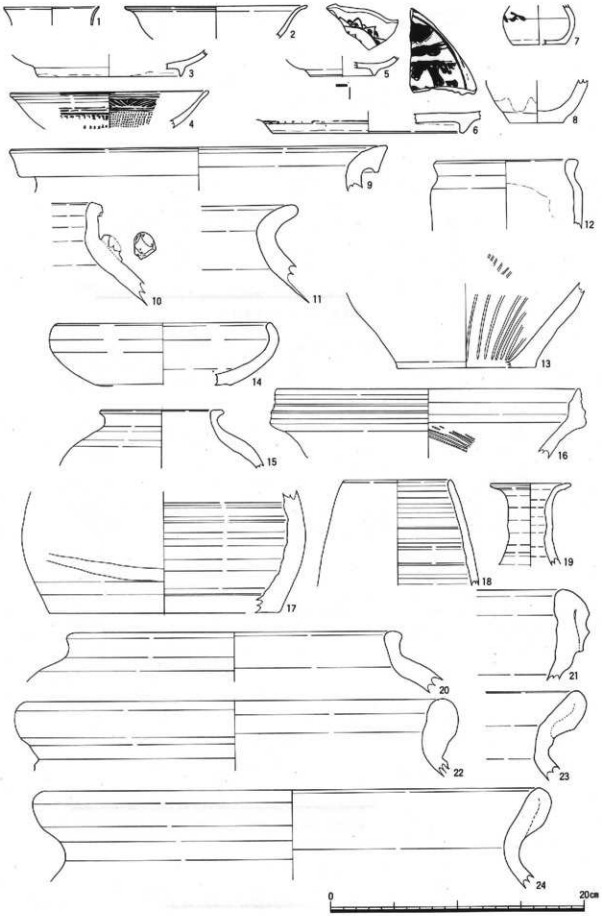
料がみられる。これは底部のみであり、細かな時期が決め難いが、やはり弥生時代中期のものであろう。11は、瓦質土器香炉。外面には、スタンプによる雷文帯が施される。12・13は土師質土器釜。いずれも、底部外面は右→左へのヘラケズリ、口縁部・鍔部はヨコナデ調整。内面は12がナデ調整、13が横方向のハケ調整となっている。12は外面底部、13はそれに加えて内面にも煤が付着する。

第13図は、備前焼甕。口径（推）53.8cm。

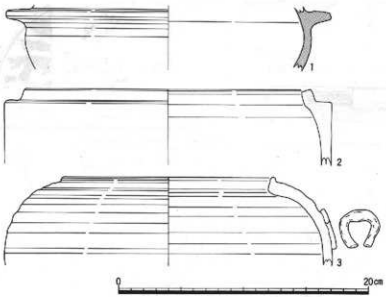
ＳＤ11

ＳＤ11は、ＳＤ04の北側をこれに平行して延びる溝である（第11図）。検出長24.32ｍ、幅0.96ｍ、深さ0.48ｍを測る。断面形は、「U」字形を呈する。西側はＳＦ01に接合し、東側は調査区外に延びる。ＳＤ04との距離は、1.5ｍ前後である。また、両者とも第27次調査区北端のＳＤ11もこれとほぼ平行しており、これまでの距離は、約6.5ｍである。

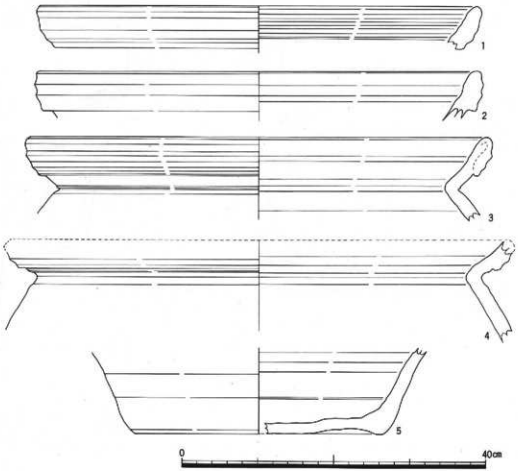
出土遺物はそれほど多くないが、西端部で土師質土器皿などがまとまって出土している（第14図）。第15図－１は、備前焼水屋甕の体部。一条の突帯が巡る。２・３は、土師質土器皿。両者とも、１型式Ａ類である。２は口径7.6cm、器高1.6cm。３は口径7.8cm、器高1.8cmである。４は、東播系中世須恵器捏鉢。14世紀代のもの。５は、同甕。口径32.5cm。やはり同時期のものであろう。



第5図　SE04出土遺物(1)

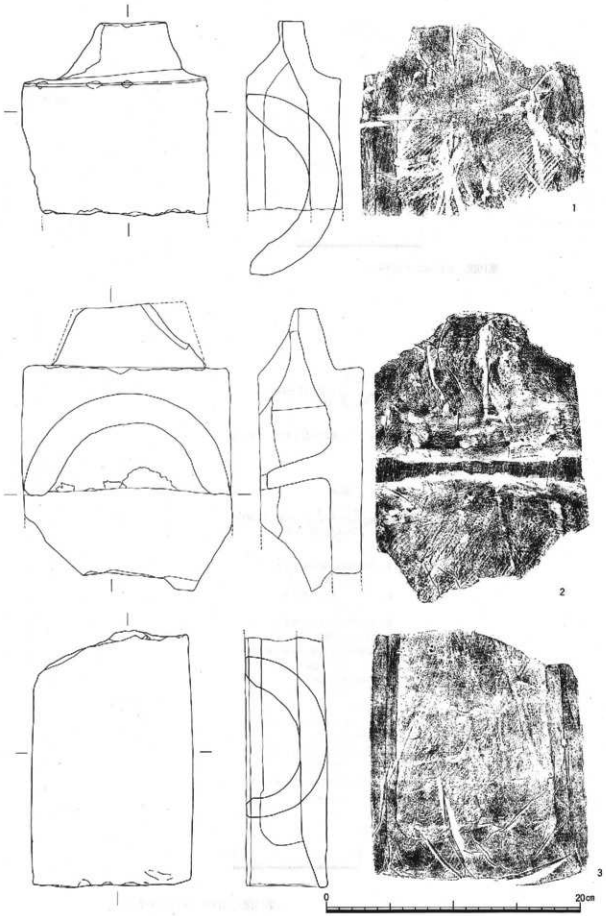


第6図　SE04　出土遺物(2)

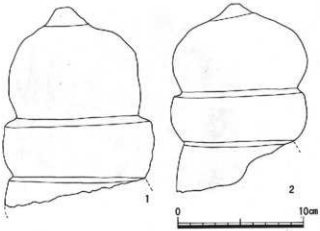


第7図　SE04出土遺物(3)

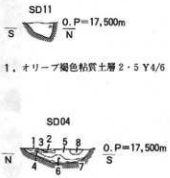
第8図　SE04出土遺物(4)

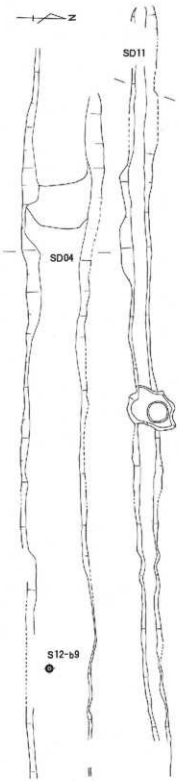


第9図　SE04出土遺物(5)

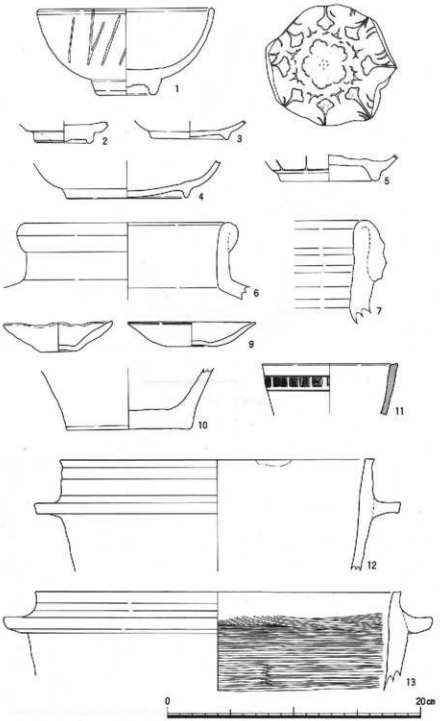


第10図　SE04出土遺物(6)

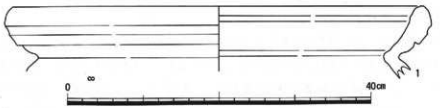




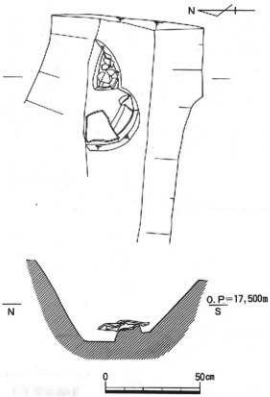
第11図　SD04・SD11遺構図



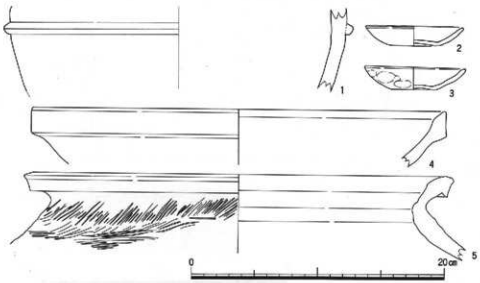
第12図　SD04出土遺物 (1)



第13図　SD04出土遺物(2)



第14図　SD11遺構図



第15図　SD11出土遺物

3．Ⅲ期の遺構と遺物

この伊丹郷町の時期は、他の調査区と異なり、酒造関係の遺構がみられない。したがって、Ⅲ－A期は、後述するⅢ－B期と敷地割りが変わっていないようである。また、それはⅣ期近代へと引き継がれていると考えられる。すなわち、西側の石組溝ＳＤ12を境として、東側がひとつの屋敷地、西側が２軒の屋敷地となっており、いずれも北側の道路に入口を向けていたと考えられる。しかし、内部は変化したとみえ、遺構出土遺物は他の調査区と同様の様相を示している。

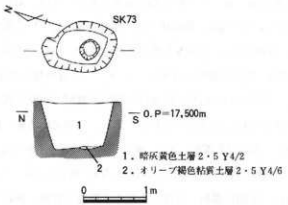
Ⅲ—A期

この時期は、建物については礎石が残っておらず、不明である。明確にとらえられるのは、井戸・土壙などである。

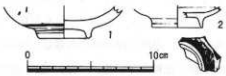
SK73

SK73は、調査区西側の中程に位置する（第16図）。平面形は不整長方形を呈し、全長1.2m、幅0.81m、深さ0.52mを測る。

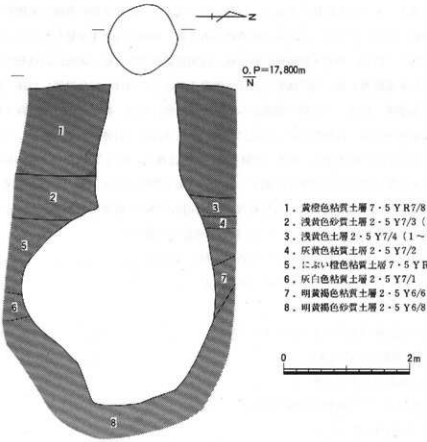
出土遺物には、第17図に掲げた肥前磁器などがある。1は、染付碗。見込みには蛇ノ目釉ハギがみられる。2は、外面高台際に墨弾きで文様を描く。



第16図　SK73遺構図



第17図　SK73出土遺物



第18図　SE02遺構図

ＳＥ02

ＳＥ02は、ＳＫ73の北側に位置する（第18図）。直径1.1ｍ。深さは5.08ｍまで確認したが、底に達さなかった。内部は、Ｏ.Ｐ＝14.300ｍ付近で大きく壁面が崩れ、広がっている。

この井戸は、最も豊富な遺物が出土した遺構のひとつである。第19図―１は、唐津系陶器皿。見込みには蛇ノ目釉ハギがみられる。２～６は、肥前磁器。２は、二重網目文碗。口径10.2cm、器高5.2cm。３は、青磁染付鉢。４は、広東型碗。５は、碗蓋。笹文を描く。口径10.2cm、器高2.8cm。６は、染付鉢。呉須は流れて、内面の文様がわからなくなっている。７・11は、擂鉢。７は、見込みの擂目が放射状であり、明石焼の可能性がある。11は、見込みの擂目が三角形で堺焼と考えられる。底部には直径1.3cmの穿孔がみられ、植木鉢として転用されたことを示す。口径34.3cm、器高13cm。８・９・10も肥前磁器である。８は、染付小型徳利。一輪差しとして用いられていたものであろうか。口径2.2cm、器高10.3cm。体部外面には、松竹梅文を描く。完形品である。９は、青磁香炉。口径8.2cm、器高4.6cm。内面下半及び高台は露胎。10は、青磁花瓶。これも完形品である。口径8.1cm、器高15.6cmを測る。内面体部以下を除いて、すべてに青磁釉を掛ける。

第20図―１は、産地不明の陶器皿。型押しによって作られており、外面には指圧調整痕が明瞭に残る。また、小さな脚をハリツケている。内面には灰釉が掛けられ、鳥文がみられる。２は、三田青磁角鉢。鉛ガラスによって焼き継ぎしている。これも型作りである。畳付のみ露胎。３は、産地不明の陶器蓋。胎土は瀬戸・美濃焼に似る。内面口縁端部のみ露胎。外面には、鉄絵で草花文を描く。口径10.5cm、器高2.4cm。４は、伊賀・信楽焼系鉄釉落とし蓋。口径9.4cm、器高2.4cm。下面は露胎。５は、小型の志野焼片口鉢。鉄絵で草花文を描き、一部にはスタンプで松葉の除刻を施した上に銅緑釉を掛けている。底部外面には、糸切り痕が残る。６は、鉄釉掛けのひょうそく。完形品。口径6.2cm、器高3.2cm。７は、伊賀・信楽焼系片口鉢。内面には、灰釉、外面には塗土を施す。８・10も同様の製品で、口径がやや大きい。これは同一個体の可能性がある。底部及び口縁部は、露胎。９は、７とセットになる可能性のある蓋。外面には塗土を施し、白土のいっちん掛けによって草花文を描く。11は、伊賀・信楽焼灰釉土瓶。内面は露胎であるが、底部には鉄釉が掛けられている。12は、伊賀・信楽焼鉄釉土瓶。内面体部以下にも鉄釉を掛ける。13は、同鉄釉鍋。口径（推）20.6cm。14～16は、瀬戸・美濃焼。14は、三足盤。底部から脚部裏面に掛けては、露胎。他は透明釉を掛け、体部外面には３箇所青色の釉を掛ける。口径21.9cm、器高11.3cm。見込みには、目跡が５箇所残る。15は、灰釉洗瓶。底部は、露胎。口径５cm、器高14cm。16は、灰釉水甕。底部は露胎。見込みには、2.5cm前後の大きな目跡が２箇所残る。17・18は、陶器鉢の型作りの把手。17は、鉄釉を掛けており、上面には亀を陽刻する。18は、灰釉掛けで、「音羽」の陽刻がある。大阪府貝塚市には、同様の伊賀・信楽焼系の製品を焼く音羽窯があり（南川孝司・淡谷高秀・森村健一1991年）、ここの製品の可能性が高い。

第21図―１～13は、柿釉灯明皿。数多く出土しているため、分類を試みたい。

１型式―受けのないもの。これは法量によって４種類に分類できる。

Ａ類―口径5.6cm、器高１cm前後のもの（２）

Ｂ類―口径6.2cm、器高1.2cm前後のもの（１・３・４・７）

Ｃ類―口径７cm、器高1.6cm前後のもの（５）

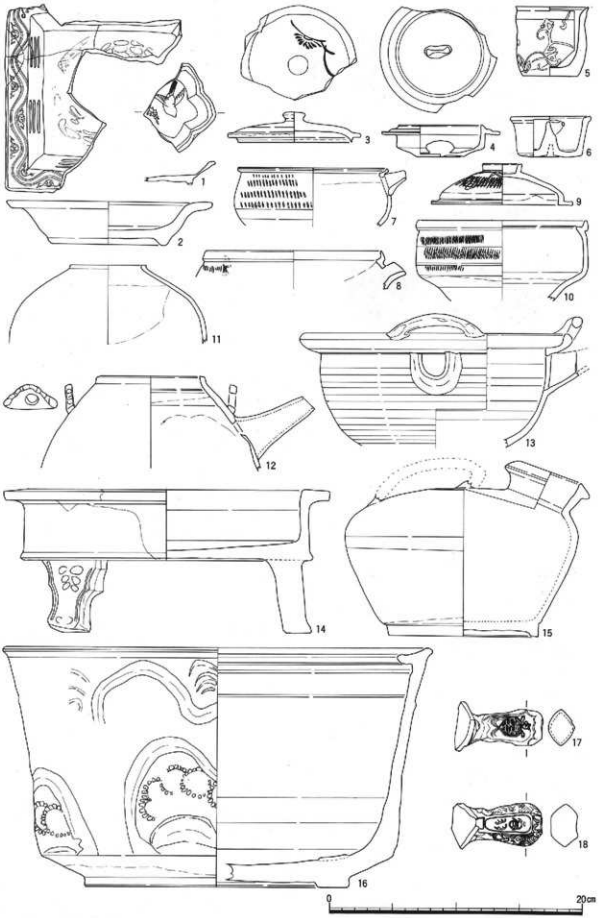
Ｄ類―口径9.3cm、器高2.2cm前後のもの（６）

２型式―受け付きのもの。法量によって３種類に分類できる。

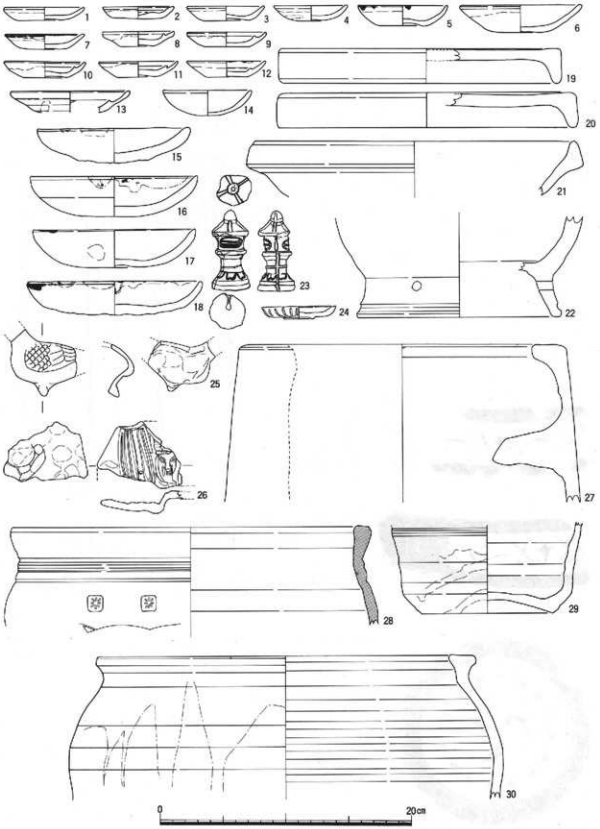
Ａ類―口径5.6cm、器高1.2cm前後のもの（８）

Ｂ類―口径6.2cm、器高1.3cm前後のもの（９～12）

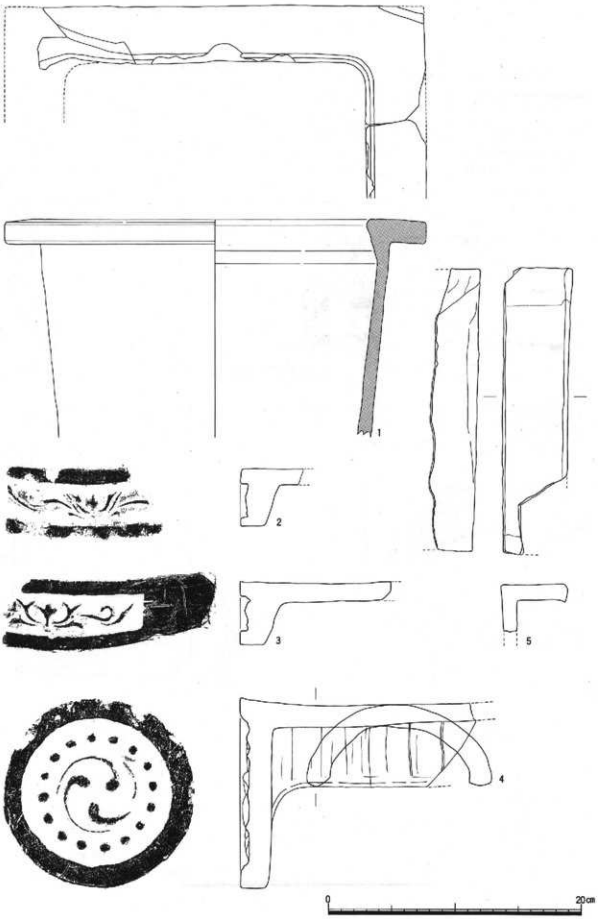
第19図　SE02出土遺物(1)



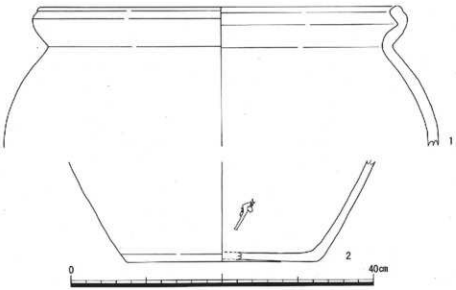
第20図　SE02出土遺物(2)



第21図　SE02出土遺物(3)



第22図　SE02出土遺物(4)



第23図　SE02出土遺物(5)

C類一口径9.3cm、器高1.8cm前後のもの（13）

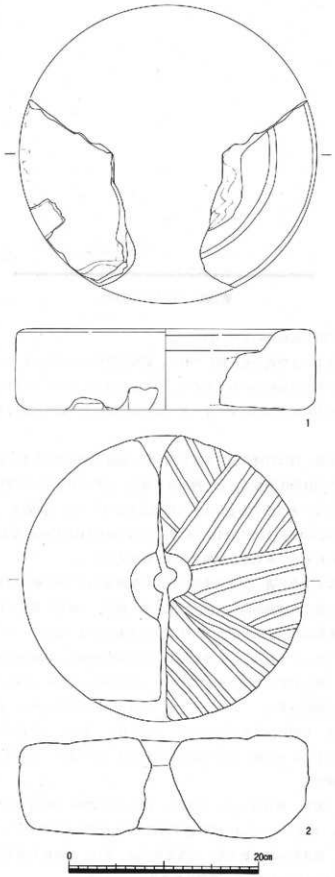
これをみると、口径は１・２型式とも一致しており、器高は受付きのものがわずかに高いことがわかる。２型式には、１型式のC類がみられないが、おそらくここでは出土しなかっただけで存在している可能性は高い。このうち灯芯痕がみられないのは１～４・８～11・13であるが、破片の場合もあり、正確に比率を出すことはできない。

14～18は、土師質土器皿。14は口径７㎝、器高２㎝。15～18は大型の皿である。内面底部はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整、外面は指圧調整である。内面は平滑で、凸形の型を用いた型作りの可能性がある。他の遺跡ではあまりみられない大きさである。すべてに灯芯痕がみられる。法量は、15が口径12cm、器高2.7㎝。16が口径13.2cm、器高3.3.㎝。17が口径12.8cm、器高３㎝。18が口径13.6cm、器高2.7cmを測る。15・16・17と18の間に差が認められそうであるが、分類するには数が足りない。

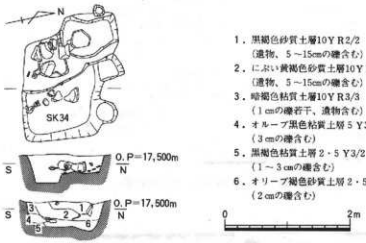
19・20は、土師質土器火清盞の蓋。型作り成形で、天井部外面にはハナレ砂が付着する。他はヨコナデ調整。21は、土師質土器焙烙。外面底部には、煤が付着する。22は、土師質土器丸火鉢。型作り分割成形で、のち、ヨコナデ調整。脚部には、0.9cmの円形透かしがあけられている。23は、ミニチュア土製品の灯篭。合わせ型による。24もミニチュア土製品で、型作りの皿。見込み中央部に、銅緑釉で円形の文様を施す。25は、鳩。中空の型作り製品。26も中空の型作り製品。天女か。これは胎土が橙色５ＹＲ７/６で赤味が強く、雲母を多く含んでおり、他の製品と異なる。27は、風炉竈。外面は、赤色顔料を塗る。内面には、煤が厚く付着する。28は、瓦質土器甕。外面には、菊花状のスタンプ文を押す。29は、丹波焼小型甕。外面には鉄釉、内面には塗土を施し、外面下部から底部にかけて露胎。底部には、砂目跡が４箇所残る。30も丹波焼甕。外面は鉄釉、内面は灰釉を掛ける。

第22図―１は、瓦質土器炉。板作りハリツケ成形。内面はナデ調整、外面にはハナレ砂痕が残る。口径（推）23.9cm。２～４は、屋瓦。２・３は、均整唐草文軒平瓦。文様はのびやかで、18世紀中頃前後のもの。４は、三ツ巴文軒丸瓦。連珠数16個を数える。瓦当部径15cm。５は、土師質土器用途不明品。全長22.3cm、幅5.2cm。あるいは道具瓦かもしれないが、軟質に焼き上がっている。

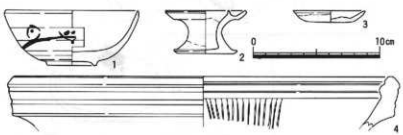
第23図―１・２は、丹波焼甕の口縁部と底部。無釉で、外面には灰被りがみられる。17世紀～18世紀前半



第24図　SE02出土遺物(6)



第25図　SK34遺構図



第26図　SK34出土遺物

代の遺物で、伝世したものか。口径（推）47.1cm。

第24図－1・2は、石臼。花崗岩製。1は上臼。直径31.7cm、高さ8.6cmを測る。2は、下臼。直径（推）30cm、高さ10.8cm。目は8分割と考えられる。

SK34

SK34は、調査区西側のSE02の北側に位置し、同じ屋敷地の遺構と考えられる（第25図）。平面形は長方形を呈し、全長1.7m、幅1.26m、深さ0.45mを測る。SK32・33に切られている。

出土遺物のうち、第26図－1は、肥前磁器碗。見込みには、蛇ノ目釉ハギがみられる。2は、京焼系灯明具。口径6.3cm、器高3.4cm。3は、柿釉灯明皿。口径5.6cm、器高0.9cm。4は、堺焼擂鉢である。

SP110・102

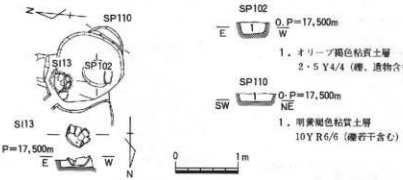
SP110・102は、調査区西端の中程に位置し、SD12から西側の2軒目の敷地内に属する。SK57に切られている。SP110は木桶の痕跡が残っており、便槽と考えられる。直径（残）0.64m、深さ0.12mを測る。

第28図－1～7がSP110出土遺物である。1・2は、土師質土器皿。灯芯痕が残り、灯明皿として使用されている。3は、瀬戸・美濃焼の鉄釉掛けの製品。器種は、断定できない。底部は露胎。4・5は、ミニチュア土製品。4は、擂鉢。5は、碗。いずれも型作りである。6は、瀬戸・美濃焼灰釉鉢。底部は露胎。7は、肥前磁器の香油壺。内面は露胎。

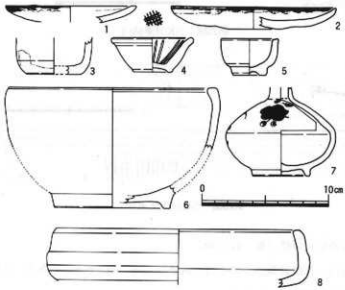
SP102は、直径0.43m、深さ0.13mを測る。出土遺物には、第28図－8の土師質土器焙烙がある。口径（推）19cm。18世紀前半の遺物である。

SD07・08

SD07・08は、調査区東側の屋敷地の南端を東西に延びる溝である（第29図）。屋敷地外の道路側溝と考え



第27図　SI13・SP102・SP110遺構図



第28図　SP110(1～7)・102(8)出土遺物

られる。ＳＤ07は、検出長18.08ｍ、幅0.72ｍ、深さ0.12ｍを測る。東側は、さらに調査区外に延びる。

出土遺物の第30図－１は、花崗岩製一石五輪塔の空・風輪部。２は、肥前磁器色絵紅皿。体部外面には、赤絵で「詰町　□七　□□　東はし」と書かれている。３は、粘板岩製石硯。幅7.5cm、高さ1.7cm。滋賀県高島石に似る。

ＳＤ08は、全長12.6ｍ、幅は0.52ｍ以上、深さ0.09ｍを測る。出土遺物には、第31図の備前焼甕の口縁部がある。16世紀代のもので混入と考えられる。この他、江戸時代後期の肥前磁器が少量出土している。

ＳＳ18直下土壙

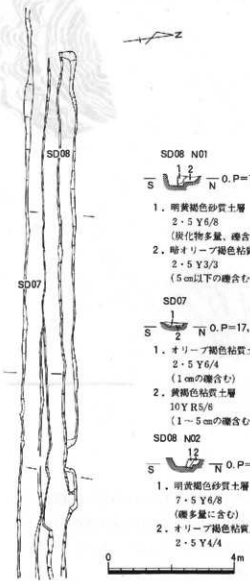
ＳＳ18は、後述するⅢ－Ｂ期からⅣ期にかけての建物ＳＢ01の礎石であるが、その直下にこれに切られた遺構が存在した。これは形が判然とせず、ＳＳ18直下土壙として扱った。建物ＳＢ01の上限を示す資料である。遺構図は、形が判然としないため、ここでは省く。

出土遺物は、第32図のようなこの時期のものがある。１は、土師質土器灯明皿。２は、産地不明の陶器湯呑茶碗。底部外面は露胎、他は透明釉を掛ける。体部外面には白土によって鵠を描き、脚先と羽根先はスタンプによる除刻で表し、鉄釉を掛ける。高台には１箇所「Ｖ」字形の切り込みがみられる。３は、土師質土器火鉢の脚部。４は、土師質土器焙烙。５は、肥前磁器広東型碗。外面体部には、こうもり文を描く。６は、柿釉灯明皿。口径6.4cm、器高1.3cm。７は、産地不明の陶器碗。内面には鉄釉、外面にはトビカンナの上に

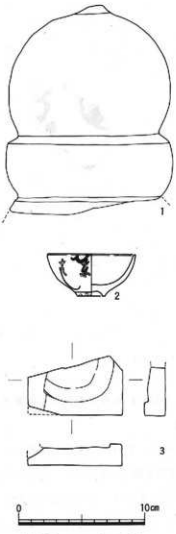
薄い鉄釉を掛ける。8は、瀬戸・美濃焼水甕。灰釉を掛ける。9は、瀬戸・美濃焼陶胎染付鉢。高台は蛇ノ目凹型高台となっている。10は、刷毛目唐津鉢。高台は低い。

Ⅲ－B期

Ⅲ－B期は、前述したように文化年間（1804～18）頃から明治時代後期ないし大正時代までの期間である。この時期には、第1分冊で詳述したように大規模な酒造関係の施設が出現し、東側の台地下には酒荷を積み出す船着き場ができるなど、この地域が大きく変化する。当調査区では酒蔵はみられないが、この動きに関

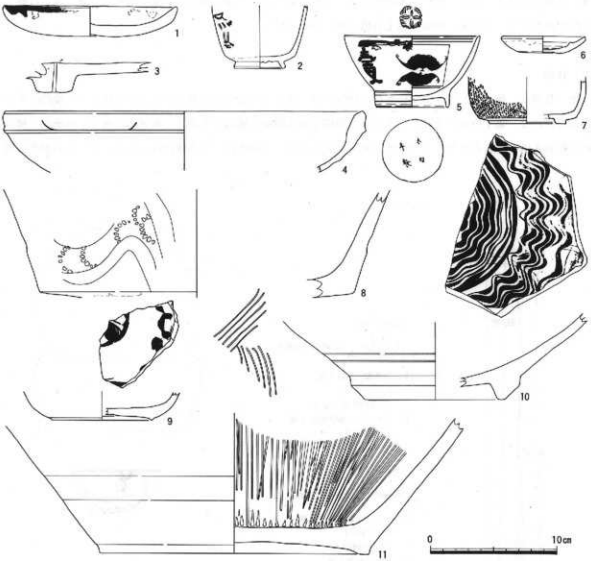


第29図　SD07・08遺構図



第30図　SD07出土遺物

第31図　SD08出土遺物



第32図　SS18直下出土遺物

連すると思われる規模の大きな民家ＳＢ01が出現する。

ＳＢ01

ＳＢ01は、ＳＤ12の東側に位置し、この時期からⅣ期にかけて改築されながら存続した建物である（第33図）。東西６間半（12.8ｍ）、南北４間（7.84ｍ）以上の規模を持ち、入口部は北部の調査区外となる。西側の突出部は建て増しした可能性がある。また、東側は礎石がなく不明であるが、これに伴うと思われる溝状の掘り込みがみられ、これに付属する部分があったことを窺わせる。

また、南東部には、便所が付属する。ここには後述するＳＩ03・04・05が収まる。このうちＳＩ05は、後述するようにＳＩ03・04より古く、当初はＳＩ05だけが設けられていたが、後に改築して入る向きを変え、ＳＩ03・04を利用するようになったものと考えられる。その北側には、コンクリート造りの防空壕ＳＫ179が設けられている。これはⅣ期の遺構であるが、建物がⅣ期まで存続したことを明確に示している。それ以前は土間ではなかろうか。

主棟の南側には、半間の廊下があり、この西端には便所ＳＩ06がある。西側にも廊下がある。この西側の廊下に面して、便所ＳＩ07が設けられている。この廊下はさらに主棟の中まで続き、北端にはまた便所ＳＩ

01が設けられている。これらは大谷焼の甕を用いており、Ⅳ期に設けられたものである。ただ、庭に位置するＳＩ08は大谷焼の甕であり、戸外の便所であるが、その下に木桶の便槽が重なって設けられており、他の便槽も当初木桶であったものを作り替えている可能性がある。このような例は、現在調査中の宮ノ前地区でも、多く見受けられる。

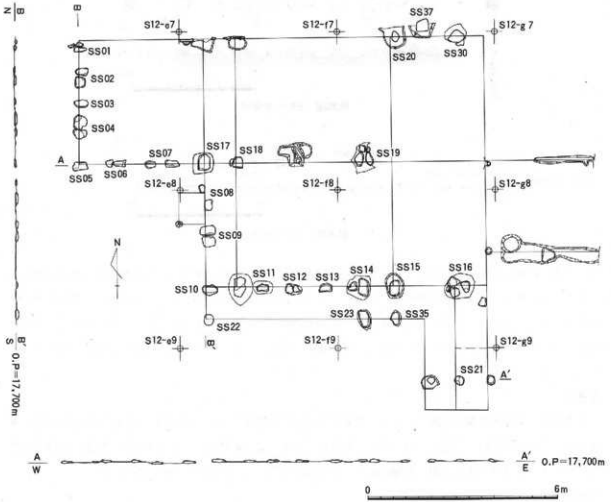
主要な柱の礎石は大きく、特にＳＳ19は、酒蔵にみられるような根石が１段設けられている。ＳＳ11・12・13は、東柱の礎石と考えられる。その南及び西は庭となっており、これも後述するＳＫ191の水琴窟などが設けられている。主棟の構造は、切妻式と考えられる。

ＳＢ02

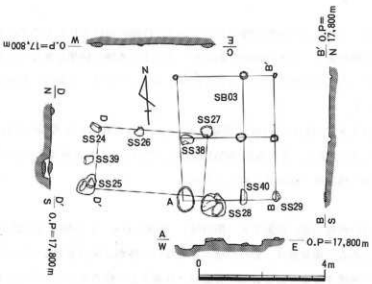
ＳＢ02は、ＳＢ01の南側の庭に位置する（第34図）。東西3.44ｍ（1.75間）、南北1.97ｍ（２間）の規模を持つ小屋的な建物である。南東部は、礎石が残っていない。時期は決め手がないが、ＳＢ03とは重なっており、併存し得ない。後述するようにＳＢ03がＳＢ01と柱通りを一致させることから、ＳＢ03はＳＢ01が増築されたときに付属する小屋的な建物として建て替えられたと考え、このＳＢ02は建て替え前の独立する小屋として先に建てられていたと考えたい。

ＳＢ03

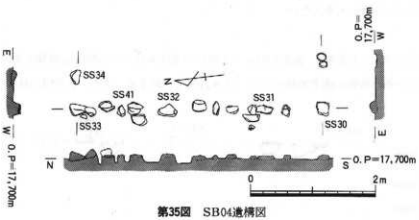
ＳＢ03は東西2.95ｍ（１間半）、南北3.93ｍ（２間）の規模を持つ、小屋的な建物である（第34図）。図のＢ－Ｂ'ライン及びその西側の南北の柱のラインはＳＢ01と一致する。また、ＳＢ01の柱までは0.98ｍでちょ



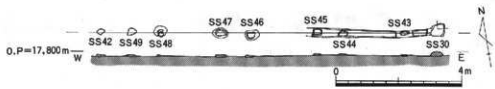
第33図　SB01遺構図



第34図　SB02・SB03遺構図



第35図　SB04遺構図



第36図　SA01遺構図

うど半間の距離にある。したがって、ＳＢ01との関係を考えて計画的に建てられた建物であることは明らかである。Ｂ―Ｂ'ラインとその西側の柱のラインの間も0.98ｍすなわち半間であり、ＳＢ01との間は半間の渡り廊下によってつながっていたことも考えられる。北西部は柱の間隔が不自然であり、別に礎石があった可能性もある。あるいは、これを除いた南北１間の建物を想定することもできる。後者の可能性も高いことを付記しておきたい。

ＳＢ04

ＳＢ04は、調査区西側に位置し、さらに調査区外に延びる建物である（第35図）。南北7.87ｍ（４間）、東西２ｍ以上の規模を持つ。礎石には、根石が施されている。これも時期が不明であるが、Ⅳ期には確実に存在している。ＳＢ01のようにⅢ―Ｂ期からあった可能性が高く、この時期に含めておきたい。

ＳＡ01

ＳＡ01は、東側の敷地の調査区南端を東西に延びる、塀と考えられる遺構である（第36図）。全長10.8ｍを

測る。ほぼ1m間隔で小さな礎石を並べており、東側は幅0.3m、深さ0.09mの布掘り溝の中に礎石を据えている。東端は、SB04の壁に接していたものと考えられる。木製の板壁であろう。時期を示す遺物はなく、これもSB04との関係から、この時期と判断した。

SI02

SI02は、調査区東端のSB04に隣接する便槽甕である（第37図）。掘形の直径0.59m、深さ0.41mを測る。SB04の便所と考えられるが、周囲にこれに伴う礎石が見当たらず、断定できない。

甕は、丹波焼である（第39図）。

SI05

SI05は、調査区東南に位置するSB01に伴う便所である（第38図）。前述したように、のちに隣接する大谷焼甕SI03・04に作り替えられたと考えられる。

用いられた甕は土師質で、産地不明（第39図）。

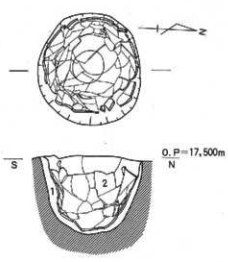
SI09

SI09は、調査区中央部のSB01の東側の庭部分に位置する（第40図）。掘形の直径0.35m、深さ0.21mを測る。丹波焼壺を埋めた遺構である。上面には拳大の石がみられ、木蓋を伴っていた可能性が高い。位置的にみて、胞衣（えな）壺と考えられる。通常の胞衣壺は、安価な土師質土器火消壺を用いるのが一般的であるが（川口1989年）、この屋敷は建物の規模から考えても上級の住人の居住地と考えられ、このような壺を用意したものと思われる。内部には、何も残っていなかった。

壺は口径12.4cm、器高19.9cmを測る（第41図）。肩部には1箇所耳が残り、四耳壺であったと考えられる。内面及び外面の一部に塗土を施す。外面体部最下部は回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）、底部は未調整。

SI10

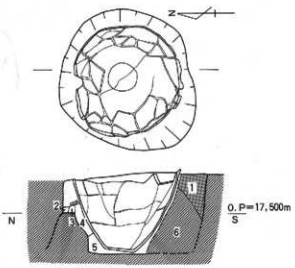
SI10は、SI09の南に隣接する（第42図）。瓔焼擂鉢を埋めた遺構である。掘形の直径0.37m、深さ0.12



1．明黄褐色砂質土層2・5Y6/6
2．黄褐色砂質土層2・5Y5/6
（3～5cm大の礫多量に含む）

0　50cm

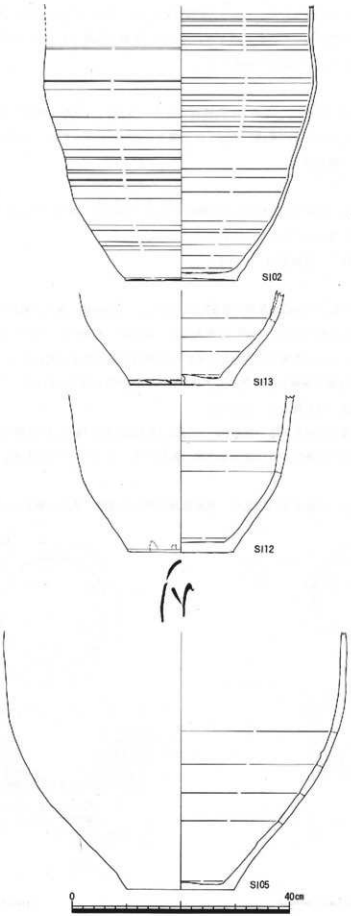
第37図　SI02遺構図



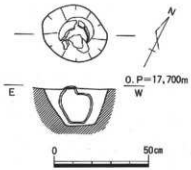
1．にぶい黄褐色粘質土層10YR4/3
2．にぶい黄褐色粘土層10YR5/4
3．明黄褐色粘質土層10YR6/8（粘土含む）
4．黄褐色粘質土層2・5Y5/4
5．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6
6．浅黄色砂質土層2・5Y7/4（地山）

0　50cm

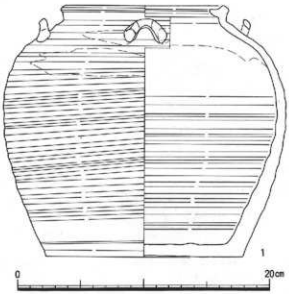
第38図　SI05遺構図



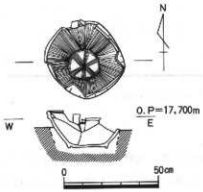
第39図　SI02・SI13・SI12・SI05出土遺物



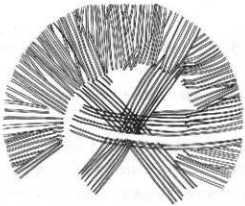
第40図　SI09遺構図

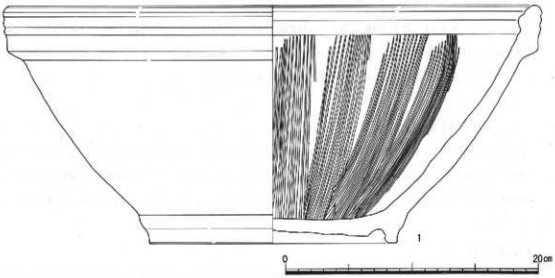


第41図　SI09出土遺物

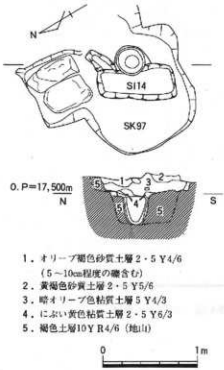


第42図　SI10遺構図

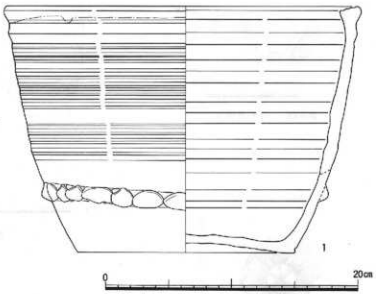




第43図　SI10出土遺物



第44図　SK97・SI14遺構図



第45図　SI14出土遺物

mを測る。性格は不明。

擂鉢は、口縁部を除いて残りが良い（第43図）。擂目と擂目の間は間隔があき、底部中程から施される。見込みの擂目は交差する。底部には、高台が付けられる。白神典之編年（白神1990年）のⅠ期に属し、18世紀中頃の製品であり、あるいはⅢ－A期の遺構かもしれない。

SK97・SI14

SI14は、調査区中程に位置し、SI06に切られる丹波焼桶を埋めた遺構である（第44図）。SK97の一角に位置し、これと一体の遺構であろう。SK97は、平面形が不整方形を呈し一辺1.15m、深さ0.2mを測る。SI14は、掘形の直径0.26m、深さ0.27mを測る。西側には、SI08の下の古い木桶便槽があり、これの手洗い水の処理に用いられたものか。

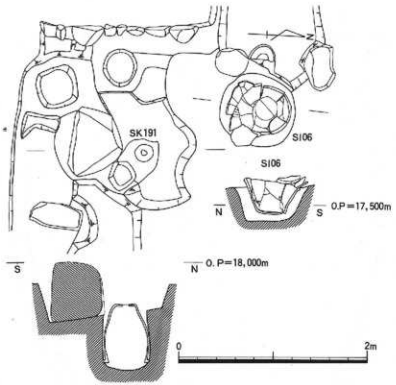
第45図は、SI14の丹波焼桶である。ほぼ完形品。口径24.4cm、器高19.5cm。口縁部上面には、3条の沈線が巡り、10箇所の目跡による変色箇所が観察される。外面体部上半はクシ目、下半には突帯を巡らす。内面及び外面口縁部は茶褐色の釉土、外面体部は灰釉を掛ける。

4．Ⅳ期の遺構と遺物

Ⅳ期は、明治時代後半ないし大正時代から現代までである。SD12より東側はSB01がそのまま存続する。西側にも建物の礎石がみられるが、こちらは復元するに至らない。ただ、前述した便槽桶の近くに大谷焼鉢の便槽が2基一組で設けられており、構造はほとんど変わらなかったと考えられる。SE03はこの時期の井戸である。

SK191・SI06

SK191・SI06は、調査区中程のSB01の南庭部分に位置する水琴窟と、それに隣接する大谷焼鉢を用いた便所である（第46図）。



第46図　SK191・SI06遺構図

ＳＫ191は、平面形不整形の浅い擂鉢状の掘り込みの中央に甕を倒立させて埋めている。擂鉢状の掘り込みには白色タタキを塗り、甕の底部の穿孔部に向けて集水されるように傾斜を持たせている。上面の土壙の全長は1.51ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.3ｍを測る。甕の掘形は直径0.5ｍ、深さ0.64ｍを測る。ＳＫ191の南には、これを構築したのちに据えられた長さ0.74ｍ、高さ0.61ｍを測る大きな庇石がある。甕の中には、泥土が堆積していた。用いられた甕は、土師質土器甕である（第47図）。口径37.6cm、器高61.4cmを測る。口縁部は「Ｔ」字状となる。底部は、水滴を落下させるための直径5.1cmの穿孔がみられる。外面は板状工具によるナデ調整、内面はヨコナデ調整。

ＳＩ06は、掘形の直径0.82ｍ、深さ0.36ｍを測る。大谷焼鉢を据え、そのまわりに擂鉢状に白色タタキを塗る。用いられた鉢は、口径54.2cm、器高32.3cmを測る。大谷焼の分類の３形式に属する（第１分冊第23次調査報告参照）。底部から口縁部まで４分割で成形されたことが、断面でわかる。

この便所と水琴窟は一連のものと考えられ、便所の手洗い水を利用して音を出していたのであろう。

ＳＩ01

ＳＩ01は、ＳＢ01のなかに設けられた便所の便槽である。大谷焼鉢を埋めており、掘形の直径0.64ｍ、深さ0.3ｍを測る（第48図）。

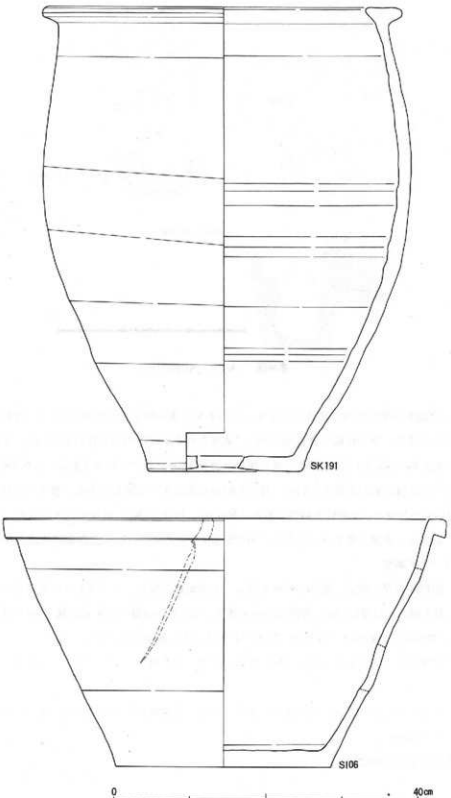
鉢は、３型式のもの（第52図）。

ＳＩ07

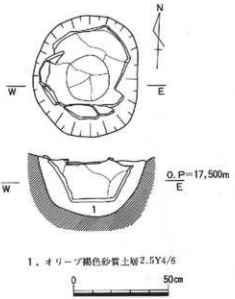
ＳＩ07は、ＳＢ01の西側の廊下に設けられた便所の便槽である（第49図）。掘形の直径0.7ｍ、深さ0.28ｍを測る。３型式の大谷焼鉢を用いる（第52図）。

ＳＩ03・04

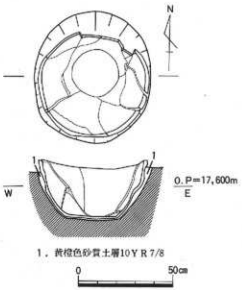
ＳＩ03・04は、前述したように、ＳＢ01の南東部に設けられた2基一組の便槽である（第50図）。おそらく



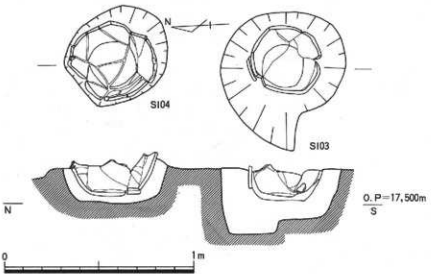
第47図　SK191(1)、SI06(2)出土遺物



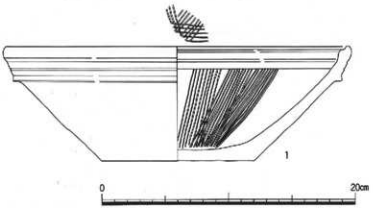
第48図　SI01遺構図



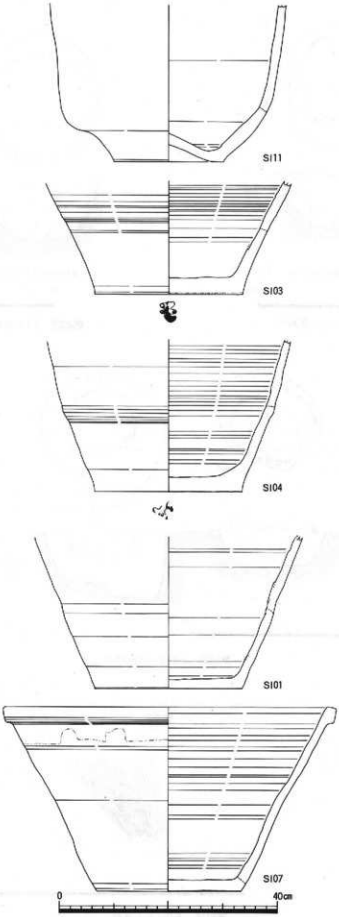
第49図　SI07遺構図



第50図　SI03・04遺構図



第51図　SI04出土遺物



第52図　SI11・SI03・SI04・SI01・SI07出土遺物

大便用と小便用として使い分けられたものであろう。また、これはＳＩ05に後出する便所で、改築されたものと考えられる。

いずれも、大谷焼鉢を用いている。ＳＩ03は、掘形の直径0.56ｍ、深さ0.22ｍを測る。ＳＩ04は、掘形の直径0.66ｍ、深さ0.34ｍを測る。

ＳＩ03・04ともに鉢は、３型式のもの（第52図）。ＳＩ03の底部外面には、「も」の墨書、ＳＩ04の底部外面には「上」の墨書がみられる。また、ＳＩ04の内部から、第51図に挙げた須恵焼擂鉢が出土している。Ｉ型式の擂鉢であり、何らかの理由で古い遺物が入ったものと考えられる。

ＳＩ11・12

ＳＩ11･12は、調査区西側の屋敷地の中程に位置し、２基一組で設けられた便槽である（第53図）。ＳＩ11は、掘形の直径0.69ｍ、深さ0.28ｍを測る。ＳＩ12は、掘形の直径0.55ｍ、深さ0.31ｍを測る。

用いられた便槽は、いずれも大谷焼甕である。ＳＩ11（第52図）は底部がへたったものか、上底状になっている。１型式の甕かと思われるが断定できない。ＳＩ12（第39図）は、１型式の甕。底部外面には、判読不能の墨書がみられる。

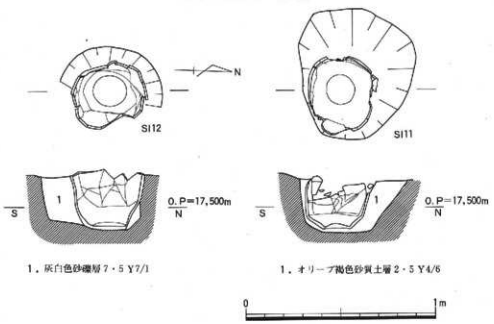
ＳＩ13

ＳＩ13は、調査区西端の屋敷地の中程に位置する（第27図）。ＳＫ57に切られている。掘形の直径（残）0.53ｍ、深さ0.11ｍを測る。

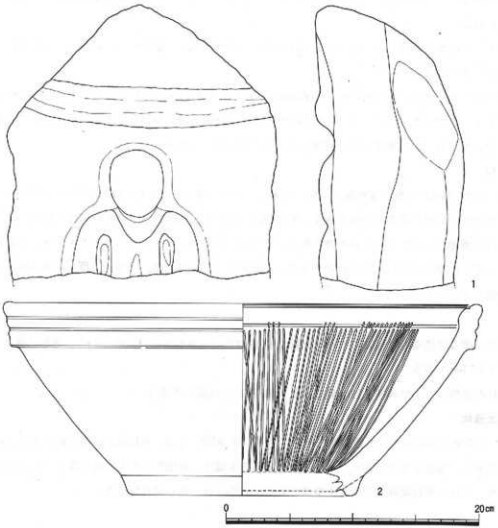
用いられた便槽は、１型式の大谷焼甕である（第39図）。底部のみ遺存。

包含層出土遺物

この他、包含層から注目すべき遺物が出土している（第54図）。１は、ＳＢ01の西側の庭に立っていた花崗岩製石仏である。体部下半は、欠失している。後背部の先端は、屋根形となる。庭の飾りとしておかれたものであろう。２は、須恵擂鉢。これもＩ型式である。底部には、低い高台を持つ。



第53図　SI11・SI12遺構図



第54図　包含層出土遺物

第５節　第40次調査

第40次調査は、史跡整備に伴う内堀の確認調査である。同様の目的で、第１分冊で報告した第24次調査が行われたが、ＪＲ駅前に通じる東西道路の北側と南側での内堀のつながり方が不明であったため、その確認を第一の目的にして行われた。これが、Ｇ・Ｈトレンチの両トレンチである。その時点では、再開発の建築工事はすでに始まっており、これ以上の調査は行い得ない状況であったが、以前未確認の遺構は多かった。第24次調査ＤトレンチＳＦ01およびＦトレンチＳＦ02（同一遺構）の北側での行方や、第36次調査で検出したＳＦ01が東に折れて続くかどうかという点がそのひとつであった。これを一度に確認するため、最後に建築会社に無理に依頼をして設けたトレンチがＩトレンチである。３時間で埋め戻さざるを得なかったが、疑問を解決する成果を挙げることができた。さらに、工事中にダンプカーの洗車施設を設けることが決まり、その地点を事前調査することとなった。これがＪトレンチである。

この結果、Ｇ・Ｈトレンチでは、内堀ＳＦ01が鈎形に折れて南に続くことが判明し、これの西側肩部のラインを確定することができた。

Ｇトレンチ

Ｇトレンチは、東西道路の北側に設けたトレンチである。Ⅰ期の遺構は、みられなかった。Ⅱ期の遺構としては、ＳＦ03・02・01がある。このうち内堀ＳＦ01は、Ⅱ期有岡城期の遺構であるが、Ⅳ期まで開口している。北側のＳＫ05～07・15などはⅢ期の遺構である。また、Ⅳ期の遺構としては、ＳＤ02・ＳＥ01などがある。ここでは、特に重要なⅡ期の遺構と、特異なⅣ期のＳＤ02について説明を加える。

１．基本層序

ここは、地山までの深さが非常に浅く、ほとんど攪乱土（第３図第１層）である。一部に遺物包含層（同図西壁第42層明黄褐色粘質土10ＹＲ６/８）がみられるが、時期を決めるだけの出土遺物に恵まれなかった。

２．Ⅱ期の遺構と遺物

Ⅱ期の遺構としては、内堀ＳＦ01と第23次調査区から続くＳＦ02、これを挟めたＳＦ03がある。

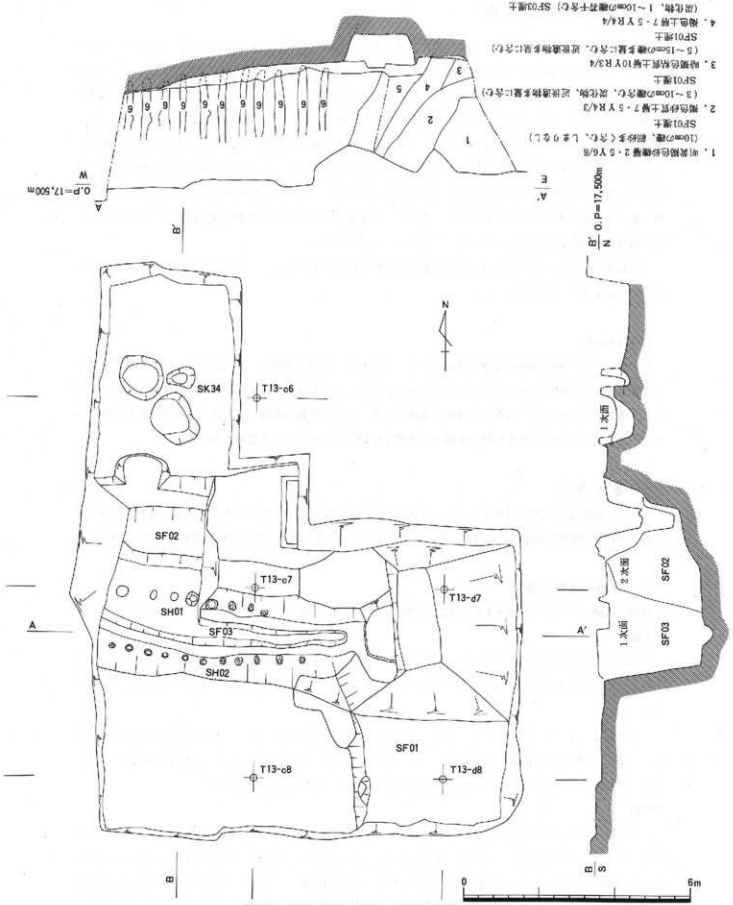
ＳＦ02

ＳＦ02は、第23次調査区で検出したＳＦ01の続きである（第１図）。検出長3.20ｍ、幅5.22ｍ、深さ2.45ｍを測る。断面形は逆台形を呈する箱堀である。ＳＦ01と結合していたかどうかは、攪乱土壙に切られており、不明である。

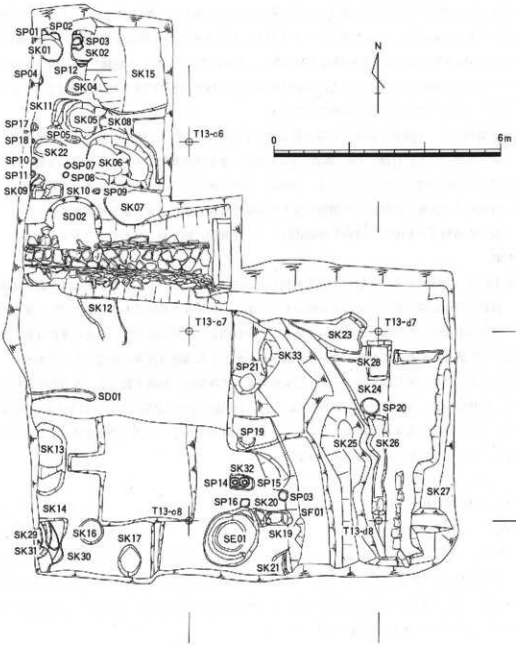
出土遺物は、少ない。第４図－１～３は、土師質土器皿。１は、口径（推）6.4cm、器高1.6cmを測る。本来、口径7.5cm前後の２型式Ａ類に属するものと考えられるが、ひずみがみられるため断定できない。２は、口径（推）9.4cm。１型式Ｂ類か。３は、口径（推）13.2cm。３型式Ｂ類に属するか。

ＳＦ03

ＳＦ03は、ＳＦ02を埋め幅を狭めて設けられた堀である（第１図）。検出長6.30ｍ、幅2.42ｍ、深さ３ｍを測る。東端は、ＳＦ01に結合している。両壁面には直径0.2ｍ前後の杭跡が、肩部から1.3ｍ下がった所から約0.3ｍ間隔でみられた。杭の下端は堀底の地山を貫いて約0.3ｍ刺さっており、痕跡でみる杭の長さは1.9ｍ前後である。ＳＦ02は第23次調査ＳＦ01とつながる堀であるが、第23次調査区東壁土層に二重になった堀の



第1図 第40次調査Gトレンチ第2次面遺構全体図



第２図　第40次調査Ｇトレンチ第１次面遺構全体図

輪郭が観察され、第40次調査ＳＦ03は、第23次調査のＳＦ02との結合地点からこのような構造をとって始まるものと考えられる。

想定される構築物は、堀の上面に屋根を掛け、両壁の杭で支えたトンネル状のものとなる。このような施設は例がなく、どのような目的で設けられたのか判断に苦しむ。しかし、防御上の施設とすれば、不自然である。考えられるのは、攻城用の施設としてである。すなわち、このトンネル状の施設は、主郭からの攻撃に対して上部を覆ってこれを避け、内堀に降りて行けるようにするためのものと考えられるのである。

先のＳＦ02（第23次調査ＳＦ01・第38次調査ＳＦ02・第36次調査ＳＦ01）についても、第１分冊結語で触れたように、他の堀とは異なり屈曲しながら斜めに主郭に向かって延びている。これについて伊丹市教育委員会の小長谷正治氏は、天正七年十月二十七日付「河尻秀隆あて織田信長黒印状」や『信長記』(池田家本)(八木哲浩1978年）に登場する有岡城攻城の際の「金堀」ではないか、と指摘している。「金堀」と呼んだものかどうかはわからないが、その先端に設けられたこの特殊なＳＦ03を攻城用の施設と考えるとき、ＳＦ02もそれと一連のものとするのが自然であろう。

出土遺物には、土師質土器皿と瓦質土器茶釜がある（第５図）。土師質土器皿は、上層で多く出土している。１・２は、ともに口径7.3cm、器高1.5cmを測る。２型式Ａ類である。３～５は、瓦質土器茶釜。同一品の可能性が高いが接合できない。３は、口縁部。口径（推）13.2cm。肩部に１条の沈線を施す。４・５は体部。外面はナデ調整、内面はハケ調整の後ナデ調整。外面鍔部以下は、煤が付着する。

これらの遺物はＳＦ02出土遺物と時期差はなく、短期間に掘り返されたものと考えられる。

ＳＦ01

ＳＦ01は、内堀である。西側の肩部を検出した（第１図)。これは、第１分冊第24次調査で詳述したように、幅15～17m、深さ６～７ｍの大規模なものである。素掘りの箱堀である。ここでは、第24次調査Ａトレンチの西側肩部から、ほぼ真南に続いていることが判明した。明治時代まで埋まらずに存在していたことがいままでの調査でわかっており、ここでも埋土から出土した遺物は近世・近代のものであった。

出土遺物のうち、第６図―１は、三ツ巴文軒丸瓦。連珠数は、16個を数える。瓦当部の直径13.8cm。２・３は、柿釉灯明皿。２は、口径（推）6.2cmできさの分類の１型式Ｂ類。３は、口径9.5cmで１型式Ｃ類に属する。４は、瓦質土器釜。口縁部は直立し、２条の沈線を巡らす。５は、堺焼擂鉢。Ｉ型式のものである。６は、土師質土器焙烙。外面には煤が付着する。

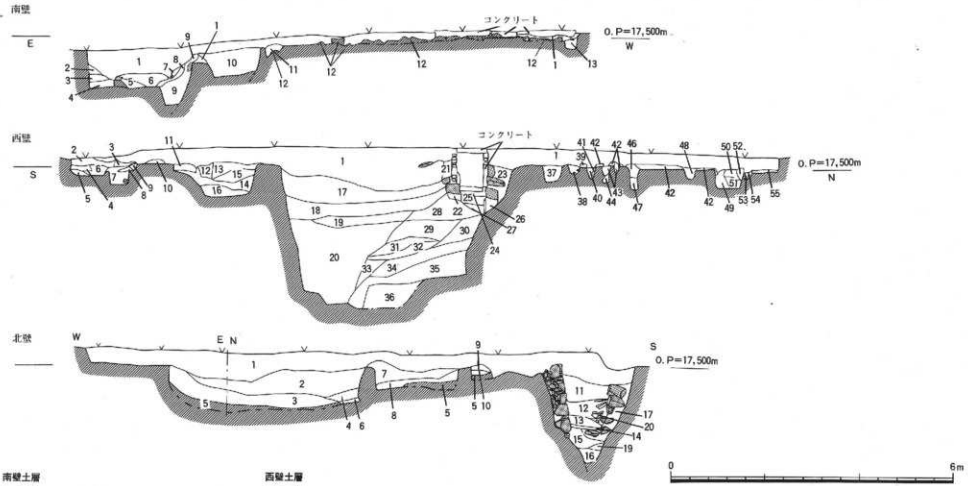
３．Ⅳ期の遺構と遺物

ＳＤ02

ＳＤ02は、石組の溝である（第７図)。検出長５ｍ、掘形の幅2.58ｍ、同深さ2.09ｍ、溝の上端幅1.02ｍ、深さ最浅部0.74ｍ、最深部1.55ｍを測る。底は、東に向かって急激に下がる。石組最下段の下には、直径0.11ｍの胴木を置く。掘形からは出土遺物が少なく、構築時期が決め難いが、近代をさかのぼることはない。溝中からは、第2次大戦前後の遺物が出土している。

Ｈトレンチ

東西道路の南側で、第24次調査Ｃ・Ｄトレンチの間に設けたトレンチである。Ⅱ期の内堀ＳＦ01以外は、Ⅳ期近代の遺構である。



南壁土層

1．撹乱
2．褐色粘質土層10Y R4/4
（3cm以下の礫多量に含む）
3．オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4
（3～5cmの礫多量に含む）
4．暗褐色砂質土層10Y R3/3
（0.5～7cmの礫多量に含む）
5．黄橙色砂質土層10Y R7/8
（2～8cmの礫多量に含む）
6．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4
（2～8cmの礫多量に含む）
7．褐色粘質土層10Y R4/6
（2～4cmの礫若干含む）
8．明黄褐色粘質土層10Y R6/8
（2～5cmの礫若干含む）
9．黄褐色粘質土層10Y R5/8
（2～5cmの礫若干含む）
10．褐色粘質土層10Y R4/4
（2～13cmの礫多量、炭化物、遺物、貝殻含む）
11．暗オリーブ褐色粘質土層2・5 Y3/3
（炭化物多量、遺物、0.5cm以下の礫含む）
12．灰色砂質土層5 Y5/1（地山）
13．暗褐色砂質土層10Y R3/3

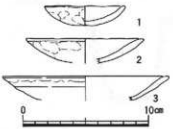
西壁土層

1．撹乱
2．暗褐色砂質土層10Y R3/3
3．褐色砂質土層10Y R4/4（炭化物、貝殻、3cmの礫含む）
4．暗オリーブ褐色粘質土層2・5 Y3/2（炭化物多量、5cmの礫含む）
5．明褐色粘質土層7・5 Y R5/6（炭化物、1～2cmの礫含む）
6．褐色土層10Y R4/4
7．暗褐色砂質土層10Y R3/4
8．炭化物層10Y R2/1
9．暗褐色粘質土層10Y R3/3
10．黄褐色粘質土層10Y R5/8
11．にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/4（炭化物、0.5cmの礫含む）
12．暗オリーブ褐色粘質土層2・5 Y3/3（10cmの礫多量、遺物含む）
13．明黄褐色粘質土層10Y R6/6（炭化物、4cmの礫含む）
14．明褐色粘質土層7・5 Y R5/6（炭化物、1～2cmの礫含む）
15．黄褐色粘質土層10Y R5/6（炭化物、0.5～1cmの礫含む）
16．暗灰黄色砂質土層2・5 Y5/2（5cmの礫含む）
17．褐色粘質土層10Y R4/4（炭化物含む）
18．黄褐色粘質土層10Y R5/6（炭化物含む）
19．褐色粘質土層10Y R4/4（炭化物、2～3cmの礫含む）
20．にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4（1cmの礫含む）
21．オリーブ褐色土層2・5 Y4/4
22．黒褐色粘質土層2・5 Y3/1
23．灰黄褐色土層10Y R4/2
24．暗灰黄色砂質土層2・5 Y5/2
25．褐灰色粘質土層10Y R4/1（石組溝底石部分）
26．褐灰色砂礫層10Y R5/1（3～4cmの礫多量に含む）
27．黒褐色粘質土層10Y R3/1
28．褐色砂礫層10Y R4/6（4～5cmの礫多量に含む）
29．黄褐色砂質土層10Y R5/6（炭化物、3～5cmの礫含む）
30．オリーブ灰色粘質土層10Y4/2（遺物、10cmの礫含む）
31．黒褐色粘質土層2・5 Y3/1（3～5cmの礫含む）
32．暗褐色粘質土層10Y R3/4（2～3cmの礫含む）
33．にぶい黄褐色粘質土層10Y R5/4（2～5cmの礫含む）
34．黒褐色粘質土層10Y R3/1（炭化物、5cmの礫含む）
35．黄灰色粘質土層2・5 Y5/1（炭化物、15cmの礫含む）
36．灰色砂質土層5 Y5/1（地山）
37．にぶい黄橙色砂質土層10Y R6/3（炭化物、2cmの礫多量に含む）
38．オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/4（炭化物、1cmの礫多量に含む）
39．明黄褐色粘質土層10Y R6/6
40．褐色砂質土層10Y R4/4（炭化物、4～5cmの礫含む）
41．明黄褐色土層10Y R6/6（4cmの礫含む）
42．明黄褐色粘質土層10Y R6/8（炭化物含む）
43．橙色砂質土層7・5 Y R6/8（2～4cmの礫含む）
44．褐色砂質土層10Y R4/6
45．にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3（炭化物、3cmの礫含む）
46．黄褐色砂質土層10Y R5/6（2cmの礫含む）
47．にぶい黄褐色砂質土層10Y R4/3（炭化物、3cmの礫含む）
48．黄褐色砂質土層2・5 Y5/4（2cmの礫含む）
49．オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6（1～4cmの礫含む）
50．にぶい黄橙色砂質土層10Y R6/4（2～4cmの礫含む）
51．黄褐色砂質土層2・5 Y5/3（4～6cmの礫含む）
52．橙色土層10Y R6/6
53．にぶい黄橙色土層10Y R6/3
54．オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/3（2cmの礫含む）
55．浅黄色粘質土層5 Y7/4（0.5cmの礫含む）

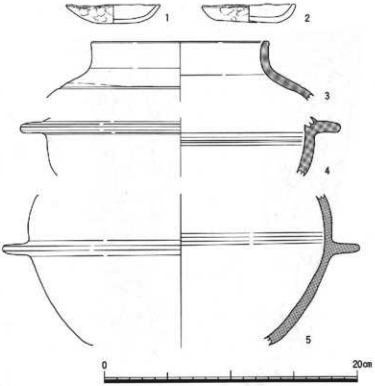
北壁土層

1．撹乱
2．黒褐色砂質土層10Y R2/3（遺物、3cm以上の礫多量、炭化物、焼土、レンガ含む）
3．黒褐色砂質土層10Y R3/2（炭化物、遺物多量、5～10cmの礫含む）
4．黒褐色砂質土層10Y R1.7/1（炭化物、焼土、遺物、4～9cmの礫含む）
5．灰色砂質土層5 Y5/1（地山）
6．褐色粘質土層10Y R4/4（6cmの礫含む）
7．黒褐色土層10Y R3/2
8．暗褐色土層10Y R3/3
9．暗褐色土層10Y R3/4
10．暗褐色土層10Y R2/2
11．オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6（遺物、貝殻、ブロック含む）
12．黄褐色粘質土層2・5 Y5/6（遺物、レンガ多量に含む）
13．暗オリーブ褐色砂質土層2・5 Y3/3（遺物、10cmの礫含む）
14．黒褐色粘質土層2・5 Y3/2（2cmの礫多量に含む）
15．褐色粘質土層10Y R4/6（1～3cmの礫含む）
16．黄灰色砂質土層2・5 Y4/1（1～5cmの礫多量に含む）
17．オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/3（1～3cmの礫若干含む）
18．黒褐色砂質土層2・5 Y3/2（灰土、遺物、5cmの礫含む）
19．オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6（1cmの礫若干含む）
20．灰黄褐色粘質土層10Y R4/2（0.5～1cmの礫若干含む）

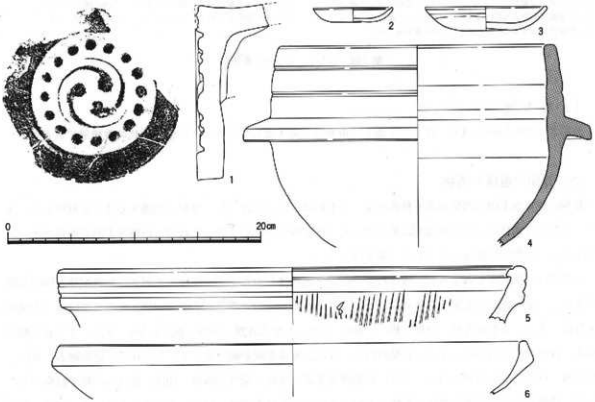
第3図　Gトレンチ南壁・西壁・北壁土層図



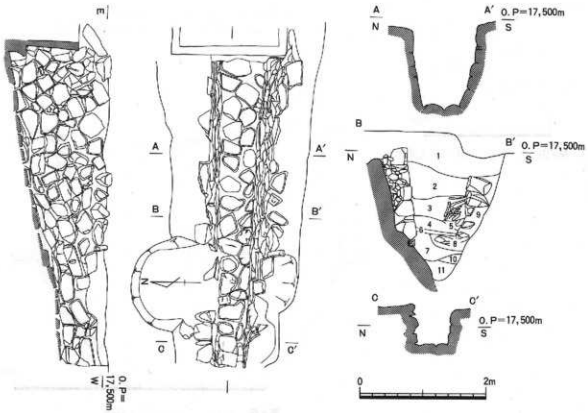
第4図　Gトレンチ SF02出土遺物



第5図　Gトレンチ SF03出土遺物



第6図　Gトレンチ SF01出土遺物



1．撹乱
2．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6（遺物、貝殻、ブロック含む）
3．黄褐色粘質土層2・5Y5/6（遺物、レンガ多量に含む）
4．暗オリーブ褐色砂質土層2・5Y3/3（遺物、10cmの礫含む）
5．灰黄褐色粘質土層10YR4/2（0.5～1cmの礫若干含む）
6．黒褐色粘質土層2・5Y3/2（2cmの礫多量に含む）
7．褐色粘質土層10YR4/6（1～3cmの礫含む）
8．黒褐色砂質土層2・5Y3/2（灰土；遺物、5cmの礫含む）
9．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3（1～3cmの礫若干含む）
10．オリーブ褐色砂質土層2・5Y4/6（1cmの礫若干含む）
11．黄灰色砂質土層2・5Y4/1（1～5cmの礫多量に含む）

第7図 Gトレンチ SD02遺構図

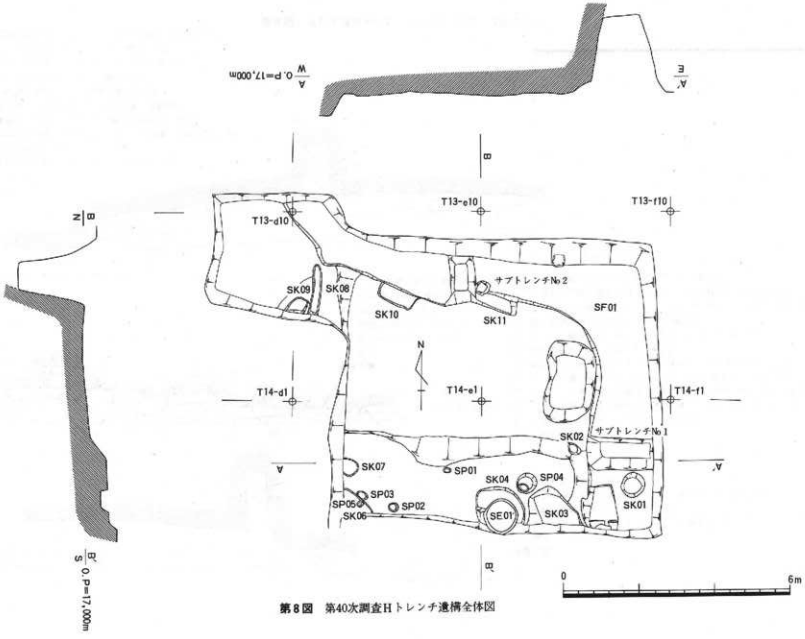
1．基本層序

地山までは0.15mと浅く、ほとんど盛土（第9図―第1層）である。その他も近代の堆積層である。

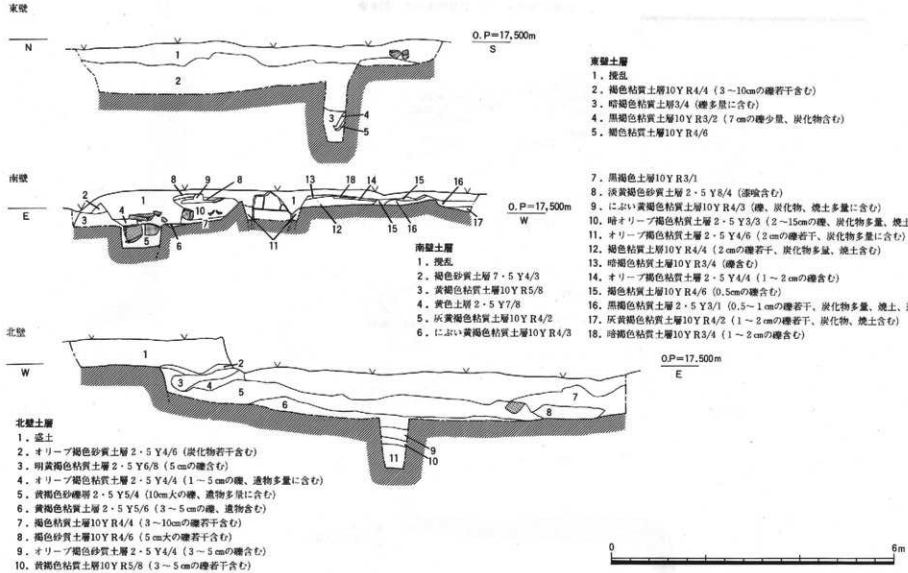
2．II期の遺構と遺物

II期の内堀ＳＦ01の西側屑部を検出した。ＳＦ01は、ここでは「L」字形に屈曲することが判明した。また、これより南側は、再び直線的に続いていることが明らかとなった。これで、内堀ＳＦ01の西側ラインは、確定した。屑部の角度は、急である（第8図）。

この堀は、後世まで埋まらずに残されていたことは前述したが、ここでは、上層まで18世紀後半頃の遺物が堆積し、他の部分に先駆けて埋められていることがわかった。第11図―1～3は、II期有岡城期の土師質土器皿。1は、2型式Ａ類。口径（推）7.3cm。2は、1型式Ａ類。口径（推）7.5cm。3は、3型式Ｂ類である。口径（推）11.3cm。4は、京焼鉄絵皿。5は、京焼風陶器碗。6・7・9・10は、肥前磁器。6は、染付碗。口径9.5cm、器高5.4cm。7は、初期伊万里皿。9は、染付香油壺。10は、見込みの蛇ノ目釉ハギの部分に緑釉を塗り、鉄絵で菊花文を描く大皿。8は、刷毛目唐津鉢。11は、Ｉ型式の堺焼擂鉢。12は、丹波焼甕である。



第8図　第40次調査Hトレンチ遺構全体図



東壁土層

1．撹乱
2．褐色粘質土層10Y R4/4（3～10cmの礫若干含む）
3．暗褐色粘質土層3/4（礫多量に含む）
4．黒褐色粘質土層10Y R3/2（7cmの礫少量、炭化物含む）
5．褐色粘質土層10Y R4/6

南壁土層

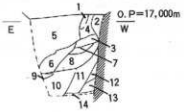
1．撹乱
2．褐色砂質土層7・5 Y4/3
3．黄褐色粘質土層10Y R5/8
4．黄色土層2・5 Y7/8
5．灰黄褐色粘質土層10Y R4/2
6．にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3
7．黒褐色土層10Y R3/1
8．淡黄褐色砂質土層2・5 Y8/4（漆喰含む）
9．にぶい黄褐色粘質土層10Y R4/3（礫、炭化物、焼土多量に含む）
10．暗オリーブ褐色粘質土層2・5 Y3/3（2～15cmの礫、炭化物多量、焼土少量含む）
11．オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6（2cmの礫若干、炭化物多量に含む）
12．褐色粘質土層10Y R4/4（2cmの礫若干、炭化物多量、焼土含む）
13．暗褐色粘質土層10Y R3/4（礫含む）
14．オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/4（1～2cmの礫含む）
15．褐色粘質土層10Y R4/6（0.5cmの礫含む）
16．黒褐色粘質土層2・5 Y3/1（0.5～1cmの礫若干、炭化物多量、焼土、遺物含む）
17．灰黄褐色粘質土層10Y R4/2（1～2cmの礫若干、炭化物、焼土含む）
18．暗褐色粘質土層10Y R3/4（1～2cmの礫含む）

北壁土層

1．盛土
2．オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/6（炭化物若干含む）
3．明黄褐色粘質土層2・5 Y6/8（5cmの礫含む）
4．オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/4（1～5cmの礫、遺物多量に含む）
5．黄褐色砂礫層2・5 Y5/4（10cm大の礫、遺物多量に含む）
6．黄褐色粘質土層2・5 Y5/6（3～5cmの礫、遺物含む）
7．褐色粘質土層10Y R4/4（3～10cmの礫若干含む）
8．褐色砂質土層10Y R4/6（5cm大の礫若干含む）
9．オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4（3～5cmの礫含む）
10．黄褐色粘質土層10Y R5/8（3～5cmの礫若干含む）
11．オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/3（5cm大の礫、炭化物含む）

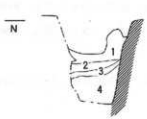
第9図　第40次調査Hトレンチ東壁・南壁・北壁土層図

サブトレンチNo 1



1．暗オリーブ褐色粘質土層2・5Y3/3（1cmの礫若干含む）
2．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3（1～8cmの礫、木根多量に含む）
3．暗褐色粘質土層10YR3/4（1cmの礫若干含む）
4．黄褐色粘質土層10YR5/8（1cm以下の礫多量、遺物含む）
5．褐色粘質土層10YR4/4
6．黒褐色粘質土層10YR3/2（炭化物、1cmの礫含む）
7．黄褐色粘質土層10YR5/6（1cmの礫若干含む）
8．褐色粘質土層10YR4/4（炭化物、遺物多量、1cmの礫若干含む）
9．褐色粘質土層10YR4/6
10．にぶい黄褐色粘質土層10YR4/3（1～7cmの礫若干含む）
11．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/6（2cmの礫多量に含む）
12．黄褐色粘質土層2・5Y5/8（1～2cmの礫若干含む）
13．黄褐色粘質土層2・5Y5/6（3cmの礫若干含む）
14．明黄褐色粘質土層2・5Y6/6（1～10cmの礫含む）

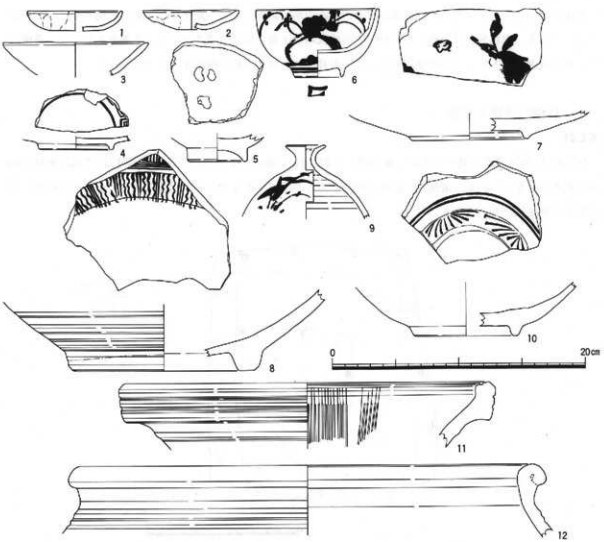
サブトレンチNo 2



1．黄褐色粘質土層2・5Y5/6（遺物、3～5cmの礫含む）
2．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/4（1～3cmの礫多量、炭化物、遺物含む）
3．黄褐色粘質土層10YR5/8（1cmの礫含む）
4．オリーブ褐色粘質土層2・5Y4/3（遺物、3～10cmの礫含む）

0　4m

第10図　SF01サブトレンチN01・2土層図



第11図　Hトレンチ SF01出土遺物

Ｉトレンチ

第24次調査Ｄトレンチのｓ Ｆ01と第38次調査のｓ Ｆ01の行方をみるために緊急に設けたトレンチである。その結果、第24次調査Ｄトレンチのｓ Ｆ01はここまで続いておらず、第38次調査のｓ Ｆ01も東に折れず第38次調査区付近でそのまま終わっていることが推定できた。第24次調査Ｄトレンチのｓ Ｆ01は、その後の伊丹市教員委員会の調査で、西に「く」字に折れて延びていることが判明した。

１．Ⅱ期の遺構と遺物

ＳＤ01

検出したのは、北東方向に延びる溝である（第12図）。検出長3.56ｍ、幅2.2ｍ、深さ0.55ｍを測る。時間の関係で全掘できなかったが、少量の土師質土器皿を検出することができた。この溝は、第24次調査の遺構とは無関係の新たな遺構である。

第14図－１・２は、２型式Ａ類の土師質土器皿。口径（推）7.5㎝と８㎝。３は、１型式Ｂ類。口径10.2㎝である。

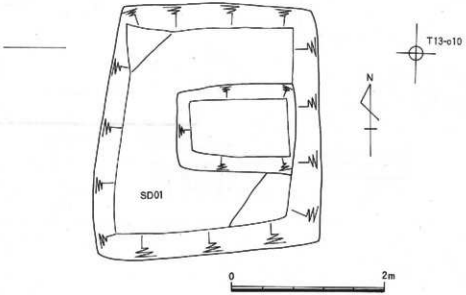
Ｊトレンチ

前述のように、ダンプカーの洗車施設建設のための事前調査である。南半分は、第24次調査Ｂトレンチにかかっている。内堀ｓ Ｆ01の中にあたり、明治時代の埋土層で収まる深さのトレンチ調査となった。遺構には、第24次調査Ｂトレンチの北壁にかかっていた井戸ｓ Ｅ01の全形を検出することとなった。

１．Ⅳ期の遺構と遺物

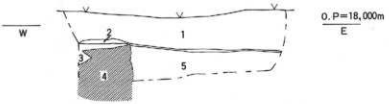
ＳＥ01

ＳＥ01は、近・現代の井戸である（第15図）。上部は1辺1.06ｍの正方形のレンガ積み井筒、下部は直径1.36ｍの素掘りとなっている。遺物は、磁器の破片があるが図示できなかった。昭和に入ってからの井戸で、立ち退きで廃絶したものである。



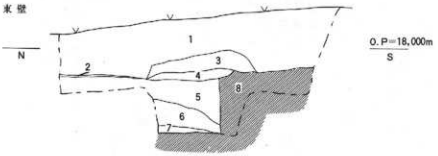
第12図　第40次調査Ｉトレンチ遺構全体図

北壁



1．撹乱
2．明黄褐色粘質土層10Y R6/8
3．黄褐色粘質土層10Y R5/8（炭化物含む）
4．黄橙色粘質土層10Y R7/8（地山）
5．オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/6（炭化物、焼土若干含む）

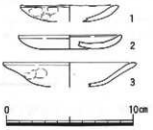
東壁



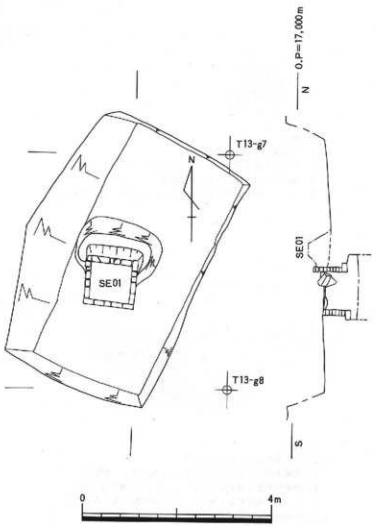
1．撹乱
2．明黄褐色粘質土層10Y R6/8
3．黄褐色粘質土層2・5 Y5/4（炭化物、焼土、遺物含む）
4．黄褐色粘質土層10Y R5/6（5～10cm大の礫多量に含む）
5．オリーブ褐色粘質土層2・5 4/6（炭化物、焼土若干含む）
6．黄褐色粘質土層10Y R5/8
7．褐色粘質土層10Y R4/6
8．黄橙色粘質土層10Y R7/8（地山）

0　3m

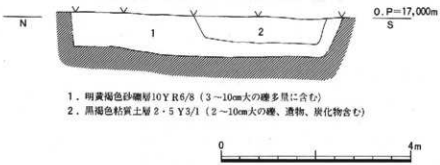
第13図　第40次調査Ｉトレンチ北壁・東壁土層図



第14図　ＩトレンチSD01出土遺物



第15図　第40次調査Ｊトレンチ遺構全体図



1．明黄褐色砂礫層10ＹＲ6/8（３～10cm大の礫多量に含む）
2．黒褐色粘質土層２・５Ｙ3/1（２～10cm大の礫、遺物、炭化物含む）

第16図　Ｊトレンチ東壁土層図

第2章　結　　語

第1節　在　城　期

今回報告する調査区のなかで、Ⅰ期伊丹城期に属する遺構は、第27次調査区ＳＥ09・ＳＰ09・ＳＤ04のみである。しかし、これによって、ここも伊丹城期の居住区域であったことがわかる。

Ⅱ期有岡城期には、南北方向に延びる第27次調査及び第35次調査ＳＦ01、東西方向に延びる第27次調査ＳＤ11・第35次調査ＳＤ04・11に区切られたなかに、第27次調査ＳＥ08や第35次調査ＳＥ04といった井戸がそれぞれ１基ずつみられ、それぞれの区画がひとつずつ屋敷地としてあったことを示している。特に第27次調査区は、第23次調査区と一続きの屋敷地と考えられ、その面積は非常に広い。また、溝や井戸から出土した遺物は、第23次調査ＳＦ01・02と変わらぬ質を有しており、やはり上級家臣の屋敷地と考えられる。さらに第35次調査区ＳＥ04は、第23次調査区の遺構と同様に焼土層を伴っており、同時期に廃絶したことを示している。第27次調査ＳＦ01は、東側に土塁の存在も想定できる。この堀は、17世紀前半まで開口していたが、これは、有岡城期以降の池田之助（元助）の時代にも利用されたためであろう。

このほか、第27次調査区の地鎮遺構と思われるＳＰ77や池と考えられるＳＫ103～105・107、各地で類例のある埋甕遺構Ｓ K28・ＳＩ06など興味ある遺構もみられた。

一方、第40次の内堀確認調査では、内堀が鈎形に屈曲して南に延びることが確認され、西側のラインが確定した。この時点では、東側の肩は土塁の下部と推定された。その後、伊丹市教育委員会の調査で、この推定が正しいことが実証された。また、攻城用と考えられる堀の施設を検出したことも大きな成果であった。今後の城郭の調査に同様の施設がみられる可能性も高く、類例の増加に期待したい。

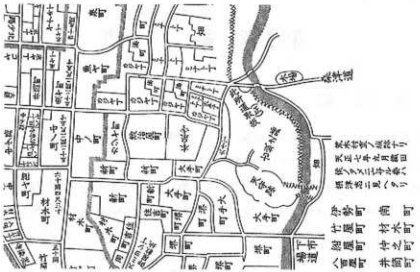
第2節　伊丹郷町期と近代

1．伊丹郷町期と近代の様相

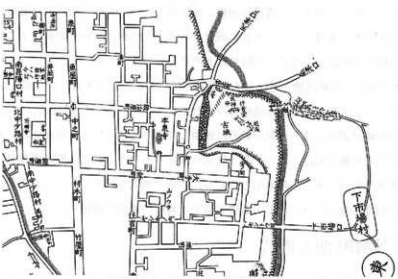
伊丹郷町期の初期には、前述したＳＦ01以外に遺構はない。周辺は、「侍町」がなくなった後、本泉寺を除いて畑地と化したことが土層によって確認できる。それは、『寛文九年伊丹郷町絵図』(八木1982年）に描かれた様子と一致する。

ここに再び町屋が進出してくるのは、Ⅲ－Ａ期すなわち18世紀後半になってからであった。この時期の町屋の姿は、建物の位置がわからないため、判然としない。しかし、一定間隔で井戸がみられ、町の中心部でみられるような３～５間の間口を持つ町屋が建ち並んだのであろう。この時期の遺構からは、屋瓦はそれほど出土せず、当時の家屋の屋根は一部瓦葺きであった。さて、この町屋の進出の背景には、第１分冊結語で述べたように、この頃東側の台地下に設けられた船着き場との関連が深くかかわっているとみられる。第27次調査区では、次のⅢ－Ｂ期の前身と思われる酒造関係の遺構ＳＫ128～130などが北側でみられる。

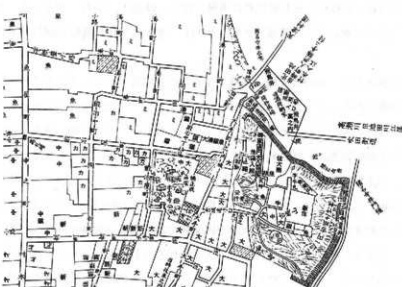
Ⅲ－Ｂ期すなわち文化年間以降には、第27次調査区全体に酒造関係の遺構がみられ、第23次調査区と合わせて、この地域は一変する。第35次調査区の規模の大きな民家ＳＢ01も、これと一連のものであろう。伊丹郷町の酒造生産高の第２のピークは、まさにこの時期にあり、伊丹郷町のこの時期を象徴する出来事といえよう。この時期の遺構からは、大量の屋瓦が出土する。この地域に建てられた、そびえ建つような大規模な酒蔵の屋根は、輝く甍の波をみせていたと考えられる。



寛政八年(1796)伊丹郷見図

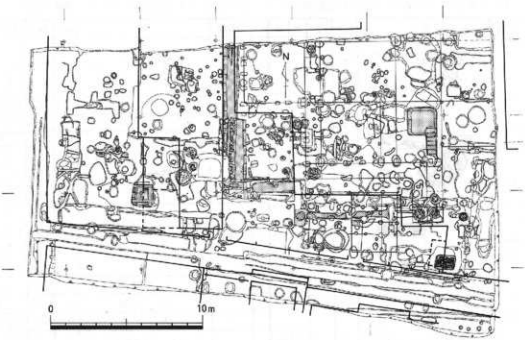


文化(1804～1817)改正伊丹之図



天保十五年(1844)伊丹郷町分間絵図

第1図　江戸時代絵図（八木哲浩編『伊丹古絵図集成』伊丹市立博物館　1985年より）



第２図　第35次調査Ⅳ期遺構と既存建物

Ⅳ期すなわち明治時代後半から大正時代に入ると、酒造関係の遺構はすべて廃絶し、変わって再び町屋が建ち並ぶこととなる。伊丹郷町の酒造業は、幕末頃には酒価の下落などによってそれまで拡大を続けた経営が一転して悪化し、多くの有力酒造家が没落し、衰退していくこととなる。明治時代に入るとやや持ち直すが、近代化の遅れから、明治30年代には再び没落していく酒造家が出る（『伊丹市史』第３巻　1972年）。この地域の酒蔵の所有者については記録がなく、残念ながら不明であるが、この動向に奇しくも一致している。その後は、第１分冊で触れたように、この調査の契機となった再開発が開始されるまでほとんど変わらない。第２図は第35次調査区の既存建物とⅣ期の遺構との関連を示したものであるが、第１分冊で報告した調査区と同様に大谷焼便槽を初めとして、よく一致していることがわかる。

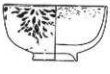
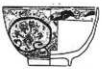
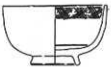
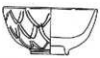
２．伊丹郷町期Ⅲ－Ａ期の遺物組成

第１分冊では、特にⅡ期有岡城期の遺物組成について詳述した。ここでは、伊丹郷町期のⅢ－Ａ期（18世紀後半～19世紀前半）の遺物組成についてのデータを提示し、そこから読み取れることについて触れてみたい。

表１は、Ⅲ－Ａ期の遺構のうち、最も遺物が豊富であった第27次調査ＳＥ10と、屋敷地を異にする第35次調査ＳＥ02の主な遺物を数えたものである。それにあたっては、１/３以上の残りのものをカウントした。また、擂鉢については、底部まで遺存している例が少なく、明石焼製品を含んでいる可能性があることを断っておく。さて、これを製品別に比率を示したのが表２である。これをみると、肥前製品が総合値で41.8％を占めている。次に多いのが在地産の土師質土器類である。堺焼は擂鉢だけであるがこれも総合値9.2％を占める。瀬戸・美濃焼製品も少ないながら一定量の出土がみられる。

これを器種別にみたのが、表３である。灯明具は、ＳＥ10とＳＥ02では出土比率が大きく異なっている。他の遺構では、ＳＥ10に近い比率でみられ、ＳＥ02の状況はやや特殊といえる。次に多いのが碗（総合値15.7％、蓋を除く）、次いで皿（総合値11.1％、灯明皿を除く）となっている。すなわち、碗は皿の約1.86倍とな

表1　第27次調査SE10・第35次調査SE02遺物数量（碗・灯明皿S=1/4 皿S=1/6 鍋・壺・甕S=1/8）

	器種	碗	SE10	SE02	計	%
1	染付		4	0	4	14.2 %
2	赤絵		2	2	4	14.2 %
3	青磁染付		0	3	3	10.7 %
4	染付		2	1	3	10.7 %
5	染付		1	0	1	3.6 %
6	染付		1	3	4	14.2 %
7		その他	2	7	9	32.4 %
		合計	12	16	28	100 %
		碗蓋	SE10	SE02	計	%
1	染付		0	1	1	9 %
2	青磁染付		2	1	3	27.3 %
3	染付		1	3	4	36.4 %
4		その他	1	2	3	27.3 %
		合計	4	7	11	100 %
		皿	SE10	SE02	計	%
1	染付		0	1	1	6.7 %
2	染付		1	2	3	20 %

	器種	皿	SE10	SE02	計	%
3	染付		0	1	1	6.7 %
		その他	7	3	10	66.6 %
		合計	8	7	15	100%
		鉢	SE10	SE02	計	%
1	染付		0	1	1	33.3 %
2	唐津系		0	0	0	0 %
		その他	1	1	2	66.7 %
		合計	1	2	3	100 %
		湯呑	SE10	SE02	計	%
1	染付		4	0	4	50 %
2	青磁染付		1	0	1	12.5 %
3		その他	3	0	3	37.5 %
		合計	8	0	8	100 %
		灯明具	SE10	SE02	計	%
1	伊賀・信楽		1	0	1	3.1 %
2	土師質土器		0	1	1	3.1 %
3	柿釉		1	11	12	37.5 %
4	柿釉		1	6	7	21.9 %
5	産地不明		2	1	3	9.4 %
6	紅皿		1	0	1	3.1 %
7		その他	1	6	7	21.9 %
		合計	7	25	32	100 %
		土瓶・急須	SE10	SE02	計	%
1	伊賀・信楽		0	2	2	18.2 %

	器種	鍋	SE10	SE02	計	%
2	伊賀・信楽		0	2	2	18.2 %
3		その他	0	7	7	63.6 %
		合計	0	11	11	100 %
		焙烙				
1	在地土器		2	0	2	40 %
2	在地土器		2	1	3	60 %
3		その他	0	0	0	0
		合計	4	1	5	100 %
		擂鉢	SE10	SE02	計	%
1	堺		7	7	14	100 %
2		その他	0	0	0	
		合計	7	7	14	100 %

	器種	風炉竈	SE10	SE02	計	%
1	在地土器		2	1	3	7.5 %
2		その他	0	1	1	25 %
		合計	2	2	4	100 %
		壺	SE10	SE02	計	%
1	丹波		1	3	4	100 %
2		その他	0	0	0	0
		合計	1	3	4	100 %

	器種	甕	SE10	SE02	計	%
1	丹波		1	1	2	100 %
2		その他	0	0	0	0
		合計	1	1	2	100 %

	SE10	SE02	計
総計	55	82	137

っている。次に擂鉢、鍋など調理具、煮沸具が多く、貯蔵具の甕・壺は合わせても4.5%しかない。

碗では、肥前のものが96.3%を占め、圧倒的な占有率を示す（表4）。このほか、伊賀・信楽焼製品が少量みられる。ただ、第23次調査区ＳＥ07には京焼系や瀬戸・美濃焼の碗が含まれており、遺構によってはこれらの製品が少量加わることとなろう。また、タイプ別にみると、端反りの碗５は少なく、染付の丸型碗１や色絵碗２、広東型碗６など、他のものは平均的に出土している。しかし、遺構別では、比率が異なる。

皿も、肥前のものが86.6%を占め、ほぼ独占している。特にＳＥ10では、100%である。このほか少量の三田青磁がみられるが、これは焼き継ぎされており、高級品として扱われたものと考えられる。日常的には、肥前磁器がほとんどを占めていたことが想像される。また、皿をタイプ別にみると、厚手の染付皿２が多いことが指摘できる。

煮沸具の鍋・急須・土瓶は、すべて伊賀・信楽焼もしくは伊賀・信楽焼系のもので占められている。その比率は、遺構によって異なる（表6）。全体の出土量が少ないこともデータのバラツキを起こす一因と考えられる。したがって、積極的にはいえないが、鍋が多いことは指摘できる。

表2　種類別組成

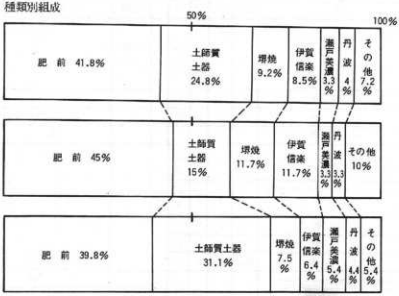


表3　器種別組成

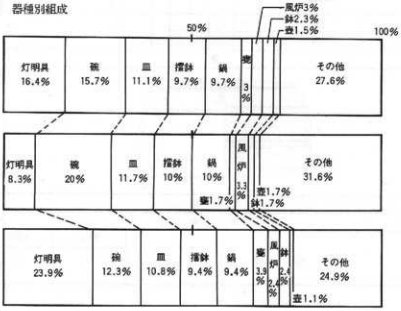


表4　碗組成

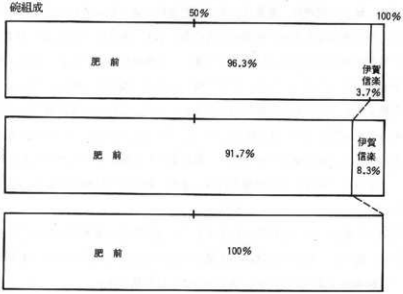


表5 皿組成

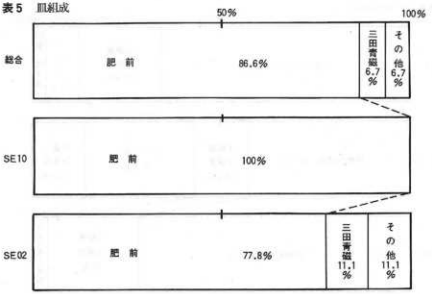


表6 煮沸具組成

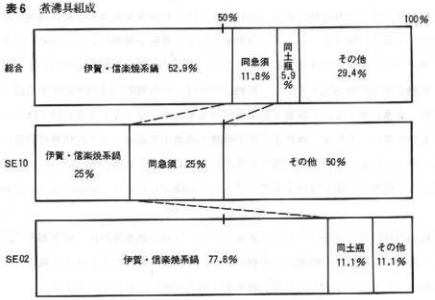


表7 貯蔵具組成

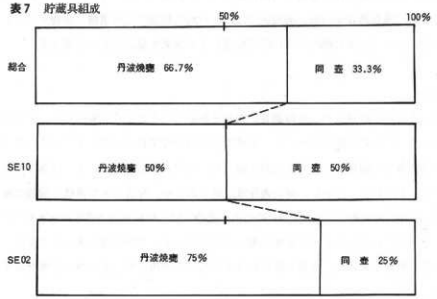
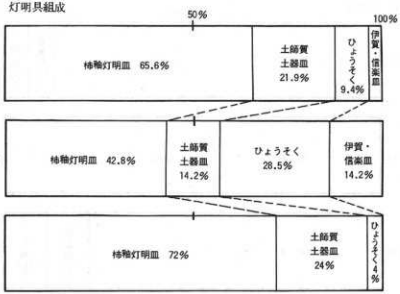


表8　灯明具組成



貯蔵容器の甕・壺は、すべて丹波焼である。伊丹郷町では、丹波焼製品は17世紀には壺・甕・擂鉢の中世的代表器種のほとんどをほぼ独占しているが、18世紀に入ると擂鉢が堺焼によって占められるようになり、それ以外の壺・甕についての独占を維持することとなる。なかでも甕が7割を占めている。

灯明具では、柿釉灯明皿が65.6%を占める。柿釉灯明皿は、伊丹郷町では18世紀前半にはみられないが、この18世紀後半頃に急激に増える。土師質土器皿も21.9%を占め、全くなくなるわけではない。土師質土器皿には、大型のものが多い。これは、前代までの土師質土器皿小型品のシェアが柿釉灯明皿によって占有されたための現象と考えられる。伊賀・信楽焼（京焼系）皿の量は、それほど多くない。

この他、焙烙では、底部との境が突出するタイプ1がこの頃からみられ、焙烙のなかでは40%を占めている。

以上、違う屋敷地の井戸出土遺物について、組成をみた。今回の調査地域は、伊丹郷町でも18世紀後半頃に新たに成立した地域で、特にこの時期は、階層の点からみれば一般の町人の居住区域と考えられる。したがって、この様相は、そのような人々の日常容器の有り様を反映したものといえよう。

しかし、今回の試みは、限られた遺構での限られた時代の成果であり、なおデータの蓄積を必要とすることはいうまでもない。現在調査中の宮ノ前地区では、江戸時代初期からの遺構・遺物がみられ、今後これをデータ化することによって、伊丹郷町の江戸時代を通しての成果を提示できると考える。

3．おわりに

発掘調査以来、丸6年が経過した。発掘調査が困難を極めたことはすでに触れたが、その後本格的な整理作業に取り掛かるまでにも紆余曲折があった。最終的に今日の作業終了に至るまで、実に多くの人々が作業に携わり、また実に多くの関係者の尽力と協力を賜った。その責務をとりあえず一段落させたことに関係者一同、胸をなでおろしている。しかし、報告書作成の常であるが、報告できた遺構・遺物は検出遺構・遺物の数割に満たない。コンテナ箱にして約2,000箱の出土遺物には、なお多くの情報が含まれていよう。遺構もしかりである。今後、これをどのように作業を進めるかについて、その方策を考えることは、当初からこの調査に携った私達の責務であるが、今回の資料が多くの人々に活用され、より多くの研究成果が挙げられることを期待したい。

参考文献

浅岡俊夫「有岡城跡における既往の調査と二・三の考察」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ』大手前女子学園有岡城跡調査委員会　1987年

浅岡俊夫「伊丹城（付、有岡城）」『日本城郭体系12　大阪・兵庫』新人物往来社　1981年

浅岡俊夫・橋本　久「有岡城跡発掘調査報告書Ⅴ」伊丹市教育委員会　1983年

『荒木村重と伊丹城』伊丹市博物館　1979年

岩田　隆他「特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ　第10・11、第54次調査」福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館　1988年

上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究№２』日本貿易陶磁研究会　1982年

上田秀夫「16世紀から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究Ⅰ』関西近世考古学研究会　1991年

大槻　伸「丹波とその周辺」『日本やきもの集成　近畿Ⅱ』平凡社　1988年

岡崎正雄「丹波焼について」『中尾城跡―近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書11―』兵庫県教育委員会　1989年

小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁№２』日本貿易陶磁研究会　1982年

小野正敏「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究№４』日本貿易陶磁研究会　1984年

大橋康二他『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館　1984年

大橋康二『肥前陶磁』ニューサイエンス社　1989年

勝田邦夫・阿部嗣治『若江遺跡発掘調査報告書　遺構編』（財）東大阪市文化財協会　1982年

勝田邦夫・阿部嗣治『若江遺跡発掘調査報告書　遺物編』（財）東大阪市文化財協会　1983年

勝田邦夫・吉村博恵『若江遺跡第25次発掘調査報告書』（財）東大阪市文化財協会　1987年

鐘ヶ江一朗・宮崎康雄「高槻城三ノ丸跡」『高槻市文化財年報　昭和63・平成元年度』高槻市教育委員会　1991年

川口宏海「有岡城跡出土の中国陶磁」『貿易陶磁研究№８』日本貿易陶磁研究会　1988年

川口宏海「脇衣壺考」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究紀要　第９号』大手前女子学園　1989年

川口宏海「16世紀における大和型土釜の動向」『中・近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会　1990年

川口宏海「大谷焼探訪記」『いなの　文化財認査室だより№５』大手前女子大学史学研究所文化財調査室　1990年

北野隆亮「中世末期の瓦質碗・皿についての覚書―大和・紀伊の出土資料を中心に―」『関西近世考古学研究Ⅱ』関西近世考古学研究会　1992年

黒田俊雄編『伊丹中世資料　伊丹資料叢書２』伊丹市役所　1974年

建築資料研究会「水琴窟アラカルト」『庭別冊　庭の水景』1986年

河野通明「角先グワの成立―織豊期技術革新の一事例―」『関西近世考古学研究Ⅰ』関西近世考古学研究会　1991年

（財）東大阪市文化財協会『若江遺跡第38-2次発掘調査現地説明会資料』1989年

渋谷高秀「瓦質土器出現期の地域性―南北朝期における和泉・紀伊の土器様相―」『考古学研究第38巻第３号』考古学研究会　1991年

蔀（しとみ）　関月『日本山海名産図会』名著刊行会　1979年

鳴谷和彦「堺環濠都市遺跡発掘調査報告―宿院町東４丁　ＳＫＴ14地点・調御寺跡―」『堺市文化財調査報告　第20集』堺市教育委員会　1984年

白神典之「堺摺鉢と明石摺鉢」『江戸の陶磁器』発表要旨・資料編　江戸遺跡研究会　1990年

鈴木　充他『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅰ』伊丹市教育委員会　1976年

鈴木　充他『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅱ』伊丹市教育委員会　1977年

鈴木　充他『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅲ』伊丹市教育委員会　1978年
鈴木　充他『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅳ』伊丹市教育委員会　1979年
鈴木重治「京焼と京焼写し－生産と流通－」『江戸の陶磁器』発表要旨・資料編　江戸遺跡研究会　1990年
石（鳥羽）希聡『和漢硯譜』寛政七年（1975）
田上雅則『池田城跡－主郭部発掘調査概要報告１－』池田市教育委員会　1990年
千葉徳爾注・解説『日本山海　名産・名物図会』社会思想社　1970年
豊田　進「阿部のやきもの」『日本やきもの集成10』平凡社　1988年
中井　公『多聞廃城跡発掘調査概要報告』奈良市教育委員会　1979年
中村　浩他『大阪府文化財調査報告30　陶邑　Ⅲ』大阪府教育委員会　1978年
中村　浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1981年
名倉鳳山『日本の硯』日貿出版社　1986年
槍崎彰一他『萩焼古窯』日本工芸会山口支部　1990年
野田芳正「堺環濠都市遺跡発掘調査報告－市之町東４丁　ＳＫＴ19地点－」『堺市文化財調査報告第二十集』堺市教育委員会　1984年
長谷川　真「丹波系擂鉢について」『中・近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中近世土器研究会　1988年
藤澤典彦『中・近世瓦の研究－元興寺編－』元興寺文化財研究所　1982年
藤澤良祐他『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要５』瀬戸市歴史民俗資料館　1986年
藤澤良祐他『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要６』瀬戸市歴史民俗資料館　1987年
藤澤良祐他『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要７』瀬戸市歴史民俗資料館　1988年
藤本史子「伊丹郷町における出土陶磁器の様相」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ』大手前女子学園有岡城跡調査委員会　1987年
前川　要「有岡城惣構の再検討」『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ』大手前女子学園有岡城跡調査委員会　1987年
前川　要「近世城下町発生に関する考古学研究」『ヒストリア　第121号』大阪歴史学会　1988年
前川　要「伊丹郷町の都市構造の変化とその歴史的背景」『いなの文化財調査集だよりNo２』大手前女子大学史学研究所文化財調査室　1990年
前川　要『都市考古学の研究－中世から近世への展開』柏書房　1991年
間壁忠彦・間壁葭子「備前研究ノート(1)」『倉敷考古館研究集報　第１号』倉敷考古館　1966年
間壁忠彦・間壁葭子「備前研究ノート(2)」『倉敷考古館研究集報　第２号』倉敷考古館　1966年
間壁忠彦・間壁葭子「備前研究ノート(3)」『倉敷考古館研究集報　第５号』倉敷考古館　1968年
間壁忠彦他『世界陶磁全集　4　桃山(-)』小学館　1977年
間壁忠彦・間壁葭子「備前研究ノート(4)（－その後の新資料－）」『倉敷考古館研究集報　第18号』倉敷考古館　1984年
間壁忠彦『備前焼』ニューサイエンス社　1991年
百瀬正恒「平安京及び近郊における土器の生産と消費」『中・近世土器の基礎研究』日本中近世土器研究会　1985年
水野正好「江州高島郡石硯資料警見録」『滋賀考古学論叢　第２集』滋賀考古学論叢刊行会　1985年
南川孝司・淡谷高秀・森村健一「＝資料紹介＝貝塚市畜羽焼窯の表面採集遺物」『関西近世考古学研究Ⅰ』関西近世考古学研究会　1991年
森田克行他『摂津高槻城本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会　1984年
森田　勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No２』日本貿易陶磁研究会　1982年
森村健一「堺環濠都市遺跡出土陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究No４』日本貿易陶磁研究会　1984年
八木哲浩編『伊丹市史』第１～５巻　伊丹市役所　1968～1972年
八木哲浩編『荒木村重史料　伊丹史料叢書４』伊丹市役所　1978年

八木哲浩編『伊丹古絵図集成　伊丹史料叢書6』伊丹市役所　1982年
柚木　学「近世伊丹酒造業の展開と小西家－酒造家資料調査によせて－」『地域研究いたみ』第18号　伊丹市博物館　1989年
吉岡泰英・月輪　泰他『特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅲ　第4・13次調査』福井県立朝倉氏遺跡資料館　1990年

有岡城跡・伊丹郷町の調査
—その成果と課題—

あとがきに代えて

藤井直正

I

大手前女子大学が、伊丹市の委託を受けて実施している「有岡城跡・伊丹郷町の発掘調査」は、昭和60年度における"三井パークマンション建設に伴う発掘調査"をふくめると、これにたずさわってから現在に至るまで、7年の歳月を経過した。

第1分冊の「調査の経過」でくわしく述べたことであるが、本報告書の"JR伊丹駅前市街地再開発に伴う発掘調査"は、現場での作業を昭和61年2月から12月に実施し、これの資料整理と報告書作成のための作業は、平成元年度より3カ年継続事業として進め、この第2分冊の刊行をもって完了することになった。

本来、一冊にまとめて刊行しなければならないはずの報告書を、二冊に分けざるを得なかったのは、それなりの事情と理由があるが、まず担当者個人の問題として、こうした共同作業に対する心構えの不足と、制約された条件の中での作業の進め方がまちまちであった等を指摘しなければならない。いずれにしても、作業の進行についての連絡・調整と指導・監督に当たる立場にある私の至らなかったことであり、その責任を痛感している。その結果として、二分冊としての刊行、さらに刊行時期の延引、経費の増大等について、これを寛恕していただいた関係の方がたに、まず御礼とおわびを申しあげたい。

それはそれとして、市街地再開発という大きな事業が、周知の埋蔵文化財包蔵地の中で実施されるという事態にあって、市当局のそれに対する認識がほとんどなく、何とか最小限で済ませうという状況の中で、再開発対象面積の全体に及ばなかったにしても、まがりなりにも発掘調査を実施し、再開発によって滅失する遺構を記録としてのこすことができたことは何にも増して大きな成果であった。

それは、当時の市教育委員会の、教育長以下担当各位の埋蔵文化財調査に対するご努力のたまものであり、敬意を表しておきたい。しかし、その背後にあって、最小限の調査に止めたいという意向に反して、最大限の調査を行なう必要を主張しつづけ、限られた期間と経費の中で発掘調査を進めざるを得なかった我々の苦労は並大抵ではなかったことも書き留めておきたい。

現場での作業に加えて、調査資料、中でも尨大な量に上る出土遺物の整理作業が大へんであった。報告書にとり上げる資料の選択は担当者を悩ませたが、見方によってはとりのこした物もあるのではないだろうか。

でき上った報告書を前にして、そのページをめくりながら、過ぎ去った日のことを回想するにはまだ日が浅いが、"ようやくでき上った"という気持がこみ上げて来る。

これを機会に過去7年間における足跡をたどりながら、この調査に続いて現在も実施している"宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査"についての概況や展望を考えて見ることも必要である。さまざまの問題をかかえ、これといった方策を持たないまま模索をつづけている昨今であるが、「その成果と課題」とするほどのものではないとは思いつつ、日ごろ心にかかることがらを記してみたい。

II

ふり返ってみると、大坂城三の丸跡の調査を手がけて以来、大手前女子短期大学の伊丹市への移転・開校が一つのきっかけとなって、伊丹市が計画・施行されている市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に加わることになった。

本報告書の内容となっている"ＪＲ伊丹駅前地区"は、昭和51年に国の史跡に指定された有岡城跡主郭部分の西側に隣接する地域であり、有岡城の時代には武家屋敷等が存在していたことが予想され、発掘調査によって当然それらの遺構が検出されるはずであるが、その上には有岡城が落城して後に、町屋が形成され、いわゆる伊丹郷町の中に組み入れられたことが絵図等によって明らかであり、時代は江戸時代以降であっても、発掘調査の対象とする必要があることを主張しつづけたのである。

昭和62年度から開始した"宮ノ前地区市街地再開発に伴う調査"は、その対象地域が宮ノ前地区すなわち、有岡城の惣構にふくまれ、近世に入ってからの伊丹郷町の中核部であり、当初からこれを対象とする発掘調査として出発した。はじめのころは比較的広い面積を調査することができたが、その後家屋の立ち退き等の事情があって大幅に遅れている。市当局の意向としては平成５～６年度には埋蔵文化財調査を完了させる予定と聞いている。従って、過去７年間を費し、今後なお数年、資料整理および報告書の作成を合わせるとそれ以上の歳月を要することが予想されるのである。

いずれにしても、我々が手がけている調査は、ここ数年来とみに関心が寄せられている城館・都市遺跡を対象とし、それが中世から近世への胎動期にあって、摂津国守護に任ぜられた荒木村重が築城し、天下布武をめざした織田信長によって滅ぼされた有岡城とその城下であることをいま一度思い起こしておきたい。さらにこの有岡城は、惣構という構造をもち、近世都市のさきがけとなり、落城後はそのまま伊丹郷町として、さらに、現在の伊丹市に至るまで、西摂における在郷町として大きな役割を担っていたことである。

こうした意味において、我々による有岡城跡・伊丹郷町調査が、城館・都市遺跡への関心を高める一助となり、その成果に大きな期待が寄せられていることは確かであろう。

昭和60年度における開始当初からこの調査に参加し、昭和61年から平成２年まで主任調査員として調査推進に尽力してくれた前川　要君は、有岡城跡・伊丹郷町をこよなきフィールドとし、緻密な考察を加えて調査成果をふまえた論考を次々発表したことは周知の通りである。これによって我々の調査が世に知られると共に、他の遺跡に対する考察したいくかの論考を加えて、『都市考古学の研究―中世から近世への展開―』(柏書房、1991年刊）として結実させたことは喜ばしい。同様に、現在も主任調査員として調査を担当している川口宏海君も、調査成果を基礎とする所見を研究会で発表し、論考を書いている。

かねてより、私の考えとしては、調査に従事する者はその成果をさまざまの形で発表し公開することが必要であると考え、実践して来たつもりである。そうした意味で、調査の成果について、どんな小さなことでも、できるだけ早く関係者や一般の人びとに知らせることから考えつき、刊行して来たのが、概報をわかりやすくした各種のパンフレットや『文化財調査室だより』である。さらに、それにも増して必要なことが報告書の刊行であることはいうまでもない。それは調査を担当した者としての責任であり、今回のような、執筆者のうちの一人が決まった時間に間に合わせることができず、まわりとの連絡も十分にとらないで仕事を進めるといった事態を招いたことに苦慮したのである。このことは、グループとして、あるいはチームとして行なう調査の場合、その責任分担や自己の役割について各個人がしっかり認識しておくことの大切さである。これまで私自身がそれぞれの立場で仕事をして来た中で当然と思って来たルールが守られないのがどうしてなのか、私自身、不思議でならない。

Ⅲ

「有岡城跡・伊丹郷町の調査」は、さまざまな問題をかかえながらも、今日まで関係各位のご理解・ご支援と、主任調査員、卒業以来この仕事に携ってくれている卒業生を起用しての調査員、そして調査補助員としてその時ごとに仕事に従事してくれた学生諸君をはじめ、実に多くの人びとに支えられて推進して来た。

これからなお何年とつづくこの仕事を完了させるためには、現在の調査体制を、これからの仕事量に合わせて再編成する必要があり、そのためには学内に設置されている企画・運営委員会の、委員長以下諸先生のご意見を聞くとともにお力添えを仰がなければならない。

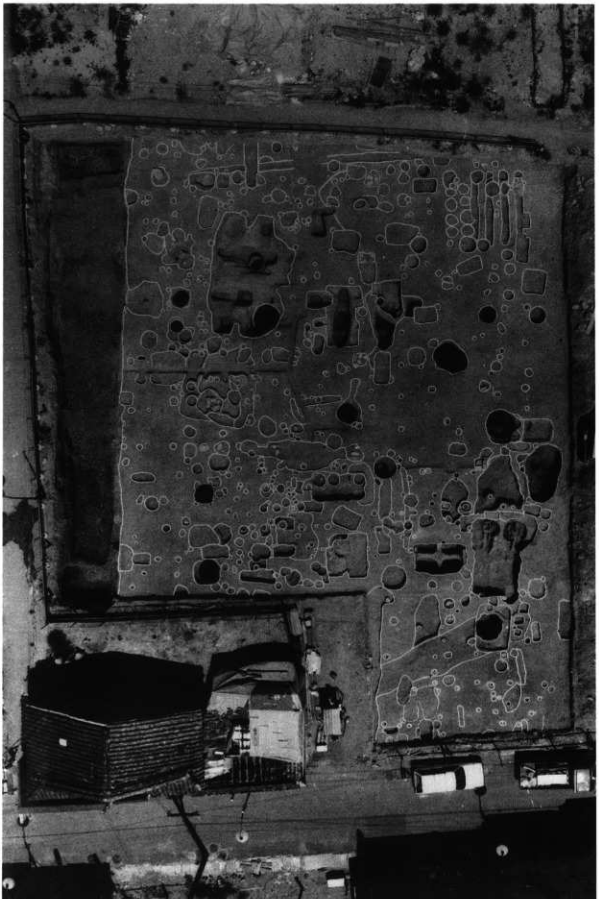
また、この調査の元締であり、指導・助言の立場にある市教育委員会が、ＪＲ伊丹駅前・宮ノ前両地区の調査を担当した、我々大手前女子大学以外の諸チームとの調整や、将来的に有岡城跡・伊丹郷町の調査成果をどのように生かすのかという展望をふくめて、さし当たり尨大な量に上る出土遺物をどのように保存・公開するのかといったことへのアプローチも必要である。

我々としても、報告書の刊行はもとより、調査成果を、担当した者がさまざまな形で発表することも大切であるが、より重要なことは、学内・学外をふくめて、調査した者がまず足元でその成果を展示・公開することが先決であると私は考えている。かねがねこのことを気にしながら諸種の事情があって延引しているが是非実現させたい。各地の学会に情報を提供し、その世話をすることも必要であるが、足元を固めたいというのが私の持論である。

新年度から新しい体制をつくり、今後なお長期にわたる「有岡城跡・伊丹郷町調査」を進めたいという、これまでの反省の上に立っての抱負を記した。学内・学外にわたる関係各位の暖かいご支援を心より念願し、あとがきに代えたい。

（大手前女子大学史学科教授
史学研究所、文化財調査室長）

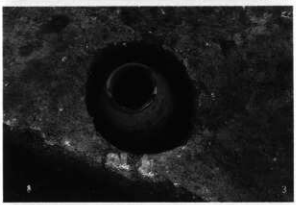
図　　版



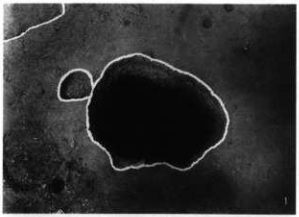
第27次調査　全景（垂直）

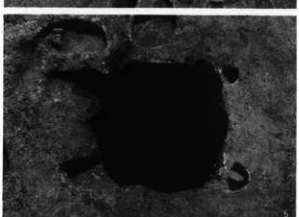
1　第27次調査　南側（東より）

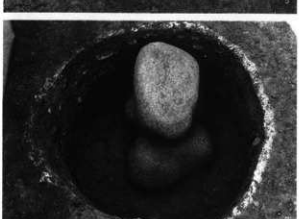
2　第27次調査　北側（東より）



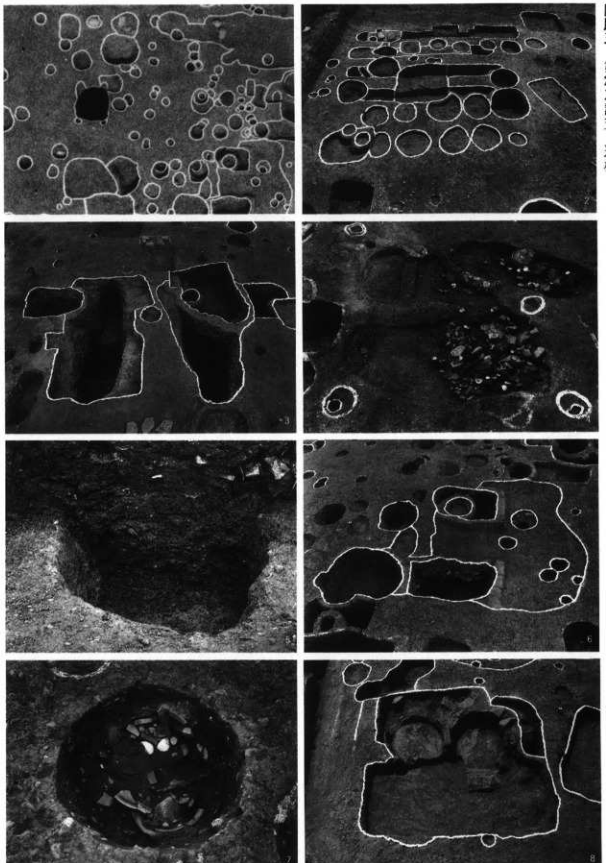
1　SE09　断面（南より）
2　SD11（東より）
3　SP77　　（北より）
4　SF01（北より）
5　SF01　NO1畦（南より）
6　SF01　北壁（南より）







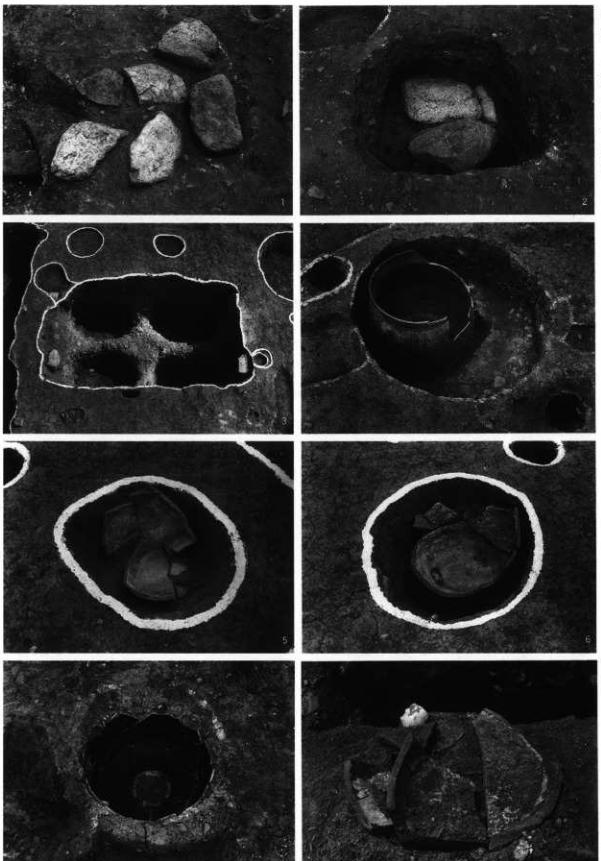
1　SE08（南より）
2　SK28・SI06（南より）
3　SK28（北より）
4　SK103・104・105・107・SP233（南より）
5　SE03（西より）
6　SE05（南より）
7　SE10（南より）
8　SE11（東より）



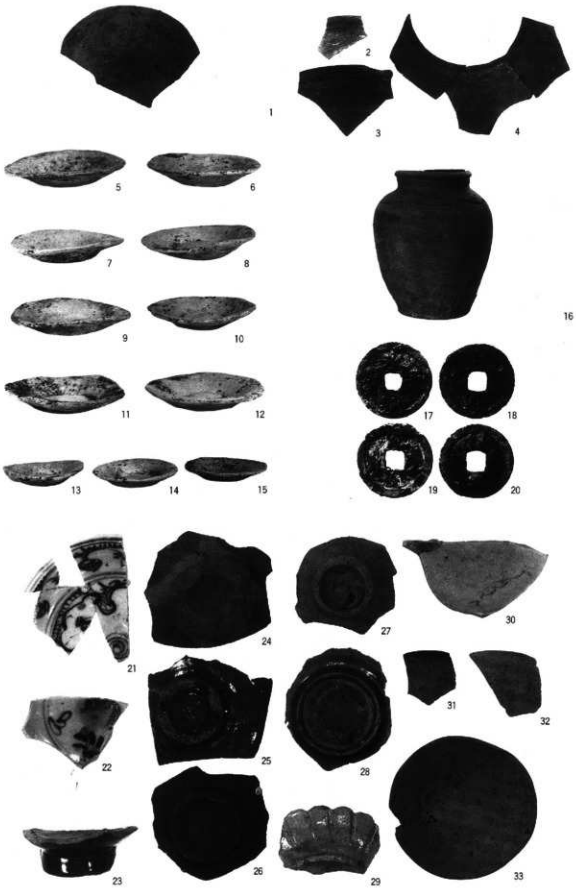
1　SB01　垂直
2　SK152他・SD08・09・10（西より）
3　SK129・130（南より）
4　SK07・08（東より）
5　SK74（南より）
6　SK42・54・SP221（南より）
7　SK137（東より）
8　SX02（東より）

SB02・SK199　垂直

SX01（南より）



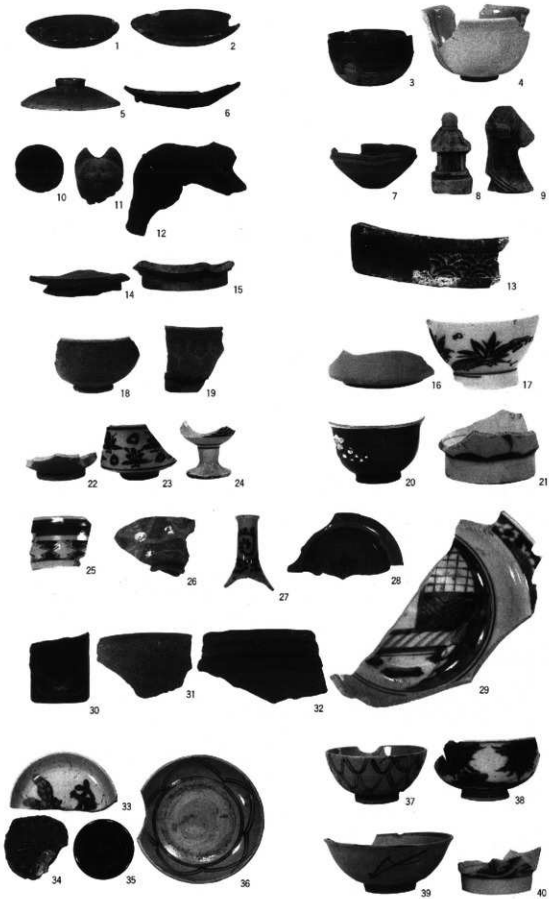
1　SB01・SS03　墨書（北より）
2　同SS09　2段目墨書（南より）
3　SK18（北より）
4　SI05（東より）
5　SI01（西より）
6　SI02（西より）
7　SI04（南より）
8　SI12（北より）



SD11(1)・SE09(2～4)・SP77(5～20)・SF01(21～33)

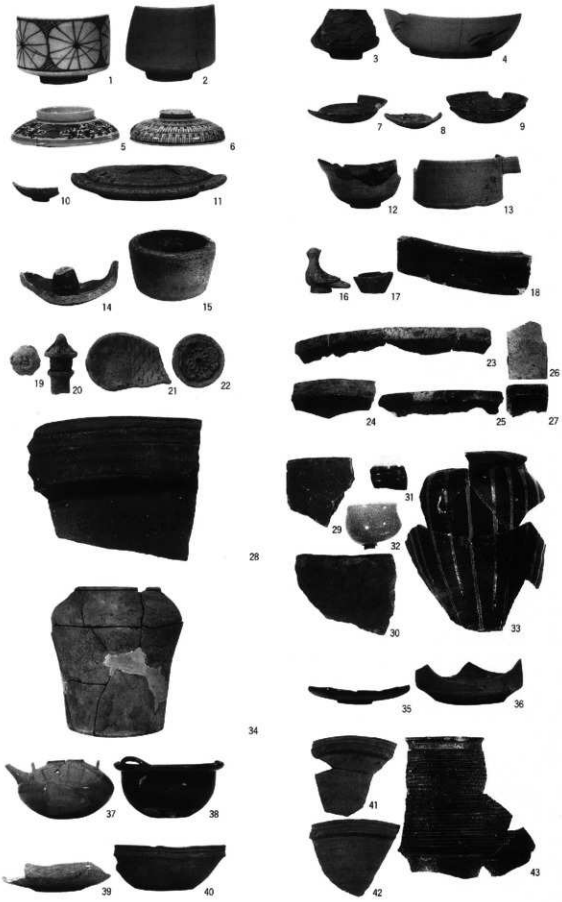
SF01(1～10)・SE08(11～22)

SI06(1)・SK105(2・3)・SP09(4～6)・SE03(7～22)

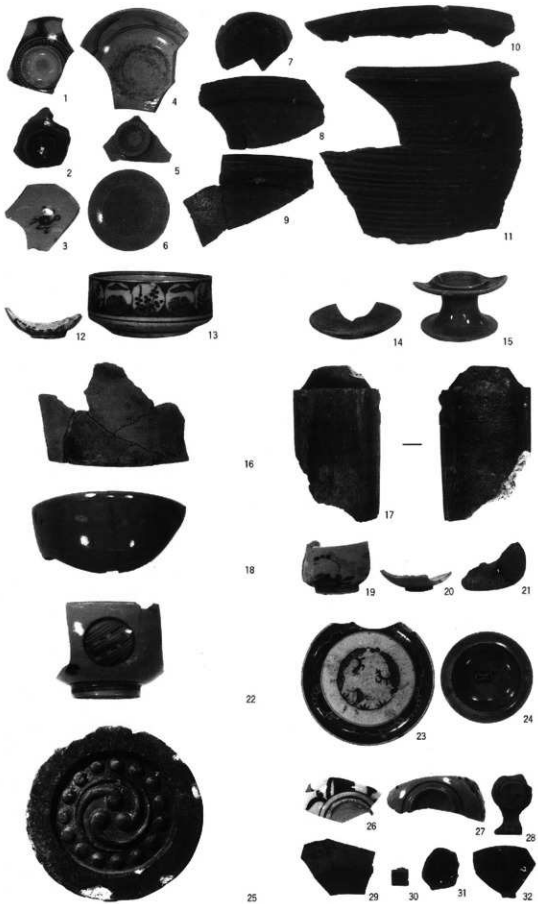


SE03(1～13)・SE05(14～32)・SE10(33～40)

図版十二　第27次調査　遺物



SE10(1～43)

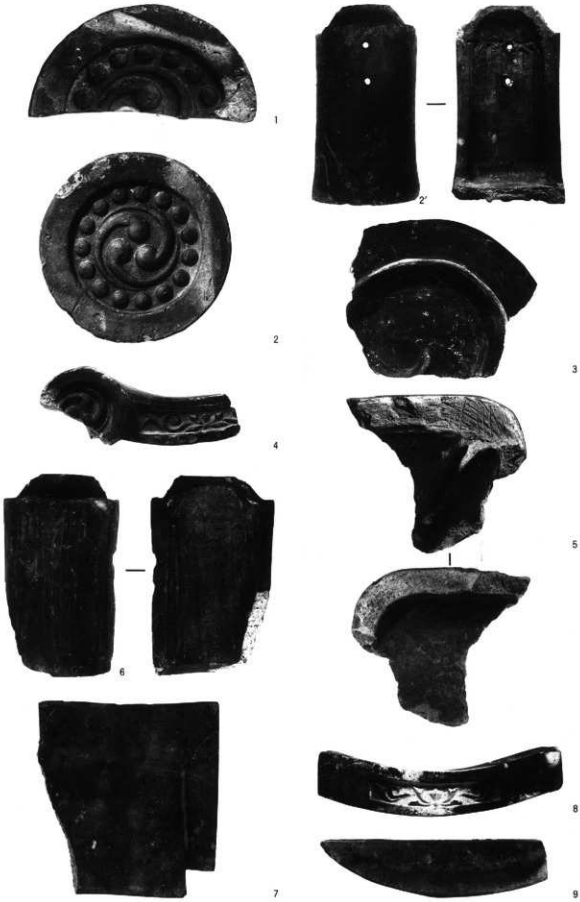


SE11(1～17)・SP175(18)・SD10(19～21)・SK130(22)
SK01(23～25)・SK05(26～29)・SK06(30～32)

SK06(1・2)・SK07(3～8)・SK08(9～23)・SK54(24・25・28・29)
SK53(26・27)・SK63(30・31)・SK74(32)・SK42(33・34・37・39～42)・SP221(35・36・38・43)

SP145(1～3)・SK137(4～7)・SX01(8～31)

図版十六　第27次調査　遺物

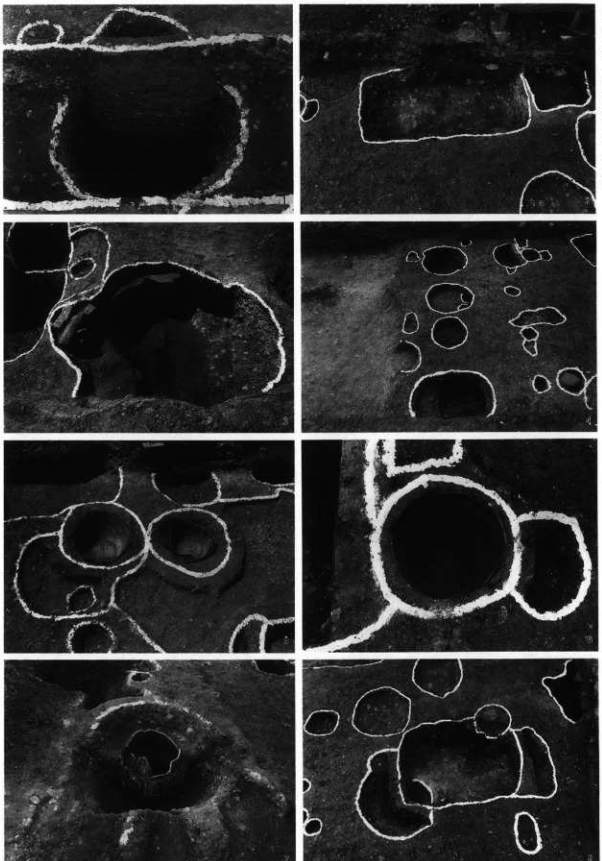


SX01(1～9)

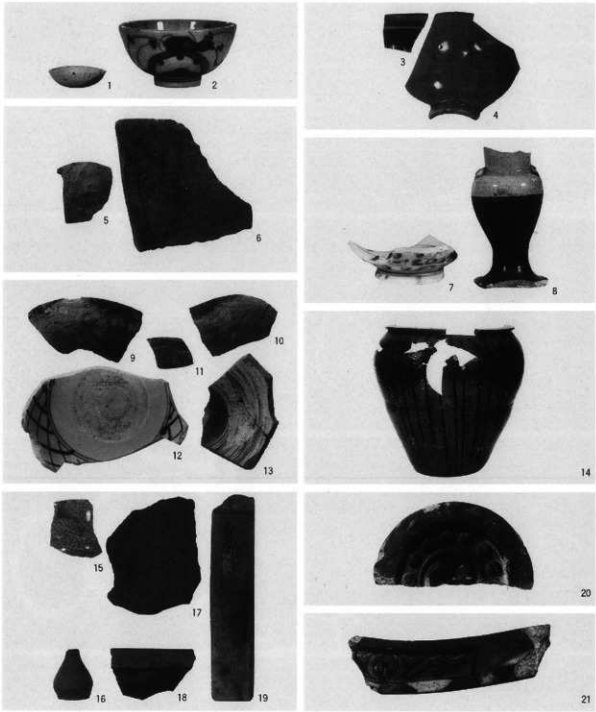
SX01(1～3)・SK18(4・5)・SI05(6～10)
SI04(11)・SI01(12)・SI02(13)

第33次調査　東側全景（北より）

第33次調査　西側全景（西より）



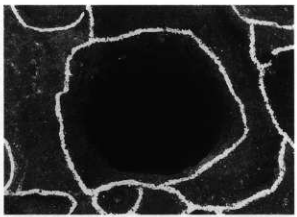
1　SE02（南より）
2　SK47（北より）
3　SX01（東より）
4　SK36・39・35・34（北より）
5　SI02・03（東より）
6　SI04（北より）
7　SI01（南より）
8　SK53（北より）



SK21(1～4)・SK47(5～8)・SK36(9～13)・SI04(14)・SK53(15～21)

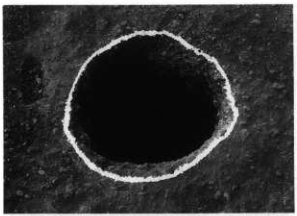
第35次調査　全景（北より）

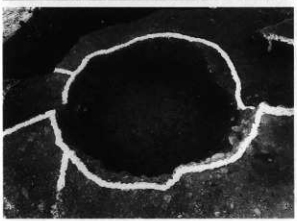
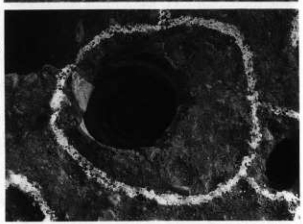
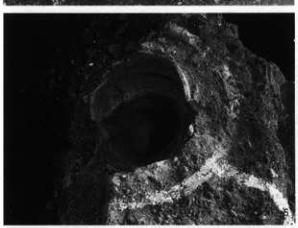
SF01　他（北より）



1　SF01　畦（北より）
3　SD04・11　（東より）

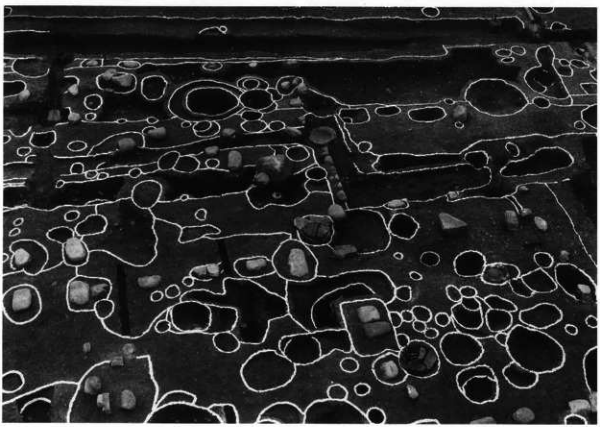
2　SE04　（西より）
4　SD04　東壁土層（西より）
5　SD11　NO2畦（東より）
6　SD11　遺物出土状態



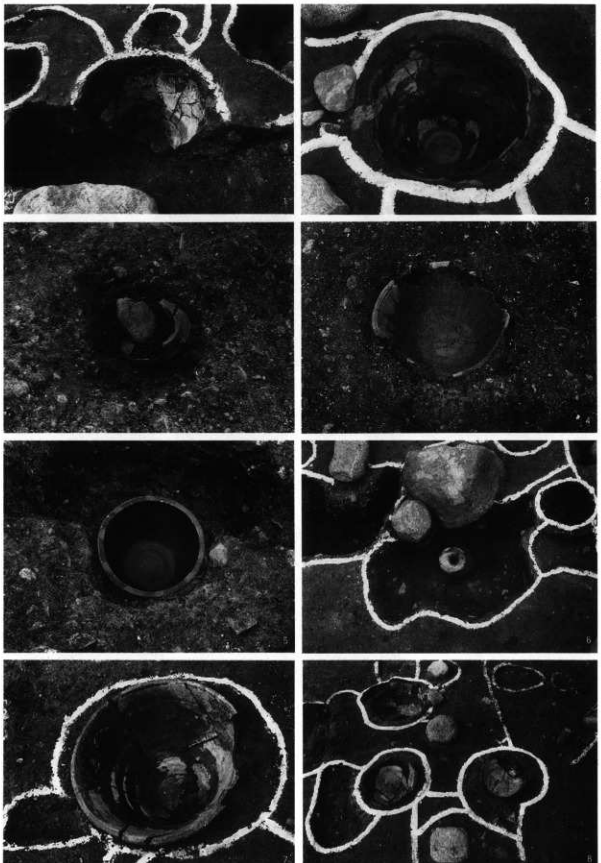




1　SE02　(東より)
2　SK34　(北より)
3　SP110　(東より)
4　SI11　(北より)
5　SI12　(北より)
6　SD07・08・SA01　(東より)
7　SS18　下面(北より)

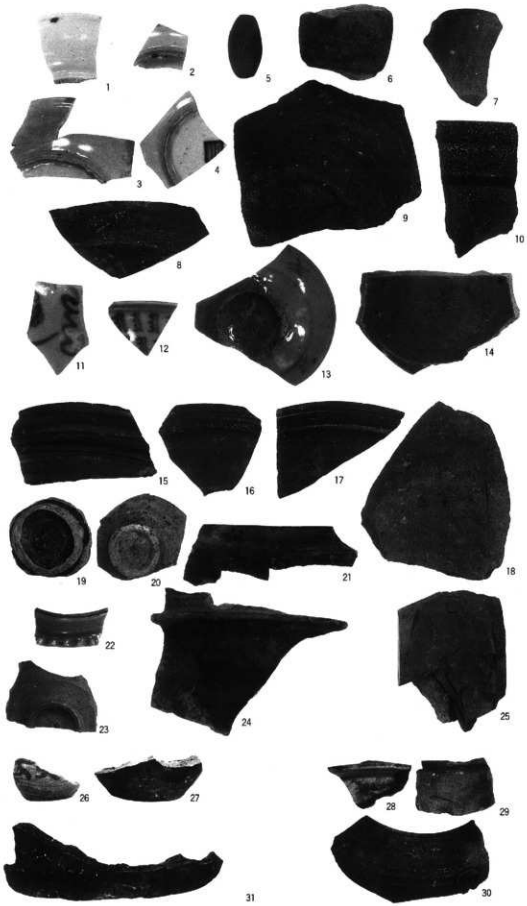
SB01南東部とSB02（北より）



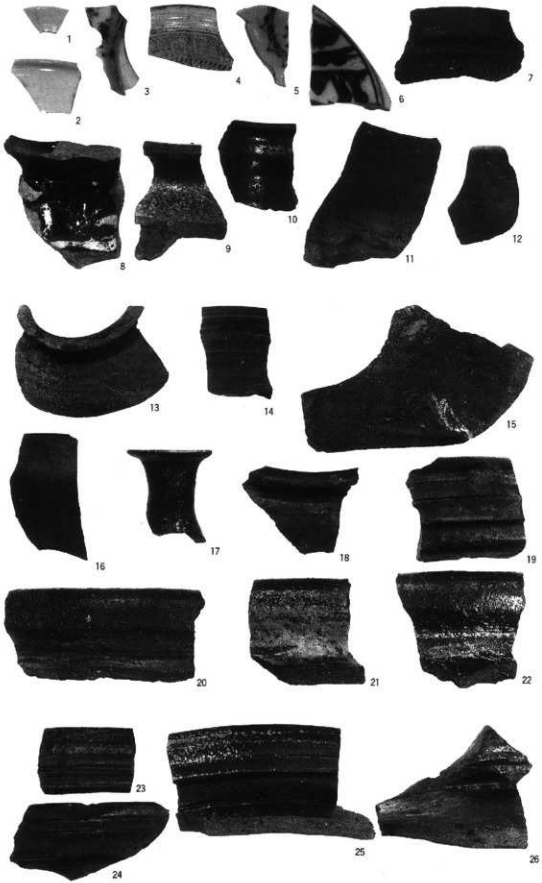
SB01南西部とSB03・04（北より）



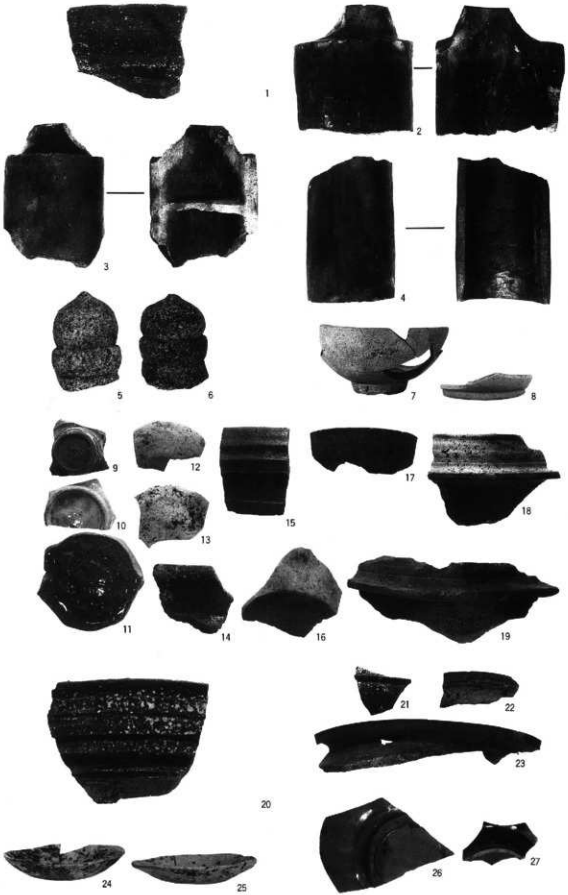
1　SI02（東より）
2　SI05（西より）
3　SI09（北より）
4　SI10（南より）
5　SI14（東より）
6　SK191・SI06（北より）
7　SI07（東より）
8　SI04・03（東より）



SF01(1～25)・SE04(26～31)



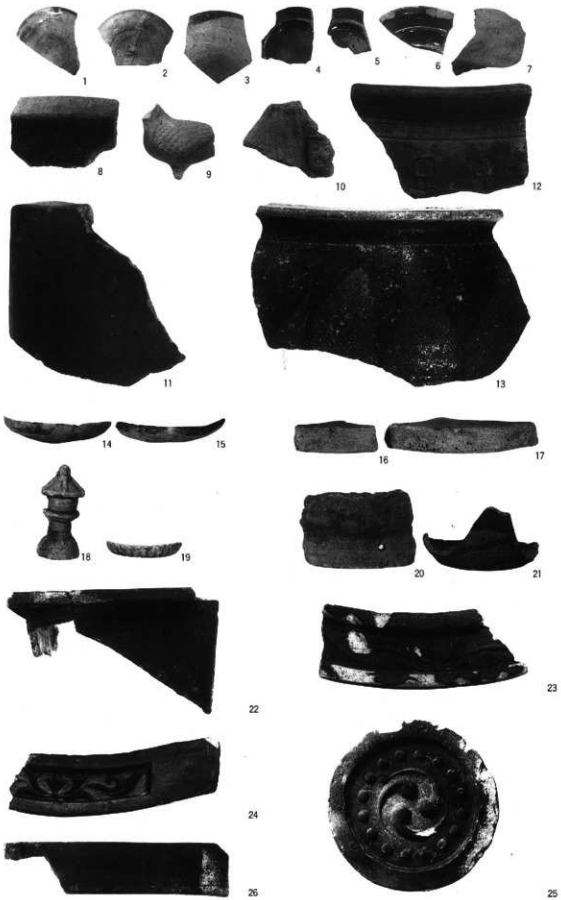
SE04(1～26)



SE04(1～6)・SD04(7～20)・SD11(21～25)・SK73(26・27)

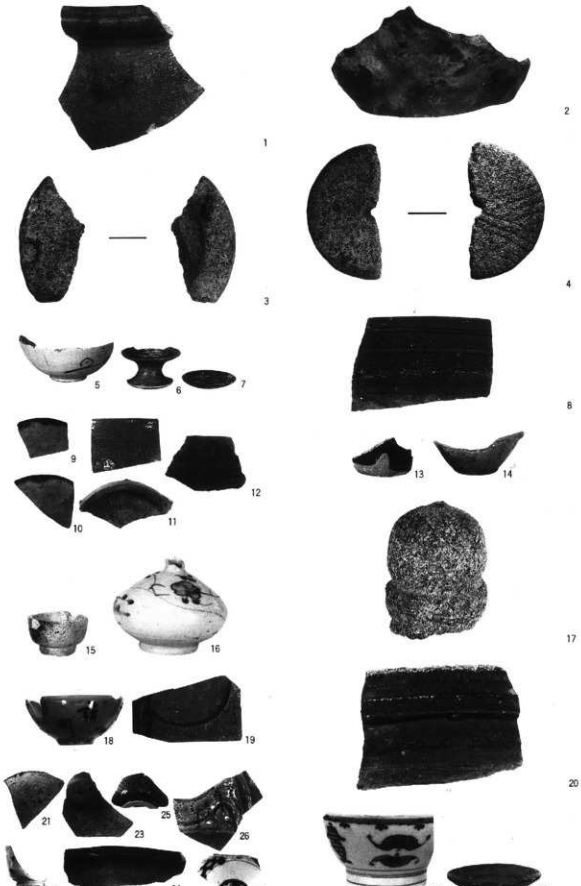
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

SE02(1~38)



SE02(1～26)

図版三十一　第35次調査　遺物



SE02(1～4)・SK34(5～8)・SP110(9～11・13～16)・SP102(12)
SD07(17～19)・SD08(20)・SS18(21～29)

SS18(1・2)・SI02(3)・SI05(4)・SI09(5)・SI10(6)
SI14(7)・SK191(8)・SI06(9)・SI11(10)・SI04(11)

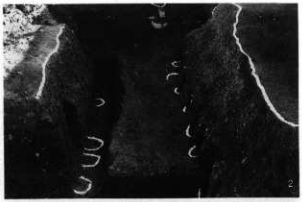
SI07(1)・SI04(2)・包含層(3・4)

図版三十四　第40次調査　Gトレンチ遺構

第40次調査　Gトレンチ二次面全景（西より）

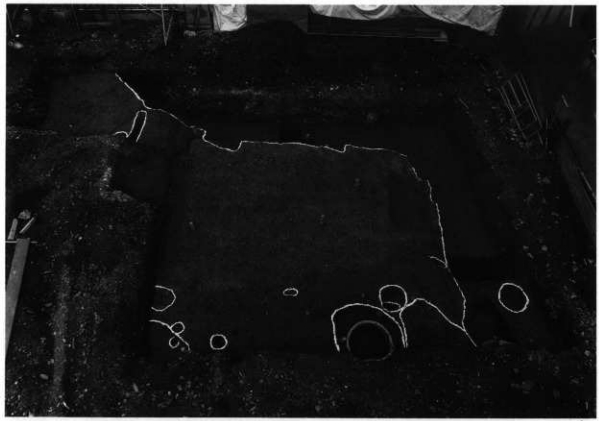
SF01（手前）・SF03（奥）（東より）

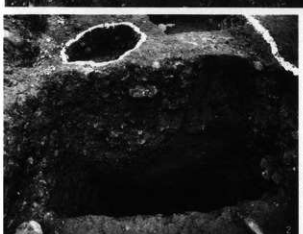
図版三十五　第40次調査　Gトレンチ遺構



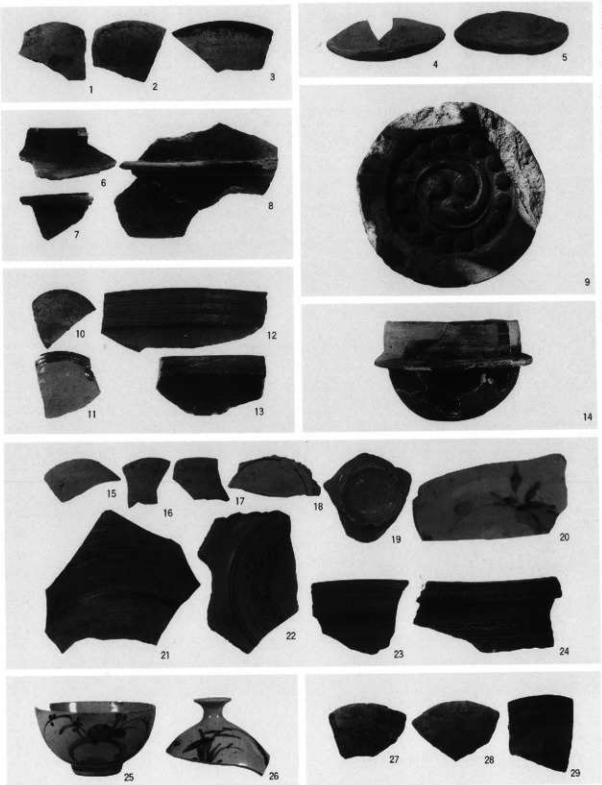
1　SF01　土層（北より）
2　SF03　杭跡列検出状況（西より）
3　SF02　南壁杭列跡（北より）
4　SD02（西より）
5　第40次調査　Gトレンチ一次面全景（北より）

図版三十六　第40次調査　H・I・Jトレンチ遺構





1　第40次調査　Hトレンチ全景（南より）
2　SF01　サブトレンチNO1（北より）
3　SF01　サブトレンチNO2（西より）
4　第40次調査　Iトレンチ全景（南より）
5　第40次調査　Jトレンチ全景（南より）



Gトレンチ SF02(1～3)・SF03(6～8)・SF01(9～14)・Hトレンチ SF01(15～26)
Iトレンチ SD01(27～29)

ＪＲ伊丹駅前市街地再開発に伴う発掘調査報告書

有岡城跡・伊丹郷町　II

第２分冊

編集・発行　伊丹市教育委員会
〒664 伊丹市千僧1-1
TEL 0727-83-1234（代表）
大手前女子大学史学研究所
〒664 伊丹市稲野2-2-2 大手前女子短期大学内
TEL 0727-70-6216（直通）

平成４年３月31日

印刷・有限会社　真陽社
京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL 075-351-6034